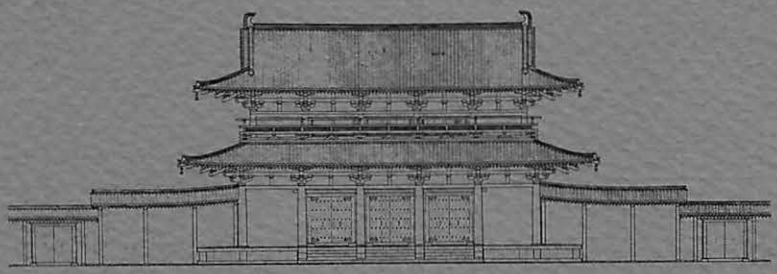
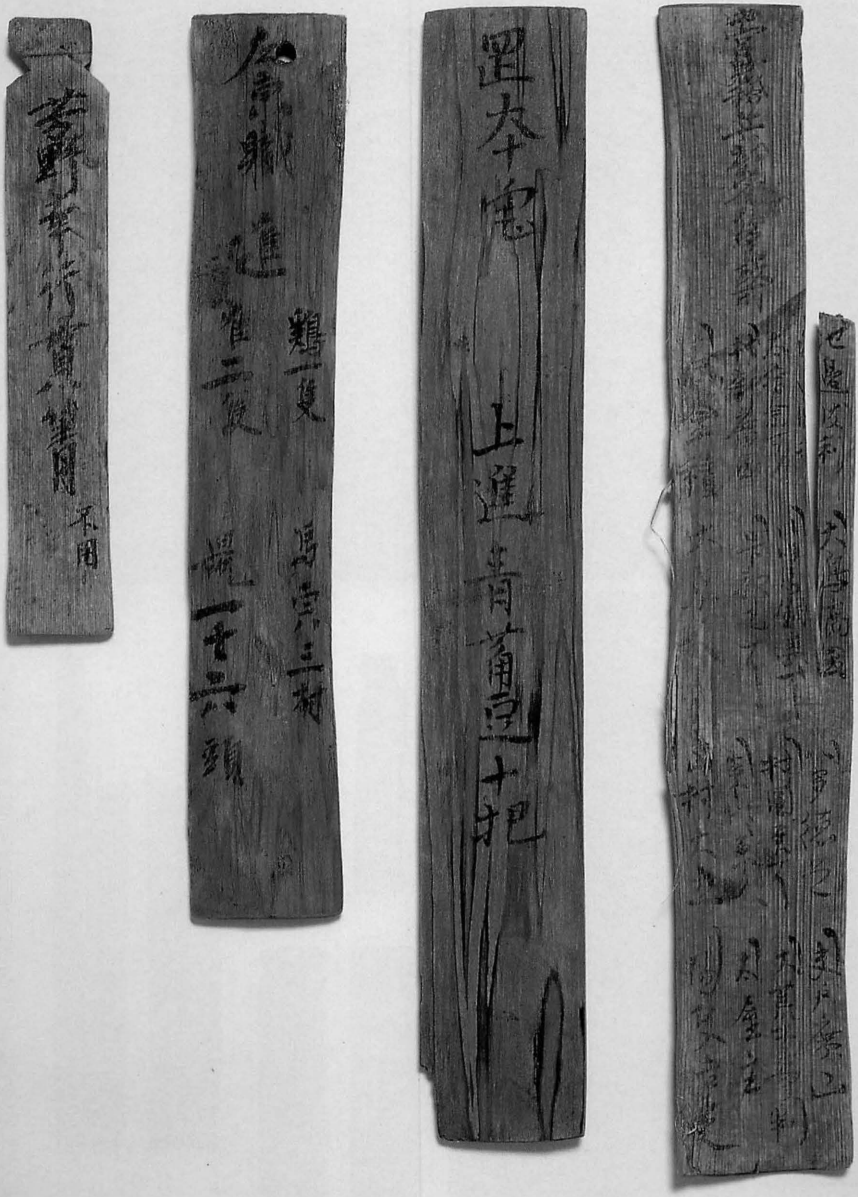
奈良国立文化財研究所年報

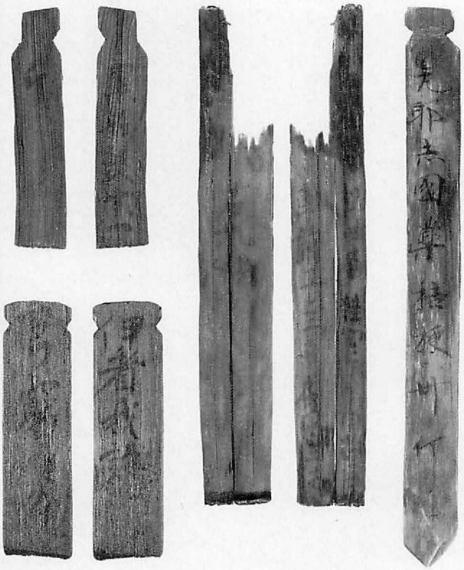
1990



奈良国立文化財研究所



1　二条大路木簡　　撮影　佃　幹雄



2　上　藤原宮第62次調査区（東南から）
　　下　藤原宮出土木簡　　撮影　井上直夫

3　上　山田寺南門（南から）
　　下　奥山久米寺金堂（南東から）　　撮影　井上直夫

4　上　平城宮第211次（朱雀門）調査区（東から）
　　下　平城宮第206次（兵部省）調査区（南から）　　撮影　牛嶋　茂

5　上　平城宮第203次調査区（北から）
　　下　西隆寺東面回廊（南から）　　撮影　佃　幹雄

上　楼閣山水之図（平城京二条大路上の東西大溝 SD5300から出土）　　部分写真
下　絵馬（平城京二条大路上の東西大溝 SD5300から出土）　　撮影　佃　幹雄

目　次

口絵　1　二条大路木簡
　　2　藤原宮第62次調査区
　　藤原宮出土木簡
　　3　山田寺南門
　　奥山久米寺金堂
　　4　平城宮第211次調査区
　　平城宮第206次調査区
　　5　平城宮第203次調査区
　　西隆寺東面回廊
　　6　楼閣山水之図
　　絵馬

はじめに……1
飛鳥地域の発掘調査……2
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査……10
藤原宮跡出土の木簡……16
飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室……17
平城宮跡・平城京跡の発掘調査……18
二条大路木簡……36
「楼閣山水之図」についての建築的所見……40
二条大路から出土した「翳」……41
平城宮出土須恵器の産地調査(2)……44
法隆寺古瓦の調査……45
興福寺所蔵「興福寺別当次第略本」……46
奈良町の建造物調査……51
和歌山県近世社寺建築の調査(2)……52
徳島県近世社寺建築の調査……54
大覚寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査(6)……56
第三回近世社寺建築研究集会……58
飛鳥資料館特別展示……59
動物遺存体の調査(6)……60
年輪年代学(9)……61
全国文化財データベース……62
複合材料で構成される遺物の保存処理……64
平城宮跡・藤原宮跡の整備……65
萩城東園地区の復原整備計画……68
史跡石動山行者堂の移築復原……69
在外研修報告……70
公開講演会発表要旨……73
調査研究彙報……74
奈良国立文化財研究所要綱……76

奈良国立文化財研究所年報　1990
発行日　1991年3月20日　編集発行　奈良国立文化財研究所　担当　山崎信二・山岸常人　印刷　日本写真印刷
表紙カット　平城宮朱雀門復原図

はじめに

奈良国立文化財研究所は1952年の創立以来，さまざまな分野の調査・研究を行ない，それぞれにみるべき成果を上げてきた。とりわけ平城宮・京の発掘調査はそのもっとも著しいものである。平城宮の発掘は，1959年７月に着手した大膳職地区の調査以来，本年報が対象とする1989年度までの30年間に，指定地面積131万㎡の約３分の１に当る37万㎡に達している。この間に，東院の張り出し部の発見や，大極殿・朝堂院の東西二地区での併存とその変遷の究明，さらに大嘗宮遺構の検出など多大の成果をあげ，木簡の発掘では古代史に全く新たな視点の文字資料を提供してきた。また，平城京の発掘調査は1970年代から急増し，最近では長屋王家木簡及び二条大路木簡計約10万点の出土によって，当時の貴族の生活や経済の実態を知る画期的な発見をもたらした。これらの成果をふまえて，1989年度は発掘30年を記念して，大規模な展覧会「平城京展 ―再現された奈良の都」を京都国立博物館・名古屋市博物館・東京国立博物館の各会場で開催した。展覧会は好評で，入館者数は30万人を越えたが，30年前の鍬入れ式に参加した者として感無量の思いがある。

しかしながら，1989年度の研究所の活動は，以上述べた「平城京展」にとどまるものではない。むしろ逆に，本年報の本文中に平城京展の文字が全く記載されていないのを見ても，当研究所がいかに多くの分野で仕事を行っているかがおわかりいただけよう。それは飛鳥・藤原地域の発掘調査であり，飛鳥資料館の事業と活動であり，遺跡の整備であり，古代から近世に至る社寺建築及び古文書の調査研究であり，そして埋蔵文化財センターが中心となっている科学的調査方法の開発・研究とその国際交流・地方公共団体等に対する指導や研修・全国の文化財のデータベース化と情報資料の公開などである。

当研究所は多面的に文化財保護行政の一翼を荷う一方，不動産文化財にかかわる学術・情報面でのナショナル・センターの機能が求められている。さまざまの分野の仕事をさらにどう前進させるのか，所員一同懸命な努力を続けているので，今後とも多くの方々の御支援と御鞭撻をお願い致したい。

1990年２月

奈良国立文化財研究所長

鈴　木　嘉　吉

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1989年度，飛鳥藤原宮跡発掘調査部では，飛鳥地域において山田寺・飛鳥寺・奥山久米寺跡・推定山田道など８件の調査を実施した（15頁表参照）。以下に主な調査の概要を報告する。

１．山田寺第７次調査

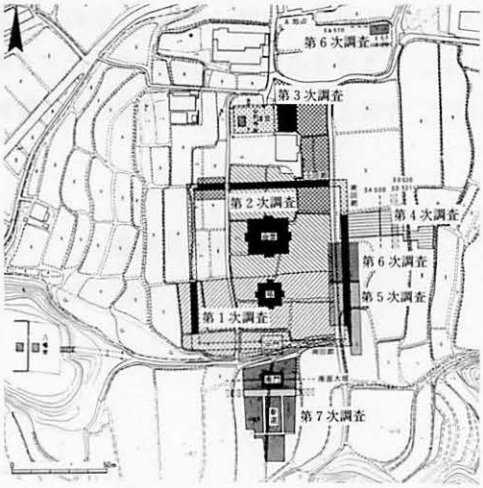
山田寺は1976年以来６次の調査によって，伽藍配置や各堂塔の規模・構造などが明らかになっている。今回は南門の位置と構造，南門の南側の利用情況，寺域の規模などの解明を目的として調査を行った。調査面積は1150㎡である。以下，主要な遺構について述べる。

南門造営前の遺構　東西方向の掘立柱塀 SA600・615・621・624，東西溝 SD601・609，斜行溝 SD607等がある。

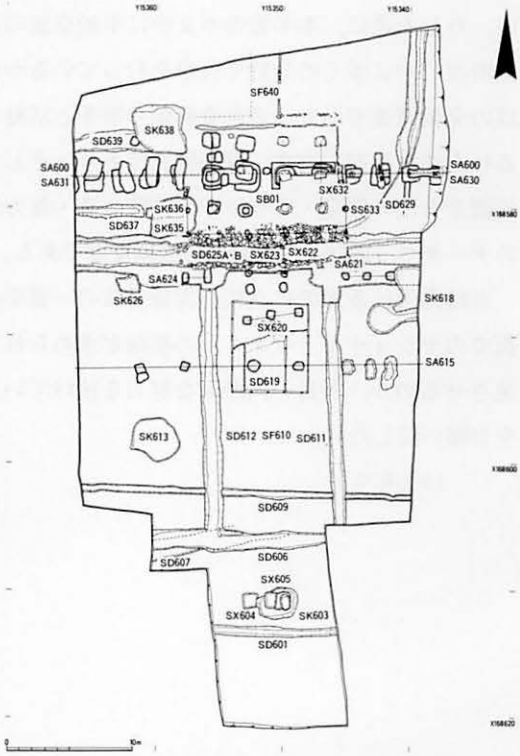
SA600は南門造営前に寺域の南を閉塞する塀で，後の南門の棟通りに揃えて12間分検出した。柱堀形は一辺1.6ｍ前後，深さ1.65～1.9ｍで，柱位置に平石の礎盤をすえた例もある。柱間寸法は南門と重複する５間分を除いた東西では約2.35ｍ等間であり，中軸線上の１間は約2.9ｍ，その東西のそれぞれ２間分は約2.6ｍと他より柱間が広くなる。この中央部分を通路として使用したものと考えられる。

東西塀 SA615は SA600の南14.8ｍで５間分検出した。柱堀形は不整形で，柱間寸法も3.5～5.4ｍと不揃いである。

南門造営後の遺構　南門 SB01，東西塀 SA630・631，暗渠 SX632，足場穴 SS633，参道 SF610・640，東西溝 SD625，橋脚 SX622・



山田寺調査位置図（１：4000）



山田寺第７次調査遺構配置図

623等がある。

南門SB01は西半分が削平されていたが，桁行3間・梁行2間の東西棟の礎石建ち建物である。柱間寸法は桁行2.92m，梁行2.62mの等間である。礎石は整地土を若干掘りくぼめ，根石を用いずに据え，厚さ15cmほど基壇土を積みたし基壇を築成する。南面の礎石だけには円形の柱座を造り出し，棟通りの礎石には扉の軸を受ける軸摺穴（径約12cm，深さ5～6.7cm）があり，棟通りの3間全てに扉が設置される。基壇は榛原石の板石や花崗岩玉石を並べた簡単な造りで，東西11.65m，南北7.84m，礎石上面までの高さは南で0.5m，北で0.1mである。基壇の南面は玉石敷の犬走り，北面は玉石の縁石の内側に瓦を乱雑に敷いた犬走りがあるが，いずれも奈良時代の改修と考えられる。南門造営時の足場穴SS633は棟通りより南で検出した。

南門に取り付く掘立柱塀は東（SA630）で4間分，西（SA631）で5間分を検出した。径30cmの柱根が2本残り，柱間は2.35m等間である。SA600の柱を溝状に抜いた抜取り穴を利用して，より浅い位置に柱を据える。柱の下には瓦を敷き詰めて，さらに柱に刳込みをいれ，南北から副木を添え，不等沈下やねじれを防いでいる。SA631の柱はすべて抜き取られているが，いずれの抜取穴も瓦を敷きながら版築状に埋戻される。このことは塀の廃絶後に築地に改造されたことを想定させる。暗渠SX632はSA630が門に取り付く部分で検出した。側石として榛原石や塼を用い，塀の柱筋にのみ榛原石の蓋をする。南北1.5m，内法幅0.25～0.32m，深さ0.2mである。

東西溝SD625は南門のすぐ南にある当地区の基幹排水路で，当初は幅2.5～3.75m，深さ1.0mの素掘り溝で(A)，奈良時代に南門の基壇幅に合わせて両岸を石で護岸するようになる(B)。SD625Aの幅は参道の東側溝の東と西側溝の西では他の部分より若干広くなる。鞴羽口・銅滓とともに飛鳥Ⅳの土器を出土した土坑SK626を掘り込んでいるため，掘削時期は天武朝と考えられる。SD625Bの石組部分は幅1.3m，深さ0.9m前後である。堆積土には砂礫を含み，相当の水量があったことを窺わせる。多量の瓦塼類や奈良・平安時代の土器が出土した。

参道SF610は素掘りの東側溝SD611と西側溝SD612を伴い，南から南門に至る。路面幅8.6m，溝心々距離約10mで，南門の正面規模に合わせる。両側溝はSD625から溢れた水を南に流し，東西溝SD606と合流して西流する。SD612からは鞴羽口・坩堝・鉄滓とともに奈良時代中頃の土器が出土しており，SD625Bの時期には埋没していたものと考えられる。

橋脚SX622・623は各々SD625A・Bの時期に南門中央の柱間に合わせて架けられる。SX622は溝肩で検出し，桁行1間，梁間1間で，柱間は南北2.95m，東西2.85mである。SX623は石組溝内にあり，柱間は東西2間（1.3m等間），南北1間（1.1m）である。橋脚は東南隅が円柱で，他は一辺0.2m前後の角柱である。

SF640は南門から中門へ至る幅約2.2mの参道で，玉石を並べた東縁石の一部を検出した。

SK603は東西溝SD606の南約3mにある不整形の土坑で，東西3.3m，南北2.4m，深さ0.7mである。SX604は正方形の柱穴で，一辺1.2m，深さ約1.2m。内部に柱抜取り穴がある。SK603と重複関係があり，SK603より古い。SK605はSK603を掘り下げて検出した。内部に1.2mの間

隔で東西に並ぶ2箇の穴を有する柱穴で，2箇の穴は柱抜取り穴と考えられる。幢幡の竿を建てたものであろう。掘方は東西2.1m，南北1.5m，深さ0.7mである。

斜行溝SD629は調査区東北隅からSD625Bに流入する幅4m前後の流路である。SD629からは回廊所用の双胴の鴟尾を含む大量な瓦，地覆石に使用された榛原石の切石などが出土し，相当な水量であったことを示す。出土土器には10世紀後半のものが含まれ，南門の廃絶時期を示す資料となる。

整地土下の遺構　南門南の参道の断ち割り調査でSD619とSX620を検出した。SD619は丘陵裾部の谷地形の流路で，北肩のみを検出した。幅5m以上，北肩からの深さは約1.6mで，上方の1.2mは整地土で埋められ，下半の0.4mに堆積層が2層残る。上層は茶褐色有機土層，下層は暗灰色粘質土層で，両層から木簡・飛鳥Ⅰの土器・木製品・木片・獣骨・二枚貝等が出土した。SX620は東西に並ぶ柱穴で，柱堀形は一辺約0.6m，深さ0.6m，柱間は東2.3m，西1.9mである。

遺物　多量の瓦塼類の他に木製品・木簡・金属製品（飾金具・鉄釘）・銭貨（和同開珎・延喜通寶・貞観永寶）・土器・土製品（土馬）・石製品（砥石）が出土した。

瓦塼類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦・鴟尾・鬼瓦・面戸瓦のほか，塼仏も1点出土した。軒丸瓦はいずれも「山田寺式」で，従来細分しているA～Fの6種すべてが出土したが，Dが最も多く7割を越える。Dは回廊・中門の所用軒丸瓦と推定されており，南門の所用軒丸瓦もDとみてよい。軒平瓦はすべて重弧文で，1点を除きすべて4重弧文である。この中には，側縁をL字形に折り曲げた隅軒平瓦もある。垂木先瓦はD・B 2種が南門の主要垂木先瓦と考えられる。垂木先瓦は彩色されることが判明し，裏面を除く全面に白土を塗った後に，弁の輪郭線内側を赤色の顔料で縁どり，さらに間弁を黒く塗る。鴟尾は4個体以上出土しているが，互いに直角につながる2つの胴部をもったものがある。これは2つの胴部と1つの腹部・鰭部を備えた「双胴単尾」の鴟尾と考えられ，回廊の四隅を飾った鴟尾であろう。

木製品・金属製品はSD619の堆積層・造営に関わる整地土・SD625B・SK635から出土した。SD619からは曲物側板・鹿角柄刀子・部材（脚）等，整地土から琴柱，SD625からは曲物底板が出土した。SK635からは雲形の厚板に黒漆を施す，扁額の可能性のある木片も出土している。

造営に関わる整地土やSD619堆積層の出土土器は，いずれも従来の飛鳥地域の土器編年の飛鳥Ⅰの様相を示すが，さらに細分される余地がある。SD625Bからは奈良時代後半の土師器皿の底部外面に「山田寺」と墨書した土器が出土し，寺名を証明する資料として注目される。

木簡は整地層下で検出した自然流路SD619の北肩から，49点（うち削屑43点）出土したが，すべて習書木簡である。

まとめ　今回検出した南門は天武朝に建立され，10世紀後半から11世紀前半に廃絶したものと推定できる。南門の検出により塀で囲まれた寺域が判明し，南北規模は約185m，東西規模は東限の南北塀SA500を伽藍中軸線で折り返すと約118.4mとなる。南門と中門の心々距離は18.5mで飛鳥寺に近い数値となる。南門礎石上面は塔四天柱礎石より2.4m低い。南門は単層切妻造の

礎石建ち建物で，棟通りの柱間全てが扉となる「三間三戸」の形式であることが判明し，古代の寺院では類例がなく注目される。

礎石建ちの南門の前身施設として掘立柱塀の存在を確認した。金堂・回廊の建立された皇極朝には外周には塀だけが巡っていたと考えられる。南門地区では［掘立柱塀］→［礎石建ち南門と掘立柱塀］→［礎石建ち南門と築地］という三時期の変遷が考えられるようになった。南門の前身施設が掘立柱塀である要因としては，願主である蘇我倉山田石川麻呂の事件や山田寺近辺に推定される山田道からの出入りが西門で行われたことなどが考えられよう。

造営に伴う整地土下では柱穴とSD619を検出し，SD619からは木簡が出土した。これらの遺構・遺物は山田寺造営（641年）以前の時期のものである。木簡の出土から，これらは単なる集落とは考えがたい。山田寺建立の願主である蘇我倉山田石川麻呂の邸宅「山田家」の一画である可能性があり，その手がかりを得たことは意義深い。また，伴出土器はいずれも飛鳥Ⅰの様相を示しており，飛鳥Ⅰの年代の下限を示す資料としても興味深いものである。

2．飛鳥寺の調査

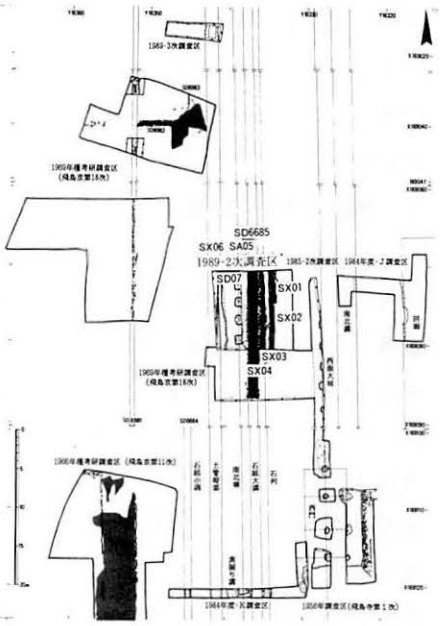
飛鳥寺の調査は5ケ所で行ったが，主要なものは1989－2次調査である。この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更に伴う事前調査として行い，調査面積は100㎡である。調査地は飛鳥寺西門の北30mの位置で，調査地の隣接地は1969年の奈良県教育委員会による飛鳥京跡第18次調査が行われ，調査区の中央部にSD6885が検出されている。

調査地周辺の飛鳥寺西辺部では，当研究所・県教委による数次の調査が行われ，掘立柱塀・石組溝・石敷広場などが確認されており，飛鳥寺と一体となった宮殿遺構の存在が明かとなっている。

遺構　検出した7世紀代の主な遺構は，SD6885の北延長部・南北塀1条・石列抜取り痕2条・石敷・土管を用いた暗渠1条等である。他に10～11世紀の素掘溝1条を検出した。

南北塀SA05はSD6885の西約1mの位置で5間分を検出した。柱間は約2.3m等間である。柱掘方は一辺1mを越える規模である。SA05は1985年の飛鳥寺西門西側の調査でも検出しており，総延長48mで20間以上を検出したことになる。SA05はSD6885の掘方に切られるため，SA05が先行する。また，SA05は飛鳥寺の西面大垣の西11mに位置し，いかなる性格の塀であるかは今後の慎重な検討が必要とされる。

石組溝SD6885は幅1m，深さ0.4mの石敷をもつ石組溝である。石列抜取り痕SX01・03，石敷SX02・04



飛鳥寺西方遺構配置図

はSD6885と一連の施設であり，飛鳥寺西面大垣とも一体で，大垣から西に向かって自然地形に沿って段々畑状に下がっていく施設の一部である。SD6885の側石も西側の側石の方が東側よりも約0.1m低い。

暗渠SX06は調査区の西端で検出した。土管を組んだ暗渠で，検出した土管は21本，一個の長さ40cm，径20cm，玉縁長15cm，厚さ2cmを測るものである。据付掘方の西肩は調査区外で検出できなかったが，1985年の調査では幅1.5mの規模であった。土管は掘方の東の下端に設置されている。この暗渠は塀に伴うか，石組溝に伴うものであるかは不明である。土管の内側は細かい粘土が堆積するため，早い時期に使用不能になったと推測される。暗渠掘方の暗渠直上部分には流水による堆積が認められ，暗渠以後に開渠として使用された可能性もある。この暗渠掘方は北側60mの1989－3次調査区でも検出しており，総延長100m以上となる。

SD07はSD6885の西に接する素掘の南北溝で，幅3mを測る。この溝からは10～11世紀の土器が出土している。この溝のため，SD6885の西の側石の西側は流水に洗われて石面を現していたこともある。この溝の堆積状況は底部に砂礫層があり，相当の流量があったものと想定できる。

まとめ　飛鳥寺の寺域に西接する地域は奈良県の第11・18次調査（1966・1969）で石敷広場・石組溝等の遺構が広がることが確認されていた。当研究所が1985年に実施した西門の西側の調査では，県の調査で確認した石組遺構以外にも柱穴・素掘溝（暗渠掘方）等の7世紀代の遺構の存在を確認した。今回の調査は，先行する調査で検出した遺構の追認に終わったが，それらの遺構が飛鳥寺の西面大垣と平行して，南北50～100mに及ぶことを確認できたことは，大きな成果であろう。これらの遺構が飛鳥寺と直接に関係するものであるか，あるいは寺を取り巻くように存在する宮殿遺構の一角であるかは今後の調査の進展を待ちたい。

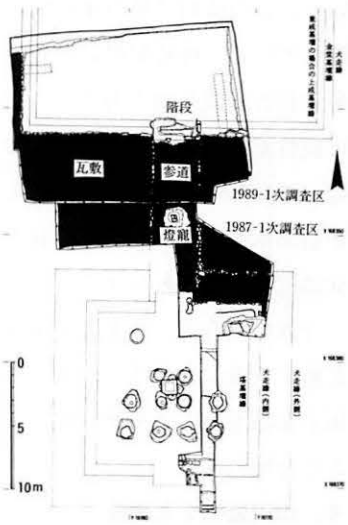
また，かなりの流量があったと推定できる10～11世紀の南北溝の存在は，西方に向かって強い傾斜で落ちていく自然地形に逆らって掘削されたものと考えられ，平城遷都以後の飛鳥寺の存在形態を考える上でも重要な資料を得ることができたものと考えられる。

3．奥山久米寺の調査

この調査は久米寺庫裡の改築に伴う事前調査として行い，調査面積は約250m²である。調査の結果，金堂およびその周辺の状況が判明した。

遺構　金堂は南を正面とする東西棟建物であり，基壇規模は東西23.4m（80尺）に復原でき，南北規模は18m前後と推定できる。基壇の南面階段地覆石の北端が基壇外装の前面より0.6m内側にくい込んでおり，重成基壇の可能性がある。下成基壇の出を0.6mとすれば，上成基壇の東西長は22.2m（75尺）となる。基壇高は現存0.4mであるが，当初は1m以上と推定できる。基壇の周囲には幅約0.7mの犬走りがめぐる。基壇は全面的改修が行われ，創建時の外装をすべて抜き取り，金堂周囲と一連の厚さ約0.3mの整地を行ない，外装・階段・犬走り縁石を据える。整地土には凝灰岩小片が多く入る。基壇外装はすべて抜き取られているが，地覆石に花崗岩切石，羽目石等には凝灰岩切石を用いたと推定される。犬走り縁石には花崗岩自然石を用いてい

るが，改修時のものである。階段の東側および西側５ｍまでは長さ0.6～１ｍの石を，それ以外のところには長さ0.2～0.5ｍの石を並べる。礎石位置は現状では不明である。境内に現存する径1.1ｍほどの円形造りだしを持つ花崗岩製礎石を使用した可能性がある。塔から金堂へ向かう参道に面して階段がつく。階段は幅約3.8ｍ，出は約１ｍである。重成基壇とすれば，上成基壇からの出が約1.6ｍとなる。地覆には花崗岩切石，耳石・段石には凝灰岩切石を用いる。耳石の地覆石３個・段石の地覆石２個を据わった状態で検出したが，いずれも改修時のものである。東南隅の地覆石には円形（径0.1ｍ）と長方形（0.15×0.1ｍ）の枘穴がある。基壇は掘込地業・版築により築成されている。掘込地業は，地覆石の位置までの範囲で，深さは創建時地表面から0.9ｍである。版築は３工程に大別できる。1987年に調査した塔基壇土中には，７世紀前半の瓦が多量に含まれていたが，金堂基壇土中には，ごく少量の時期不明の土器片が含まれるのみである。



奥山久米寺遺構図

参道は塔と金堂をつなぎ，長さ約12ｍ，幅約3.8ｍである。金堂基壇改修時の整地土と一体で造られ，周囲の瓦敷面より約0.1ｍ高い。参道の側石には花崗岩自然石を用い，上面の瓦敷には部分的に上下の２層がある。金堂階段のすぐ南側では，小礫敷を介して上下２層があり，下層は平瓦の凸面を上にして整然と並べ，上層は雑然としている。その他の場所は雑然とした１層のみである。1987年の調査では，参道積土から７世紀後半の土器が出土した。

金堂の周辺は瓦を全面に敷いている。瓦敷は金堂基壇改修時の整地土上に敷かれ，調査区西端から東へ９ｍまでは平瓦の凸面を上にして整然と敷かれるが，他ではかなり雑然と敷かれる。瓦敷の瓦は７世紀前半～７世紀末・８世紀初頭の時期のものが多いが，一部に奈良時代の瓦を含む。瓦敷はおそらく回廊内全面に敷かれていたであろう。

遺物　主要な出土遺物は，瓦・土器・塼仏・金具である。土器類は，ほとんどが近世のものである。塼仏は１点あり，山田寺出土品と同笵である。瓦塼類は多量にあり良好な資料が多い。飛鳥時代から近・現代までの瓦があるが，平安～中世のものはほとんどなく，大部分は７世紀代に属する。出土した古代の瓦の内訳は，大量の丸・平瓦のほか，軒丸瓦175点，軒平瓦64点，熨斗瓦76点，面戸瓦５点，鬼瓦１点等である。

まとめ　飛鳥地域の７世紀代主要寺院の金堂と比較すると，久米寺金堂は基壇規模では山田寺金堂をやや上まわり，川原寺中金堂より小さい。金堂建物の規模は不明であるが，桁行は５間となろう。築造時期は，基壇積土の状況から判断して，７世紀後半建立の塔より遡り，出土瓦からみれば７世紀前半の中頃までさかのぼる可能性が強い。

金堂の基壇は７世紀後半以降に大がかりな改修をうけ，同時に回廊内を整地し参道を設けて

いる。この時期は塔の建設時の可能性が強い。さらに奈良時代には回廊内に瓦を敷き境内を整備している。伽藍配置は，塔・金堂が南北に並ぶ。講堂の位置は石田茂作が推定したように，金堂北方の微高地であろう。したがって，四天王寺式か山田寺式の伽藍配置となるが，前者の可能性が強い。金堂基壇北縁から講堂基壇南縁（推定）までの距離が約25ｍで，山田寺の約42ｍに比して狭く，北面回廊を金堂・講堂間に通すにはやや無理がある。また回廊の東西規模が約66ｍであり，約88ｍを有す山田寺に比してかなり南北に細長くなり，この点でも四天王寺式に近いものであろう。

今回の調査で，久米寺の金堂は基壇の上半が削られてはいるものの，犬走り・階段・周囲の瓦敷・参道について，きわめて良好な状況で検出できたことは大きな成果である。花崗岩・凝灰岩切石を使った基壇化粧，入念な基壇構築方は，飛鳥諸寺の中でも一級の内容の寺院であることを窺わせる。

４．山田道第２次調査

この調査は県道拡幅の事前調査で，調査は東と西の調査区に分けて行い，調査面積は973㎡である。検出した主な遺構は掘立柱建物・掘立柱塀・竪穴住居跡・溝・河川跡・石組暗渠・土坑等である。

弥生時代の遺構　SD2510は調査区東端の７世紀代の整地土下層で検出した幅２ｍ，深さ1.2ｍの規模で，断面Ｖ字形の南で東に彎曲する弧状の南北溝である。東南延長部が第１次調査第Ⅳ区西南隅で確認されている。弥生時代中期後葉の集落の西限を画す環濠であろう。

古墳時代の遺構　SD2570は北西に流れる５世紀後半の小河川で，多量の布留式土器の他に陶質土器・韓式土器・木製鞘などが出土した。

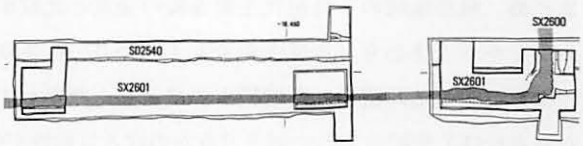
SB2541は２×２間以上の掘立柱建物で，柱掘方が小さく，柱筋は北で西に振れる。他に，SD2570と同じ時期の竪穴住居跡４棟を検出した。

７世紀代の遺構　掘立柱建物・塀・溝・石組暗渠などがある。出土遺物や第１次調査の成果から，７世紀中頃から後半の時期にあたるものと考えられる。

建物 SB2501・2502・2506・2518. 2520，塀 SA2507・2508・2515・2517等は調査区の東端に集中する。ほぼ方眼方位にのるものと北で東にふれるものがある。

SD2524・2525・2530・2539は北で東にふれる南北溝である。掘立柱建物・塀と同じ時期と考えられるが，重複するものもある。

現在の地形でも明白なように，調査地は全体に西に緩く傾斜し，雷丘との間が谷状の地形となっている。東調査区の西部約40ｍ分と西調査区全体（東西75ｍ以上）にわたって，この谷状の地形を埋め立てた大規模

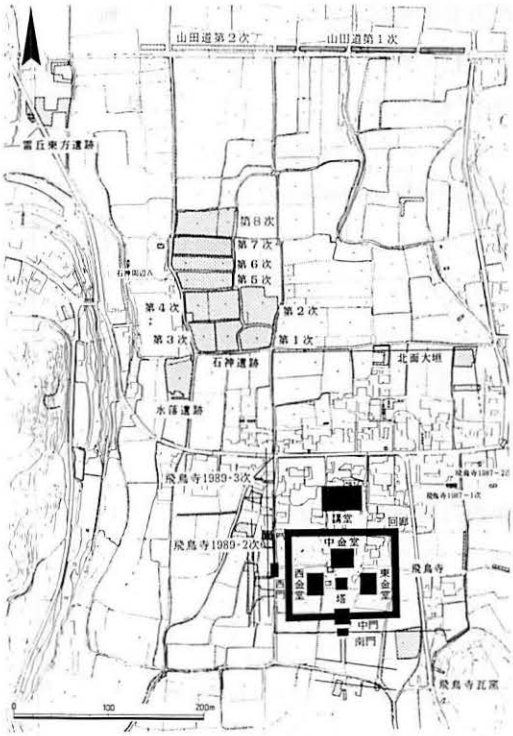


（西調査区）

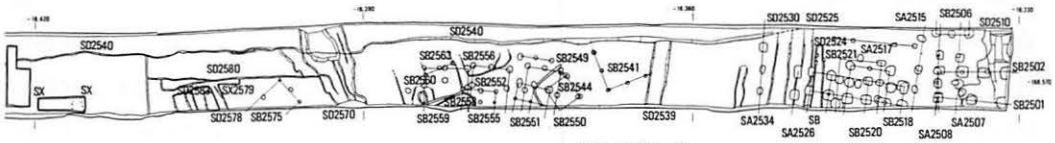
な整地層を検出した。整地は植物繊維を多量に含んだ堆積層の上に行われ，大きく２層に分かれる。下層は粘質土，上層は青灰色の砂である。整地土は厚さ約0.6ｍで，旧地形に沿って北に向かって厚くなる。整地土中には７世紀前半の土器と，小量の瓦を含み，７世紀中ごろの整地と考えられる。また，青灰色の砂層には６世紀代の円筒埴輪の破片が含まれる。この整地土下には２条の石組暗渠がある。２条とも，浅い据え付けの溝を掘った中に（西調査区では緩斜面を水平に削るだけ）作られ，整地土で埋め立てられているため，整地作業と一連の工程で作られたものである。東西方向の石組暗渠 SX2601は幅0.8～１ｍ，東でわずかに北に振れる。石は，拳大から一抱えもある大きさまであって不揃いである。石の積み方はかなり粗雑であり，底石・側石はなく，一定の幅に石を積み上げて，石に隙間を作ることによって水の通り道としたようである。検出した東西方向の長さは約43ｍ以上になる。西へはさらに調査区外に延びるが，東では南北方向の石組暗渠 SX2600に接続する。SX2600は，長さ0.4～0.6ｍの大形の石をたてて側石とし，溝の中に人頭大の石を詰める。幅約0.5ｍで，北でわずかに西に振れる。南北約４ｍ分を検出した。南端の小口には側石を立てていない。石の上面には厚さ10～15cm・幅約1.6ｍの粘土をかぶせて密封するが，SX2601との接続部分ではこの粘土を剝し，SX2600の西側石に榛原石の大形の板石をかぶせている。２条の暗渠は旧地形の傾斜変換線に作られた SX2601が受けた水を，SX2600で北へ排水するものであろう。

東西溝 SD2540は北壁にそって，調査区と平行する溝で，東端では，調査区外にそれる。西調査区で確認した溝幅は約2.5ｍ。調査区東端の掘立柱建物や南北溝より新しく７世紀末頃の土器を含む。７世紀末以降の「山田道」の北側溝の可能性もある。

（立木　修）



飛鳥寺周辺調査位置図（１：8000）



（東調査区）

山田道第２次調査遺構配置図

藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では1989年度，藤原宮跡については西方官衙地区を中心に５件の調査を，また藤原京跡では右京一条一坊・右京七条一坊・左京九条四坊・本薬師寺旧境内などで18件の調査を実施した（15頁表参照）。以下，主要な調査の概要を報告する。

１．藤原宮跡の調査（第60－10・13・15次他）

藤原宮跡内の調査では，年度当初，内裏東外郭地域の調査（第58次）を前年度から引き続いて実施したが，その成果についてはすでに報告した（年報1988）。宮跡内ではこの外，開発工事等に伴なう調査を，宮の西南地域で実施した。この地域は，周知のように史跡指定の範囲から除外されているため，近年各種の開発工事に伴う調査が増大している地域でもある。

西方官衙地区（第60－13次）　調査地は鴨公小学校校庭の南に接し，周辺では小学校の建設に伴ない広範囲な調査（第５～９次など）が行われている。今回の調査では，４間×３間の南北棟を１棟検出した。この建物は，柱間２ｍ前後の小規模なもので，宮期ないしは宮直前の遺構である。比較的遺構密度の低い西方官衙南辺地域としては貴重な成果といえる。

宮西南地区（第60－10・15次）　調査地は宮の西南辺部にあたり，調査の結果，掘立柱建物５・溝１・土坑３などを検出した。掘立柱建物は，いずれも梁行１～２間，桁行２～３間程度の小規模なもので，柱間寸法も２ｍ前後である。北で僅かに東に振れる方位を持ち，10次調査で検出した藤原宮期の遺構と同時期と考えてよい。なお，下層には弥生時代中・後期の包含層（四分遺跡）がほぼ全面的に分布しているが，今回は一部の調査にとどめた。出土遺物には弥生時代前～後期の土器，藤原宮期の土師器・須恵器・瓦，中世の瓦器をはじめ，石包丁・鉄滓などがある。今回の調査では，小規模な建物が散在する宮西南部の状況が一層明確になった。

南面内濠地区（第60－20次）　調査地は，宮南面西門想定位置を含むが，調査の結果，内濠は確認できたが，南面西門は礎石・基壇痕跡とも確認できなかった。門の基壇は完全に削平されていたものと思われる。内濠は幅2.5ｍ，深さ0.9ｍの規模で，上層には多量の瓦，下層には木屑がつまっており，木屑層中から木簡の削り屑（内容不明）数点が出土した。

２．右京二条一・三坊の調査（第60－11・12次）

この地域は，外周帯をはさんで藤原宮の北に接するという重要な場所にあたるが，近年都市化の速度が特に速いこともあって，調査件数が多い。

二条一坊地区（第60－11次）　調査地は，藤原京右京二条一坊西南坪の中央付近にあたる。調査の結果，掘立柱建物SB01と掘立柱塀SA02を検出した。これらは，いずれも藤原宮の時期の遺構である。SB01は桁行６間の南北棟で，梁行は北妻が２間，南妻が３間と推定され，柱掘方はいずれも一辺１ｍを超える大規模なものである。このSB01の南妻柱筋と東側柱筋は，それぞれ坪の南北・東西三等分線に近い位置にあり，坪内に計画的に配置された建物である。SA02は，

SB01の北にある東西塀で，２間分を確認した。

今回検出した南北棟SB01は，藤原京の建物としてはきわめて大規模であるが，右京二条一坊西南坪における建物配置を復原すると，この建物の西方，坪の中央あるいはその北寄りに，さらに大規模な正殿級の建物が存在する可能性があり，調査の進展に期待がもたれる。

二条三坊地区（第60－12次）　調査地は藤原京右京二条三坊東南坪の東南部にあたる。従前の調査でこの東南坪は，一坪を占地する宅地であったと推定されている。調査の結果，掘立柱建物１，掘立柱塀１を検出した。SB6840は，調査区北西部にかかる総柱建物であり，東西棟と復原できる。梁行２間，桁行１間分を検出した。SA3575は，第39次調査区から続く掘立柱東西塀で，SB6840の東妻棟通柱に接続する。１間分を検出し，第39次調査での検出分とあわせて５間分を検出したことになる。

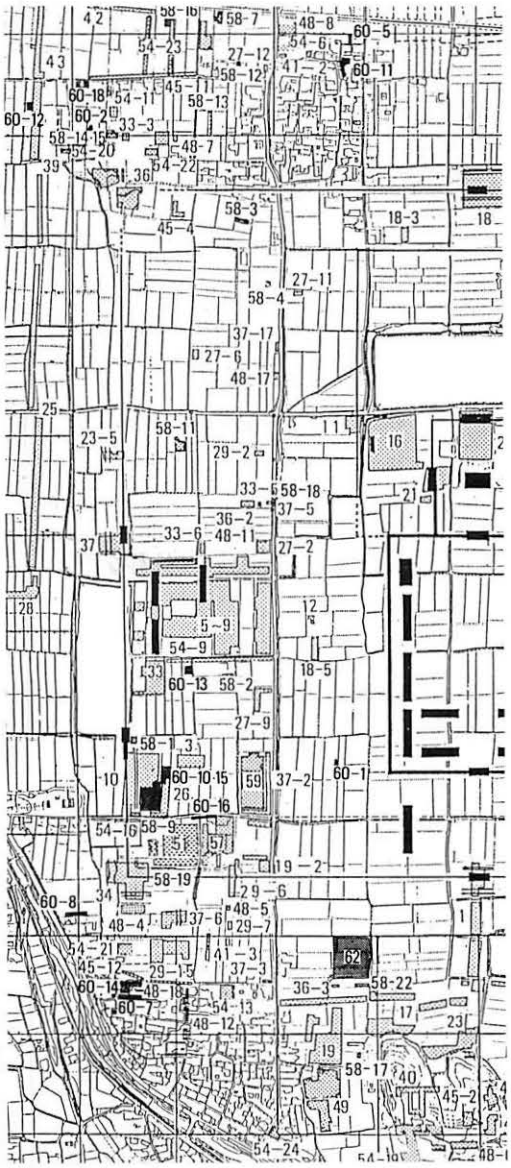
今回検出したSB6840・SA3575は，従前の調査成果とも総合すると，宅地内郭の南辺を画する中門とそれに取り付く塀である可能性が高い。すなわち，従前確認しているSB3580・3595を９間の建物と仮定すれば，SB6840は５間となってこれら３棟の中心線はほぼ一致する。これにより正殿（SB3595）・前殿（SB3580）・中門（SB6840）という建物配置が復原できよう。

３．右京七条一・二坊の調査（第62･60－14次）

この地域は，外周帯をはさんで藤原宮の南に接する重要な場所だが，近年，公共事業を中心に開発工事が集中し，今年度も第62次調査をはじめ数ヵ所で調査を行なった。

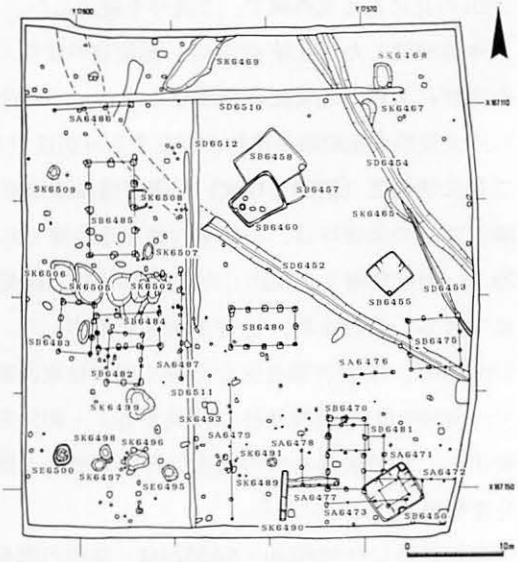
七条一坊地区（第62次）　調査地は，藤原京右京七条一坊西北坪の北東部にあたる。右京七条一坊では，これまでに第17・19・23・40・49次などの調査が実施されている。検出した遺構には，竪穴住居・掘立柱建物・掘立柱塀・溝・土坑・井戸などがあり，これらは古墳時代，藤原宮期，藤原宮期以後の３つの時期に大別できる。

このうち藤原宮期ないしその直前の時期の遺構には，掘立柱建物８，掘立柱塀10，素掘溝３，



藤原宮周辺調査位置図（数字は次数）

井戸２，土坑15などがある。これらは造営の方位や出土遺物などからＡ～Ｄの４群に細別され，この内Ｄ群が藤原宮の時期の遺構である。Ａ群には，掘立柱建物 SB6475・SB6484，掘立柱塀 SA6473・SA6474・SA6486があり，他に東西溝 SD6510や浅い東西溝状土坑 SK6489がある。これらは，北で西に約４度振れる方位をもつ。Ｂ群には，掘立柱建物 SB6482・SB6483や南北溝状土坑 SK6490があり，この内建物２棟は柱筋を若干ずらして並行に配置される。土坑からは漆を入れた小型壺が出土した。Ｃ群は北で東にわずかに振れる方位をもち，掘立柱建物 SB6470・掘立柱塀 SA6471・SA6472・SA6487や南北溝 SD6512・東西溝 SD6510がある。Ｄ群には，掘立柱建物 SB6480・SB6481・SB6485，掘立柱塀 SA6477・SA6478・SA6479，南北溝 SD6511，井戸 SE6500があり，北で西へわずかに振れる方位をもつ。



第62次調査遺構配置図

Ｄ群（藤原宮期）の遺構の配置は，南北溝 SD6511によって坪の東三分の一を区切り，その東には東西棟 SB6480と小規模な東西棟 SB6481がある。SB6481の南と西は鍵の手に連なる掘立柱塀で囲み，その西に南北塀を配置する。また溝 SD6511の西側では，北寄りに南北棟 SB6485を配し，南には井戸 SE6500や土坑群などが営まれていた。井戸 SE6500は，１辺55cmの横板組の井戸枠を残しており，枠内堆積土から土器や独楽，木簡の削り屑などが出土した。

一方，古墳時代の遺構には，竪穴住居５，西北流する斜行溝３，土坑８などがある。このうち竪穴住居は調査区東半分で検出した。最も保存状況の良い SB6450は，長辺5.3m，短辺4.4mの方形で，深さ30cmをとどめる。床面上で４本の柱穴と東北隅に貯蔵穴を確認した。床面には炭化した柱や屋根材などの建築材が認められた。斜行溝 SD6452・6453・6454は，いずれも横断面Ｖ字形の素掘溝で，底中央が一段深くなる特徴をもつ。

出土遺物には土器・瓦・木製品・土製品・石製品がある。瓦は調査区西南部の整地土上や南北溝 SD6512・井戸 SE6500から少量出土した。古墳時代の斜行溝や竪穴住居から出土した土器は布留式の新しい段階に属する良好な資料である。井戸からは「□年六十三」と記した木簡の削り屑が出土している。

今回の調査では，藤原宮南辺の六条大路南側溝及びその南の七条一坊西北坪の遺構の確認が期待された。西北坪については，西南坪のような大規模な建物群は検出されなかったものの，いくつかの小規模な建物を検出し，井戸や土坑など生活の跡を確認することができた。またあわせて古墳時代の竪穴住居，斜行溝を検出し，古墳時代の理解にとっても貴重な資料を得た。

しかし，大路南側溝と坪の北を限る塀は検出できず，今後の課題として残された。

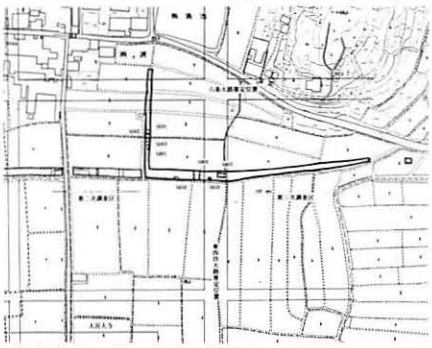
七条二坊地区（第60－14次）　調査地は藤原京右京七条二坊西南坪にあたる。調査の結果，掘立柱建物・溝・土坑・竪穴住居など，弥生時代から中世にわたる遺構を検出した。

藤原宮期の遺構には，建物２・溝・土坑・井戸などがある。SB04は南北棟，SB02はSB04の南にある南北棟で，ともに妻側柱間を１間分確認した。南北溝SD4700は，最大幅1.7ｍで，16ｍ分を確認した。井戸SE08の井戸枠はすべて抜き取られていた。弥生時代の遺構には，数棟重複する竪穴住居と土坑（SK03・05・07）がある。また，中世の遺構には小柱穴や井戸がある。

出土した遺物には土器・土製品・瓦類があり，このうち本薬師寺所用の軒平瓦が注目される。本調査で注目すべきは，坪を東西に二等分する位置に掘られた溝SD4700である。藤原京内の坪の分割方法が明らかな例は少なく，これが溝による分割方法を明らかにした最初の例である。

４．左京九条四坊の調査（第60－17次）

農道整備事業に伴う第３次（最終年）の調査で，調査地は，藤原京左京九条四坊東北坪にあたり，坪内の宅地遺構や条坊関連遺構の検出を目的に，「南北調査区」「東西調査区」「東端調査区」を設定した。



左京九条四坊の調査区位置と遺構（１：5000）

南北調査区で検出した遺構には，掘立柱建物１，井戸１，東西溝４がある。SB01は南北２間，東西２間以上の掘立柱建物。東西溝４条のうちSD02・03が藤原宮期の溝で，共にやや斜行する。井戸SE01は径2.7ｍの円形の掘方を検出した。藤原宮期に属す。

東西調査区で検出した遺構には，掘立柱建物２，井戸２がある。SB02は桁行４間以上の南北棟，SB03は桁行３間，梁行２間の東西棟である。井戸SE02は掘方内の西寄りに井戸枠を一段残していた。枠抜取り穴から，巻斗の10分の１の雛型が出土した。井戸SE03は円形掘方の中央に内法55㎝の方形縦板の井戸枠を残す。

調査の結果，当初予想した八条大路・東四坊大路（推定中ツ道）は検出できなかった。特に東四坊大路想定線上には藤原宮期の井戸があり，小規模ながら建物も存在する。ただしこの小範囲の調査から，条坊道路の存在を否定するのも早計である。さらに今後の調査に待ちたい。

５．右京十条四坊の調査（第60－3次）

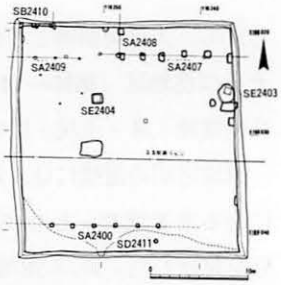
変電所建設に伴う事前調査であり，調査地は藤原京右京十条四坊にあたる。調査の結果，下層（弥生時代）と上層（古墳時代・藤原京の時代）２層の遺構を発見した。

上層で検出した遺構のうち藤原京期の遺構には，掘立柱建物１，掘立柱塀４，井戸２がある。SB2410は柱間２間分を検出したが，全体の大きさは不明。柱間寸法は約1.75ｍである。東西塀SA2400は東西５間分を検出した。柱間寸法は2.2ｍ前後である。東西塀SA2407は，６間分（柱間寸法2.3ｍ）を検出した。南北塀SA2408はSA2407に取り付き，東西塀SA2409は２間分を検出した。井戸SE2403は，一辺0.7ｍ前後の縦板組の井戸枠をとどめる。井戸SE2404は，木櫃を

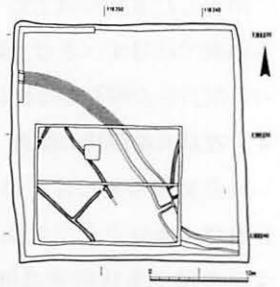
転用した横板組の井戸枠をとどめる。溝 SD2411は古墳時代の自然河川である。発掘区の南端をかすめて流れ，その北岸を検出したにすぎない。堆積土から弥生時代後期から古墳時代前期の土器や木製琴の共鳴槽が出土した。

調査区南半部にトレンチを設けて下層の水田遺構を検出した。この水田は，大畔の築成土から出土した土器などから，弥生時代後期のものとみてよい。水田は大小２種類の畦で区画されており，８面分を確認し，水口は大畔，小畔で各１箇所検出した。

今回の調査では，上層で藤原京期に属する建物や井戸などを検出し，下層では弥生時代後期に属する水田を確認した。上層では，調査区を横断する十条条間路の検出が期待されたが，これをみつけることはできなかった。今後の周辺地域での調査が待たれる。



第60－３次調査上層遺構配置図


第60－３次調査下層遺構配置図

６．藤原京条坊遺構の調査

今年度も数ヵ所で条坊の調査を行ない，初めて一条大路を確認するなどの成果があった。

一条大路・東三坊坊間路（第60－６次）　調査は一条大路と東三坊々間路の交差点の検出を目的とした。調査の結果，予想通り交差点と大路・坊間路の両側溝を検出した。

一条大路 SF6250は，幅1.5ｍの北側溝 SD6406・6408と幅1.3ｍの南側溝 SD6403・6405を伴い，両側溝心々距離8.5ｍ，路面幅7.5ｍと復原できる。また東三坊々間路 SF4300は，幅１ｍの西側溝 SD6404・6409と一条大路路面を横断する幅１ｍの東側溝 SD6400・6407を伴い，両側溝心々距離6.6ｍ，幅員5.5ｍが復原できる。このように交差点の状況は，交差点西側では坊間路西側溝が大路の南北両側溝とそれぞれＬ字形ないし逆Ｌ字形に接続している。これに対し，交差点東側では北流する坊間路東側溝に大路の南北両側溝がＴ字形に接続していた。

今回の調査で特筆すべき成果は，一条大路の両側溝心々距離（8.5ｍ）ないしその路面幅（7.5ｍ）が初めて判明したことである。藤原京の条坊を復原する上に貴重な資料となろう。

右京一条一坊・一条条間路（第60次）　調査地は，藤原京右京一条一坊西南坪と西北坪にあたり，一条条間路の想定位置を含む。調査の結果，一条条間路とその両側溝，小規模な建物２，井戸１，土坑など約30を検出した。一条条間路 SF6800は，幅1.5ｍの南側溝 SD6801と北側溝 SD6802を検出し，両側溝心々距離７ｍと路面幅5.5ｍが判明した。西南坪では，建物２と土坑多数を検出した。SB6815は１間×３間以上の掘立柱南北棟，SB6820は２間×１間以上の総柱建物である。西北坪はごく一部を調査したのみで，井戸 SE6810を検出したにとどまる。

出土遺物の大半は藤原宮期のもので，土師器・須恵器のほか硯や土馬・漆の付着した土器・鉄製品・銅滓・鞴羽口・坩堝などがある。瓦は軒瓦が５点出土した。銅関係の遺物は，西南坪の西半に集中する傾向があり，付近に銅製品の製作に関わる工房が存在した可能性を示す。

西二坊大路（第60－8次）　調査地は，右京六条三坊東南坪東側の西二坊大路推定地にあたる。調査の結果，南北溝5，土坑1を検出した。溝SD6565・6570は幅1m前後の素掘溝で，共に藤原宮期のもの。溝SD6575・6579・6580・土坑SK6560は平安時代後半に属す。SD6575は幅0.6m，SD6579は幅1m，SD6580は幅1mの素掘溝である。またSK6560は方形の土坑である。

本調査の主たる目的は，西二坊大路の検出であった。しかし，大路東側溝の想定位置には2条の溝（SD6565・6570）があり，いずれとも決し難い。一方，西側溝の想定位置でも2条の溝（SD6579・6580）を検出したが，これはいずれも平安時代後半の溝であって，ここでも西側溝は判明しなかった。西二坊大路の位置と規模の確定は，なお周辺の調査の進展を待ちたい。

二条条間路（第60―5・60―19次調査）　第60―5次の調査地は，右京二条一坊西南・西北坪で，二条条間路の想定位置を含む。調査の結果，側溝心々距離7.2m，路面幅6.8mの二条条間路SF6410とその南北両側溝（SD6412・6411）を検出した。溝幅は北が1m，南が0.6mである。

一方，第60―19次の調査地は右京二条二坊西北・西南坪で，二条条間路の想定位置にあたる。調査の結果，幅1.2mの北側溝SD6333と幅1.2mの南側溝SD6331を検出し，二条条間路SF6330の路面幅5.1mおよび側溝心々距離6.3mを確認した。

二条条間路については都合6地点で検出しており，それらの成果から遺構の振れを求めると，検出地点によってバラツキが大きい。あるいは西一坊大路をへだてて，二条条間路がくいちがっていた可能性もある。この点については，今後の調査の進展を待って検討したい。　（黒崎　直）

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AJP－P	藤原京　第60次	89.5.5～89.7.19	1086㎡	右京一条一坊・一条条間路
6AJH－R・S	藤原京　第62次	89.7.3～89.10.11	2500㎡	右京七条一坊西北坪
6AJP－T	藤原京　第60－1次	89.4.3～89.4.5	24㎡	右京二条一坊西北坪
6AJJ－B	藤原京　第60－2次	89.4.10～89.4.12	29㎡	右京二条二坊西南坪
6AMR－R	藤原京　第60－3次	89.5.8～89.6.27	529㎡	右京十条四坊
6AJC－E	藤原京　第60－4次	89.5.10	38㎡	左京六条四坊
6AJP－T	藤原京　第60－5次	89.5.16～89.5.20	36㎡	右京二条一坊・二条条間路
6AJN－K	藤原京　第60－6次	89.5.23～89.6.16	220㎡	一条大路・東三坊坊間路
6AJM－E・F	藤原京　第60－7次	89.6.7～89.6.20	96㎡	右京七条二坊西北坪
6AJM－C	藤原京　第60－8次	89.7.1～89.8.11	177㎡	西二坊大路
6AWG－H	藤原京　第60－9次	89.8.7～89.8.11	80㎡	左京七条三坊東南坪
6AJL－F	藤原宮　第60－10次	89.8.28～89.9.30	600㎡	宮西方官衙
6AJP－U	藤原京　第60－11次	89.9.29～89.10.13	130㎡	右京二条一坊西南坪
6AJJ－A	藤原京　第60－12次	89.10.5～89.10.12	60㎡	右京二条三坊東南坪
6AJL－C	藤原宮　第60－13次	89.10.16～89.10.23	100㎡	宮西方官衙
6AJM－E	藤原京　第60－14次	89.12.11～90.1.10	140㎡	右京七条二坊西南坪
6AJL－F	藤原宮　第60－15次	90.1.16～90.1.31	190㎡	宮西方官衙
6AJM－A	藤原宮　第60－16次	90.1.12～90.1.18	70㎡	宮西方官衙
6AMA－P	藤原京　第60－17次	90.1.18～90.3.26	807㎡	左京九条四坊
6AJJ－A	藤原京　第60－18次	90.2.6	8㎡	右京二条二坊西南坪
6AJQ－E	藤原京　第60－19次	90.3.20～90.4.2	90㎡	右京二条二坊・二条条間路
6AJH－P・Q	藤原宮　第60－20次	90.3.22～90.4.2	230㎡	宮南面内濠
6BMY－C	本薬師寺1989－1次	89.8.21～89.8.23	17㎡	金堂西方
6AMC－U 6AMH－F	山田道　第2次	90.1.6～90.4.7	940㎡	山田道推定地
5BAS－A	飛鳥寺　1989－1次	89.7.5	4㎡	西門西北方
5BAS－B	飛鳥寺　1989－2次	89.10.24～89.11.10	100㎡	西門西方
5BAS－A	飛鳥寺　1989－3次	89.11.13～89.11.16	15㎡	西門西北方
5BAS－B	飛鳥寺　1989－4次	90.2.5	2㎡	寺域東部
5BAS－E	飛鳥寺　1989－5次	90.2.26～90.2.27	12㎡	寺域東北部
5BOQ－I	奥山久米寺1989－1次	89.8.29～89.10.16	170㎡	金堂
5BYD－N	山田寺　第7次	89.10.12～90.2.22	1150㎡	南門・参道

1989年度　飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査地一覧

藤原宮跡出土の木簡

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1988年度の調査では，藤原宮跡と藤原京跡の４箇所から総計481点（うち削屑221点）の木簡が出土した。各調査において出土した木簡の点数や主な釈文，あるいは出土遺構については既に『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(九)』（1989年５月刊）で報告したので，ここではそのうち第58－１次調査で出土した薬物関係の木簡について報告する。

第58－1次調査は，藤原宮の西面南門の確認を主たる目的として実施された。調査区の南端は1973年度に行われた第10次調査区と一部重複する。第10次調査においても西面内濠から薬物に関わると思われる木簡が出土した。今回出土した木簡も判読できるものの大半が薬物に関係をもつものと見られる。その特徴としては，１．木簡の過半は薬物に付けられた付札で，多種多様な薬物が見えるが，その中に「黒石英」・「石流黄」などの鉱物性薬物があり，また薬物の量目が「十斤」・「五斤」・「一斤」などまとまりのよい数字であるものが多く，薬物の保管形態を考える上で重要な史料である。２．薬物の支給に関わる文書や処方箋を記したと見られる木簡も出土し，薬物の配分・消費についても貴重な史料である。３．荷札は４点あり，そこに書かれた地名には「无耶志国」（武蔵国）と古様な表記を採ったり，「伊看我評」（丹波国何鹿郡）と評名を書いた木簡が見られるのに対して，郡名を記したものが出土していない。４．人名を記した木簡には，「阿曽美」・「伊美伎」など古い表記を採るものが大半である。以上の諸点から今回出土した木簡は，おおむね飛鳥浄御原令制下のもので，薬物の保管・配分に関わる官司が近辺に存在していた可能性が強いことを示唆している。（橋本義則）

・出雲臣首万□　出雲臣石寸　出雲臣知万呂　防風十斤十二〔両カ〕□　□　(272)・(25)・2 019

・石川阿曽弥　所賜　忽生地黄　(306)・(34)・4 019

・□□□□〔四カ〕両桃四両桂心三両白芷三両　□　車前子三両防風三両　172・25・4 011

・□両　栢実一両　右丸物

・伊看我評　90・24・4 032

・芎窮八斤　无耶志國薬桔梗冊斤　189・18・3 033

人参十斤　129・20・2 032

・黒石英十一　82・17・3 032

・斤

飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室

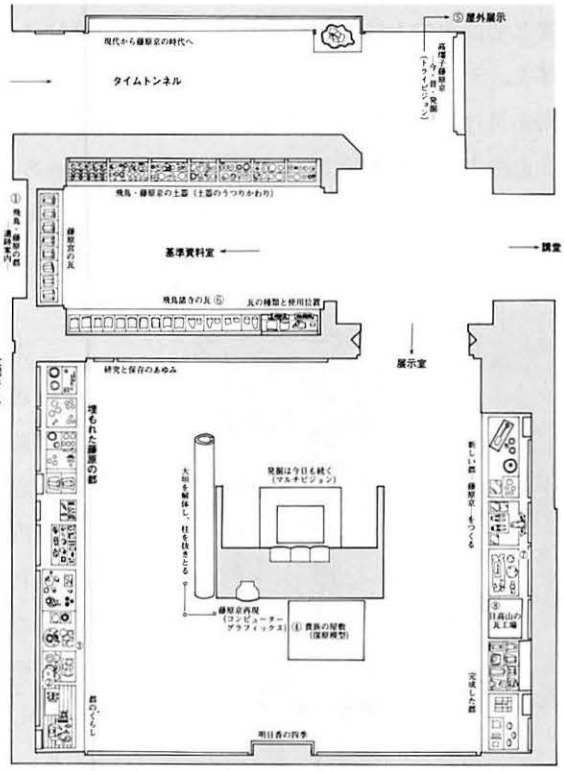
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

公開部門の中心となる展示室が1989年6月にオープンしたので，その概要を紹介する。

展示スペースは，導入部分・展示室（190㎡）・基準資料室（45㎡）・屋外展示の4つにわかれる。導入部分には，ボタンひとつで主要な遺跡の写真と，最近発掘した遺跡の概要がモニターに映し出される飛鳥・藤原地域の遺跡案内板。最新の調査成果を展示した速報コーナー。〈現代から藤原京の時代へ〉と題したタイム・トンネルなどがある。

展示は，古代国家形成のうえで画期的な都として評価される藤原宮・京が，発掘調査によってどこまで復元できるかをわかりやすく説明することを目的とした。展示室は大きく5つのブロックにわけ，さらにいくつかのテーマごとにまとめ，出土遺物・ジオラマ・模型・写真・図・イラストレーションを使って復元した。イラストは穂積和夫氏に依頼し臨場感あふれるものになった。〈新しい都―藤原京―をつくる〉では，藤原京がつくられるまでを，〈完成した都〉では京と宮の規模と構造についておもに図や写真を使って紹介。〈都のくらし〉では当時の役人や貴族・庶民の生活を出土遺物で，〈埋もれた藤原の都〉では平城遷都後の藤原京域がどうなったか，〈研究と保存のあゆみ〉では忘れ去られた藤原宮が調査・研究によって甦える過程を写真や図を使ってパネル展示で示した。このほかに，〈藤原京再現〉と題したコンピューター・グラフィックス，〈山田寺東回廊の発掘〉・〈発掘の進めかた〉・〈出土遺物の整理〉を紹介する9面ダイナミック・マルチ・ビジョン，タイム・トンネルの正面を飾るトライ・ビジョンなど，様々な映像技術を利用してビジュアルな展示づくりをめざした。基準資料室は，もう少し詳しく調べたいという一般の方々や研究者を対象に，年代のきめてとなる瓦や土器を年代順にならべている。（平日午前9時～午後4時半，土曜9時～12時まで開館。日曜・祝日，第2・第4土曜日，年末年始休館，入場無料。）

（大脇　潔）



展示室の展示配置

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部が，1989年度に実施した発掘調査は，平城宮跡内では，朱雀門，推定第二次朝堂院東第三堂・東門，推定兵部省地域，宮北面大垣の５件，平城京域内では，21件であった。以下，主要な調査の概要を報告する。

１．平城宮跡の調査

朱雀門の調査（第201次，第211次）

朱雀門については，第16次，第17次，第112－11次と調査がなされ，規模が判明している。第211次調査では既発掘地もふくめた全体を発掘している。主な遺構は，朱雀門 SB1800，南面大垣 SA1200，東脇門 SB1801，西脇門 SB1802，下ツ道の西側溝 SD1900で，ほかに溝10条，塀２条，足場穴も検出した。

朱雀門 SB1800　掘り込み地業による基壇，礎石根石，礎石落とし込み穴，礎石，足場穴を検出した。基壇の掘り込み地業は，南端を新たに検出した。掘り込みの範囲は平均で，東西が約31.9ｍ，南北が約16.6ｍである。第16次の調査所見と合わせ基壇の築成過程を復原すると以下のようになる。灰黒色粘質土の地山を1.5ｍほど掘り下げ，全面に河原石を敷きつめて地業の基礎とし，その上に版築を繰り返す。版築の単位は，底近くでは20～30㎝ほどあるが，上部では薄く，5～10㎝である。版築がかなり進んだ段階で，柱位置の周囲に礎石の据え付け穴を掘る。据え付け穴は，側柱では長さ３～５ｍ，幅２ｍほどの南北に長い掘形，棟通りの柱では一辺約２ｍの方形の掘形で，深さは検出面から約60㎝ある。据え付け穴の中に根石を置きながら，再び丁寧に版築を行い，最後に礎石を据え付け，版築を繰り返して基壇を完成させる。なお，地業の掘り込み部分からの排水のためと考えられる溝を検出している。

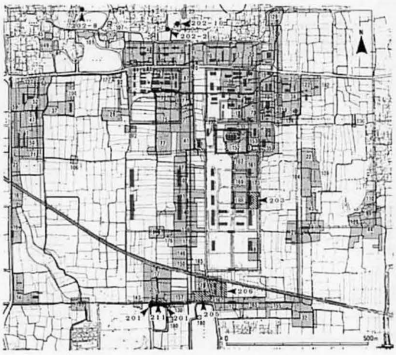
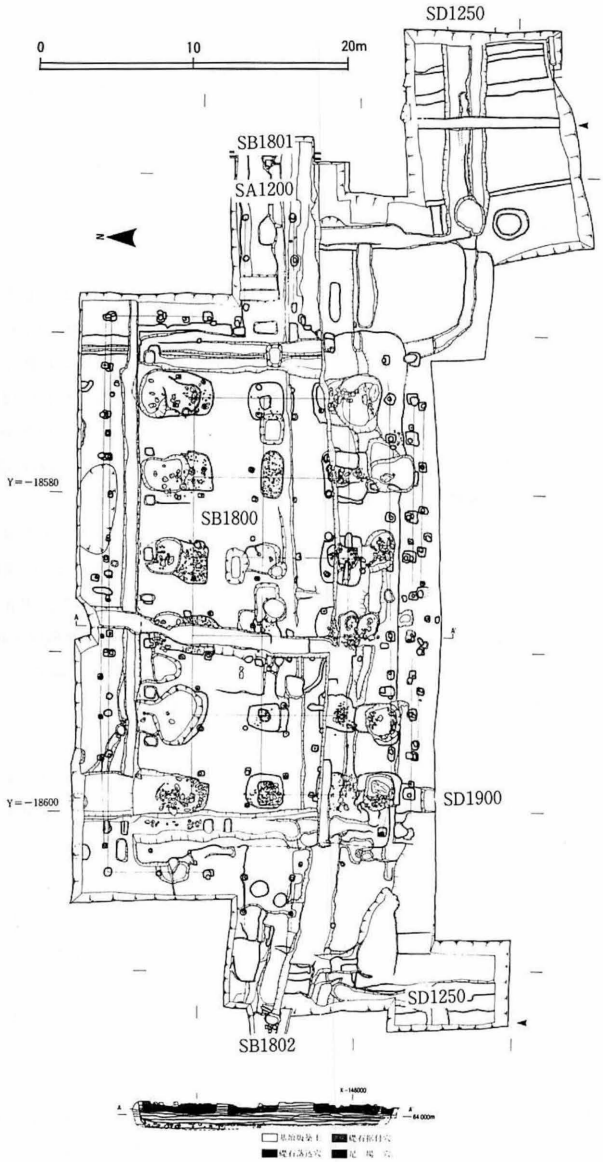


図　1989年度平城宮内発掘調査位置図

基壇の南３分の１は削平が著しいものの，南側柱列の根石が予想以上に残存していた。礎石据え付け穴は南半を直径２～３ｍの礎石落とし込み穴で壊されており，さらに礎石抜取り穴によって切られている。これらの穴の内５ヵ所から礎石やその破片を検出した。礎石の完存するものは直径１ｍ以上あり，特別な加工は行わない。礎石を落とし込んだ時期や再度抜き取った時期については遺物が出土しなかったため明確にはし難い。

今回の調査では足場穴を新たに検出した。基壇上の根石の周囲には，柱の四周を囲む形



朱雀門の調査（第201・211次）遺構図

の足場穴がある。礎石据え付け穴を切るので，基壇がほぼ完成し，礎石も据えた段階で足場を組んだものであろう。基壇の周囲では，建設時，解体時の足場穴を検出した。基壇南側の足場穴列のうち，朱雀門の東西妻柱と柱筋を揃える2柱穴の間隔は，24.8mである。これを朱雀門の桁行総長に読みかえると柱間寸法4.96mを得る。この値は，小尺で換算すると16.7尺と完数値を得られないが，大尺換算ではほぼ14尺という完数になる。

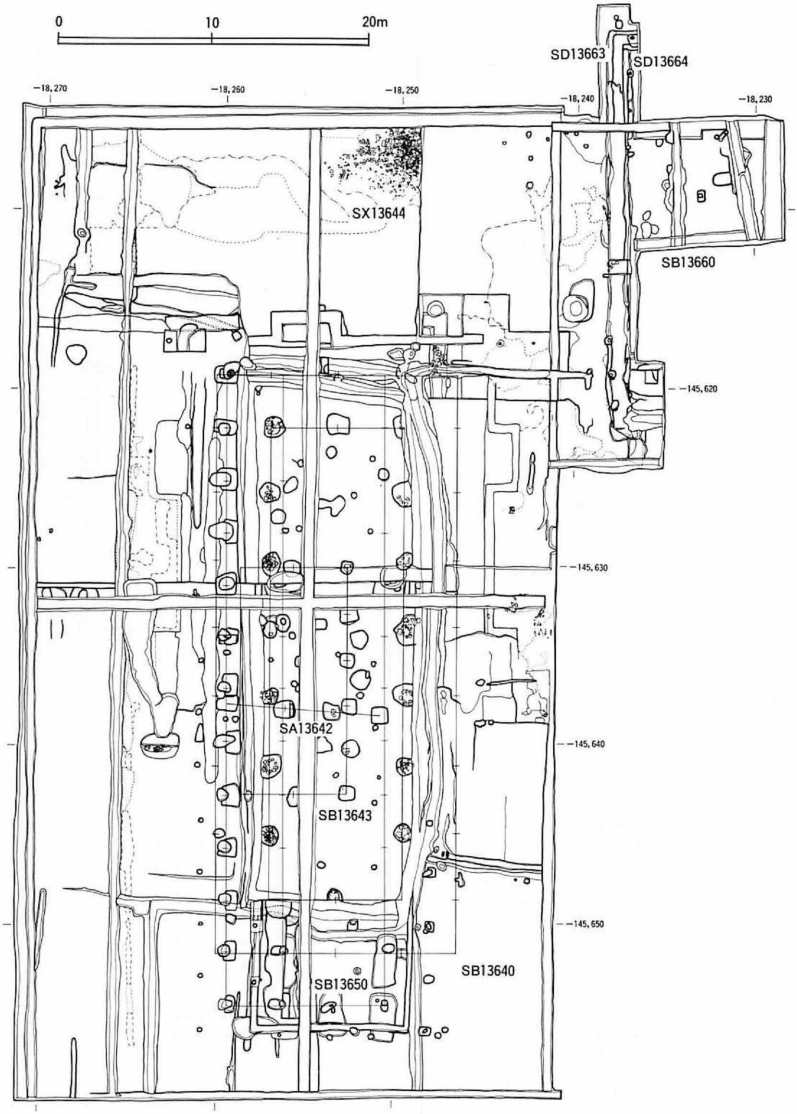
南面大垣 SA1200　朱雀門の東西で計25m検出した。北半部は第16次調査で既に確認しており，今回は南半部を新たに調査した。削平が著しく基底部がわずかに残るだけである。掘込み地業は，犬走りを含めて地山を約30cm掘り下げる。犬走りの部分は深い。地業の版築を行った後に築地本体の部分を掘り下げ，再び版築を行って築地を築成するという二段階の工程をとる。朱雀門基壇のすぐ東側で，築地の南北の添柱を2間分検出したがそれより東には延びない。同様の添柱列は門の西側でも検出している。掘込み地業の平面形はこの添柱の柱穴の周囲が突出する形をしているために第16次調査で築地の基底部幅が12小尺に広がると見ていたが，今回の調査の結果では，南面大垣は朱雀門に取り付く部分でも基底部の幅が9小尺である可能性が高い。

第二次朝堂院東第三堂・東門の調査（第203次）

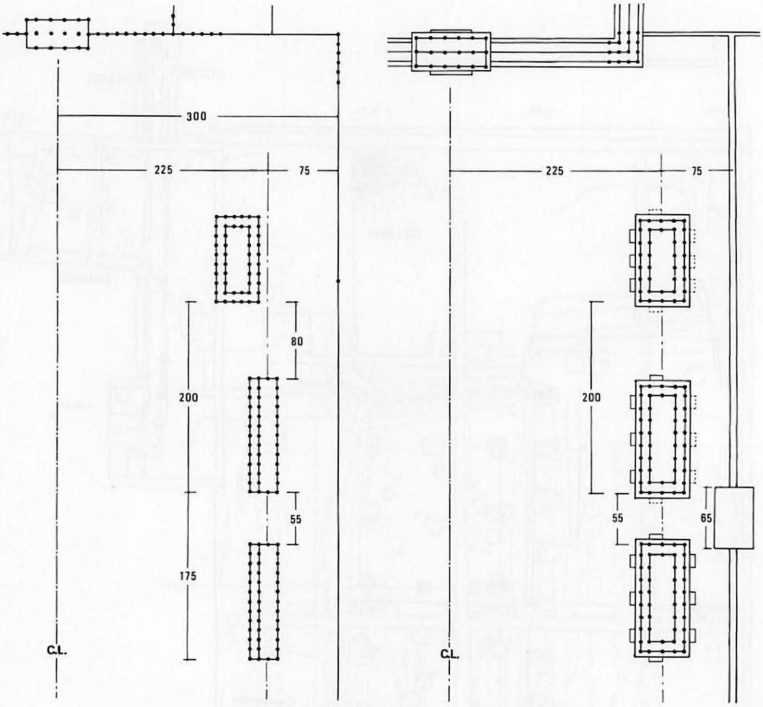
第二次朝堂院については，1984年度の第163次調査以来，継続的にその東半分を調査してきたが，今回は東第三堂と東門の調査を行った。その結果検出した主な遺構には，朝堂院東第三堂およびその下層遺構，第三堂廃絶後に設けられた掘立柱建物・塀などがある。調査地の層位は粘土質の地山の上に5世紀代から7世紀代の遺物包含層があり，その上を整地層が被っている。その厚さは調査区の西では0.3～0.4mだが，東に行くほど厚くなり調査区東端では2mを越す。

上層建物 SB13640　上層建物の基壇は残りが良く，現状で東西11m，南北29m，高さ0.6～0.8mあり，ほぼ身舎部分にあたる。基壇は下層建物の柱を抜取り，埋め戻した後，黄褐色の粘質土による粗い版築で築いており，掘り込み地業は行っていない。基壇上に残る礎石の根石や礎石抜取り穴から，身舎は桁行7間，梁行2間であることがわかる。また，基壇縁や階段の位置からみて，四面に庇がつくことが確実である。したがって，全体規模は，桁行9間，梁行4間である。柱間寸法は，身舎桁行・梁行がともに約3.9m（13尺），庇の出は3m（10尺）である。階段は，北面1ヵ所，東及び西面各2ヵ所に残る。北面階段は身舎西妻の間に合わせ，東西両面の階段は，中央間と2間おいた北の柱間と対応している。階段の規模はいずれも幅は13尺，基壇からの出は約1.2m（4尺）である。階段は本来，南面及び東西両面の南にも存在したと推定でき，もとは合計8ヵ所にあったものであろう。基壇外装および階段は，凝灰岩切石で築かれていたことが，散乱していた破片からわかる。基壇周囲は礫敷でごく一部が瓦敷である。SB13640は，東第二堂SB11750と同一規模・平面である。

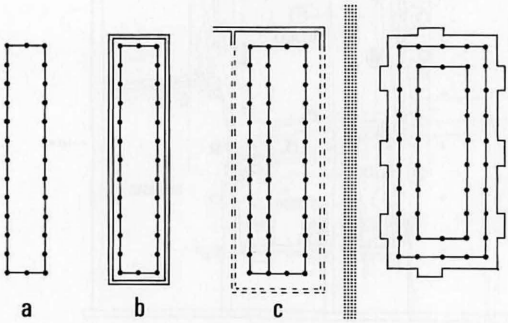
下層建物 SB13650　下層建物の大部分は上層建物基壇下に重複している。平面は，桁行12間，梁行3間で，西庇が付く形式であることがわかった。さらに雨落溝を北・東・西の三方で確認した。SB13650の造営は，詳細をみると次のような過程をたどる。（22頁図参照）。まず，一帯の



第二次朝堂院東第三堂・東門の調査（第203次）遺構図



第二次朝堂院位置図　左：下層，右：上層（単位は尺）



東第三堂の変遷

盛土整地を行ったあと，建物部分をさらに層状に築成する。身舎部分の柱掘形を穿ち，柱を建てる(a)。次いで身舎の周囲に幅0.3mの細溝SD13651をめぐらす(b)。その後，SD13651を埋め戻し，両側に基壇をつぎ足して西庇の柱掘形を掘り，最終的には西庇付建物として完成している。このようにSB13650は複雑な工程を示すが，これが，単に作業工程を示すものなのか，時期差とみて身舎だけで一端完成したものに，後に西庇を付加したものかが問題となる。同様の平面の東第二堂下層建物SB12930では，このような工程は知られていない。

東門 SB13660　第二堂と第三堂との中間の東に，築地に開く門を検出した。基壇は削平され，礎石の痕跡も失われていたが，雨落溝SD13661から，東門基壇の南北長は約65尺であることがわかった。SD13661は，本来は両側とも凝灰岩製の側石を備えていたと考えられる。

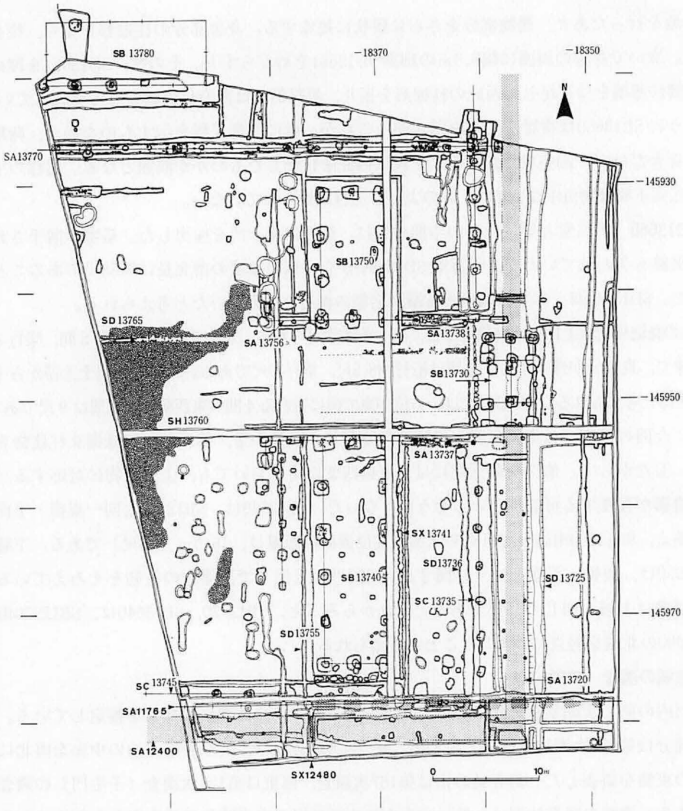
SB13640廃絶後基壇上に掘立柱建物1棟，塀1条が設けられる。建物SB13643は桁行5間，梁行2間の南北棟で，東半分が残存する。柱間は桁行約8.5尺，梁行10尺である。柱穴掘形出土土器から平安時代の建物と考えられる。塀SA13642は，方位が東で南に振れる4間の東西塀で，柱間は9尺である。

まとめ　今回の調査では東第三堂上層建物の下層に，東第一堂，第二堂と同様掘立柱建物を検出した。したがって，第二次朝堂院には，東第四堂以南においても，上層建物に対応する一連の下層遺構が存在する可能性がいっそう高くなった。SB13640は，SB12920と同一規模・平面で柱筋を揃え，SB12920南端とSB13460北端の柱位置間の距離は，16.5m（55尺）である。下層建物SB13650は，規模，平面形式，柱間寸法はSB12930と同じで，建物の柱筋をそろえている。両者の間隔は上層と同じく55尺である。これからみると，SB12920，SB13640は，SB12930南端とSB13650の北端を起点に計画したことが考えられる。

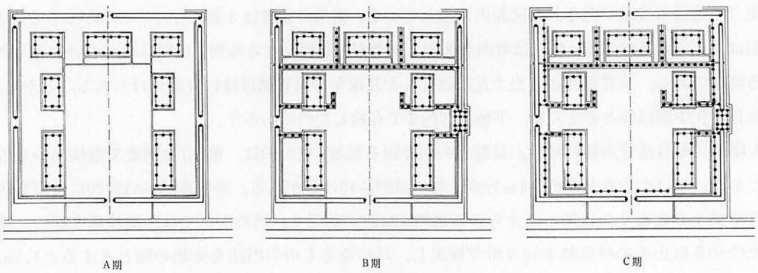
兵部省地域の調査（第206次）

壬生門内の第二次朝堂院地区において，門を入ってすぐの西側に兵部省を推定している。その北西部分は第175次調査で調査している。第206次調査では，兵部省推定地の中央を南北に通る市道の東側を調査した。調査地の南は第167次調査，南東は第122次調査（壬生門）の調査区と重複する。遺構の残存状況は，特に北半が極めて良好で奈良時代の地表面をとどめている部分がある。地山におおむね二層の整地が認められ，第一整地層は調査区のほぼ全域にわたり，第二整地層は築地で囲まれた区画内に施している。遺構の変遷は3期に分けることができる。A期は兵部省の造営当初，B期は省内を区画し東門が八脚門となる時期，C期は廊がつけ加えられる時期である。造営年代は，出土瓦はほとんど瓦編年の第Ⅲ期以降に位置付けられることから，奈良時代中期以降と考えられ，平城宮廃絶まで存続したのであろう。

A期　兵部省造営当初の時期。兵部省の南を限る築地SA12400は，第167次調査で既検出のものである。幅は犬走りを含め2.4m分が，積土は厚さ15ほどが残る。東面築地SA13720には調査区の中央やや北寄りに棟門と考えられる東門SB13730が開く。門の南側では，築地基底部に，積土のせき板止めの柱痕跡を10カ所で検出し，対になるものの内法を築地の幅ととすると1.5m（5尺）となる。ただし，この柱は築地寄柱の可能性もあり，その場合は築地の幅は6尺となる。



第206次調査遺構図



兵部省の変遷

築地で囲まれた中には，北側に3棟，南側の東南に2棟ずつの建物をコの字形に配する。いずれも低い基壇上に建つ礎石建物である。今回の調査区にかかったのは3棟である。

第一堂SB13750は，桁行3間，総長11.9m，梁行2間，5.9mの南北棟。東第二堂SB13740は，SB13750の南に柱筋をそろえて建つ，桁行5間，総長20.7m，梁行2間，5.9mの南北棟。東側と南側で基壇縁石の痕跡を検出している。北方建物SB13780は，北側中央に位置する東西棟。SB13780の西には，第175次調査でSB13000を検出しており，東にも同規模の建物の存在が推定される。SB13750・SB13740の西，SB13780の南には礫敷の中央広場SH13760がある。東西長は建物基壇間の距離でおよそ35m，南北長はSB13780南方の溝とSA12400との距離で52.7mである。

B期　SA13770によって兵部省内を南北に区画するとともに，SB13780の東西にも塀を設ける。また，SB13740・SB13750とSA13720の間を，SA13737・SA13738でつなぐ。SB13750の南妻柱筋から西側へは，西に2間，北に折れて2間のSA13756がつけられる。SA13737の西二間目は，玉石，凝灰岩切石，瓦片などで舗装して戸口とする。これらの塀の基底部はいずれも複雑な構造をしている。掘形に柱を立てた後に，土盛りを行ない，両側に溝を掘って，その溝の内側の肩に瓦片を一列に並べている。SB13730を礎石建ちの八脚門に建て替える。桁行3間，中央間3.9m（13尺），両脇間2.1m（7尺），梁間は2.1m（7尺）の等間である。

C期　SA12400では推定南門の東西内側各4間に，礎石建ちの翼廊SC13745を設ける。礎石は上面が平坦な自然石で長辺60cm，短辺40cm。柱間は3.3m（11尺），築地心よりの出も3.3m（11尺）である。廊の軒の出は，雨落溝の位置から1.5m（5尺）に復原される。SH13760の南北長がSA13770とSC13745礎石との心心距離で50.7mとなる。東面でもSA13720の内側に礎石列を検出し，東側では東門前を除いたすべての部分に廊SC13735が及ぶことがわかった。礎石は南面と同様，上面の平らな自然石で，柱間・築地心からの出も南面と同じく3.3m（11尺）である。廊の礎石の間には一部に瓦列の地覆が残存しており，柱間を壁ないし連子窓で閉ざしている部分があることを示している。廊柱心の西1.2m（4尺）に，廊の西雨落溝SD13736がある。

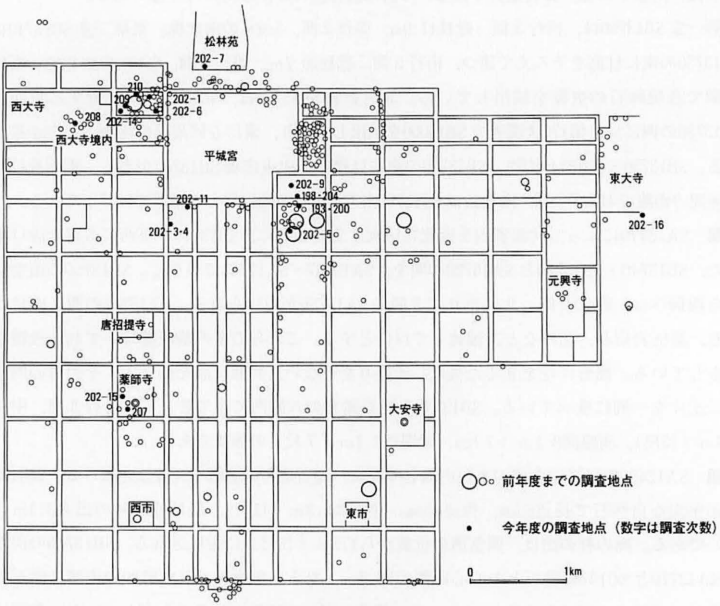
兵部省の調査で出土した軒瓦をみると，軒丸瓦6282G－軒平瓦6721Fのセットがもっとも多く，軒丸瓦6225C－軒平瓦6663Cのセットがそれに次ぐ。このうち軒丸瓦6282G－軒平瓦6721Fのセットは今のところ兵部省独自のセットとみることができる。

今回，調査区の下層から，掘立柱東西塀SA1765を検出し，第16次，第122次，第157次，第167次の調査結果と合わせて，SA1765が朱雀門から壬生門の西まで至っていることが明らかとなった。柱間は9尺で，掘形は東西1.5m，南北1mの長方形である。

宮北面大垣の調査（第202－8次）

第164－1次調査で検出した掘立柱塀の西への延長線上にあたる部分を調査したが，相当する遺構は検出できなかった。釣り殿神社の西にのびる東西方向の里道は北面大垣の遺存地割りと考えられ，それが今回の調査区の北を通ることから，御前池が築かれる以前の谷筋中央部付近で大垣が北に振れていたことが推定できる。（森本　晋）

2．平城京跡の調査



平城京発掘調査位置図

左京二条二坊五坪と二条大路の調査（第198次Ｂ・Ｃ区，200次補足，202－9・13次，204次）

1986年９月30日から始まったそごうデパート建設に関連する発掘調査も，第204次調査を最後にして1989年9月6日に終了した。これまでに実施した調査は10次にわたり，総面積は31，400㎡におよぶ。本年度の調査では，第198次Ｂ区・同Ｃ区・第200次補足・第204次・第193次Ｆ区の５箇所の発掘区を設定した。昨年度までは，おもに平城京左京三条二坊一・二・七・八坪を調査してきたが，本年度は主として，その北方の左京二条二坊五坪と二条大路北半部を調査の対象とした。また，べつに左京二条二坊五坪の東辺（第202－13次）と北辺（第202－9次）でも調査しており，あわせて報告する（第193次Ｆ区のみ別項で報告）。発掘調査で検出した遺構はじつに多彩であり，以下のようなＡ～Ｇの７期にわたる複雑な変貌をとげている。

Ａ期（奈良時代初頭）　五坪の南面・東面を築地塀SA5245が画する。宅地内の築地雨落溝は，南面ではSD5246，東面ではSD5031が流れる。五坪の中央東寄りに掘立柱建物SB5270・5280がたつ。SB5270は３間×３間の倉庫風建物である。SB5280は東妻４分間のみを検出した。

B期（奈良時代初頭）　五坪の建物に変化はないが，二条大路と東二坊坊間路の各側溝がつくりかえられ，築地塀には軒瓦が葺かれる。西側溝は，SD5240の南にSD4699が新設され，SD5021と一体となる。そして北側溝SD5240・南側溝SD5150は，SD4699以東を埋めたてる。

C期（奈良時代前半～中頃）　五坪内では，中央北寄りにSB5400を，東辺部に長大な南北棟建物SB5250を配置する。遅くともこの時期には，五坪南面築地塀の中央に，掘立柱の一間の門SB5315が二条大路にひらく。門の東北には建物SB5330を配置し，築地塀の北雨落溝をSD5244につけかえる。SB5250は梁間4間，桁行20間以上の東西両庇付南北棟で，南妻から6間めと12間めに間仕切りがある。柱間寸法は，梁間が10尺，桁行が8尺で，庇の出は東が8尺，西が9尺である。柱穴には，建築部材を転用した礎板をともなうものが多い。

この時期が終わるころ，二条大路の南・北の路肩に濠状の東西大溝SD5100・5300・5310が掘られ，大路の幅は約29mとなる。南側のSD5100は幅2.6m，深さ0.9m，北側のSD5300・5310は幅2～2.3m，深さ0.9mである。SD5300は東が東二坊坊間路，西が五坪中央の門の手前で途切れるが，門の西では，SD5310がSD5300とほぼ対称をなして西に延びている。これらの溝は，木屑層内に木簡のほか大量の遺物をふくみ，その出土状況と木簡の年紀から，天平十二年（740）前後の掘削後，短期間のうちに埋没し，遺物が一括して捨てられたことが推定できる。

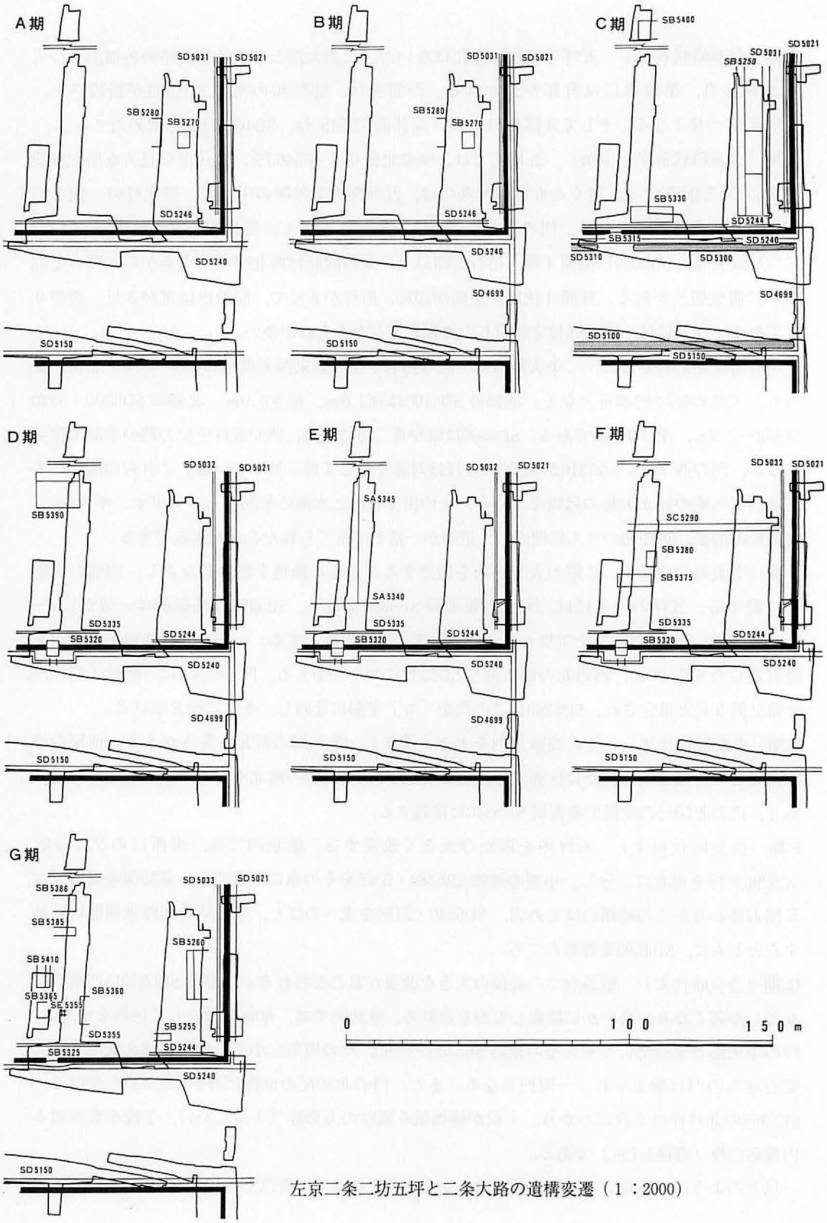
D期（奈良時代中頃）　C期の大型建物を撤去するとともに敷地を整地しなおし，内部の建物を一新する。五坪の中央には，北庇付東西棟SB5390をおく。SB5390の柱掘形は一辺が1.5～2.0mもあり，底に角材を十字形もしくは一文字に据え礎板とする。一方，五坪南面築地の門を礎石建ちのSB5320に，門の北の雨落溝をSD5335につくりかえる。門SB5320は，桁行1間14尺，梁間2間9尺と推定され，SD5240はこの門を「コ」字形に迂回し，そこに橋を架ける。

E期（奈良時代後半）　三たび敷地内を大きく改変し，築地塀の軒瓦も葺きかえる。前期の建物は撤去し，敷地内を新たに区画する。南北塀SA5345は五坪の南北中軸から東に20尺の位置にあり，門の北50尺の位置で東西塀SA5340に接続する。

F期（奈良時代後半）　五坪内を四たび大きく改変する。敷地内では，東西にのびる単廊SC5290が坪を南北に二分し，小型の建物SB5380・5375をその南に配置する。条坊関連遺構では，E期の終わりかこの時期のはじめ頃，SD5240・5150を東へのばし，東二坊坊間路東側溝に接続するとともに，SD4699を埋めたてる。

G期（奈良時代末）　敷地内での最後の大きな改変がおこなわれる。北側溝SD5240は門前のはりだしが弱くなり，緩やかに屈曲しながら流れる。敷地内では，単廊を撤去して区画をかえる。坪の中央部と東辺部にやや大型の建物SB5386・5260，その周辺に小型の建物数棟を配置する。礎石建ちの門は撤去され，一間門となる。また，門の北50尺の位置に井戸SE5355を設ける。SE5355の井戸枠は2段にわかれ，上段が横板組み隅柱の方形枠（1辺1.3m），下段が竪板組み円筒形の枠（直径1.5m）である。

以上のように，左京二条二坊五坪では，奈良時代を通じて1町以上の敷地を利用しており，C



左京二条二坊五坪と二条大路の遺構変遷（1：2000）

期以降は二条大路に門がひらいていたことがあきらかになった。奈良時代前半については，SD5300から「中宮職移兵部省卿宅（略）天平八年八月二日付舎人刑部望麻呂」という記載のある木簡（後出）や「兵部卿宅」と書かれた墨書土器が出土しており，五坪は兵部卿藤原麻呂の邸宅として利用された可能性が大きい。奈良時代後半になると，多数出土した軒瓦や，桁行20間以上の長大な建物に象徴されるように，五坪はより官衙的な色彩をおびていたものと想像される。かりに官衙でないにせよ，この一郭をふくむ平城宮東院南方遺跡のイメージは，一般の京内宅地とはかなり異質であるといってよい。

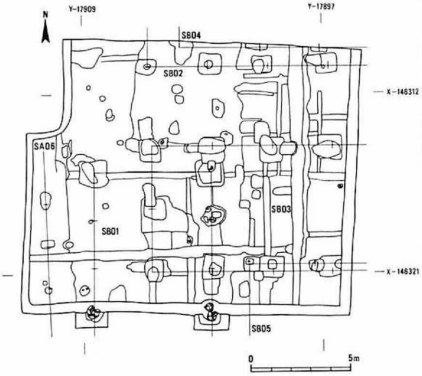
左京三条二坊八坪の調査（第193次Ｆ区）

本調査では，「長屋王木簡」溝SD4750の北端を確定し，溝を完掘した（約55㎡）。SD4750は，幅2.4ｍ，深さ0.9ｍあり，総長が2.7ｍと判明した。出土した木簡は，木簡溝全体で４万点以上にのぼる。

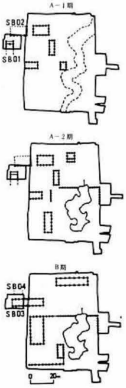
左京三条二坊六坪の調査（第202－５次）

店舗付住宅建設にともなう事前調査である。調査地は，平城京左京三条二坊六坪にあたり，東側に隣接する特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園と同一の宅地と考えられる重要な場所である。検出した遺構は，礎石建物１棟，掘立柱建物４棟，掘立柱塀１条，溝７条以上である。建物は柱穴の切合い関係などから，A～Cの３時期に分けることができる。

Ａ期（奈良時代前半）　礎石建物SB01と掘立柱建物SB02を設ける。SB01は，根石の残存するところが３箇所，根石の抜取り穴が１箇所で検出されたにすぎないが，おそらく３間以上×２間の南北棟であろう。なお，北妻の両隅柱の北には掘立柱の柱穴がならび，庇か縁などSB01に付随するものと思われる。SB02は調査区の北端で検出した柱穴列で，東西に３間分ある。宮跡庭園内で検出したSB1571の南側柱の西延長にあたる。



第202－５次調査遺構図



第202－５次調査区と「宮跡庭園」の遺構変遷

B期（奈良時代後半）　東西棟の掘立柱建物SB03がこの時期に属す。2間×3間以上の規模をもち，宮跡庭園内で検出されたSB1574の西延長にあたる。両者は一体の建物であろう。

C期（奈良時代末期）　掘立柱建物SB05がこの時期に比定される。調査区東南隅で，2個の柱穴がみつかっており，南北棟北妻の棟通柱と西隅柱であろう。

右京三条一坊十五坪の調査（第202－3・4次）

集合住宅および店舗建設にともなう事前調査である。両調査地は位置が接近しており，右京三条一坊十五坪の西南部分にあたる。

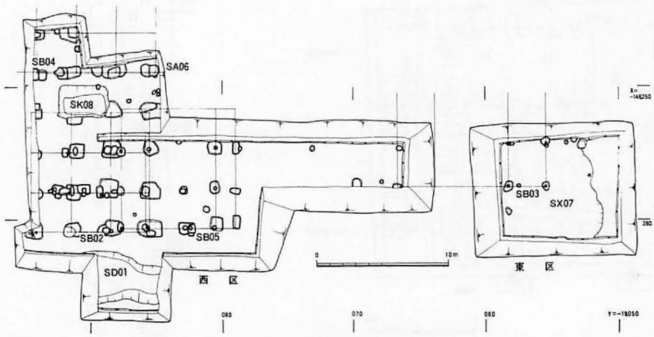
第202－3次調査　東区は面積が192㎡あり，十五坪の中央やや南より，西区はその西約22mのところに位置し，面積が15㎡である。西区はとくに取り上げるべき遺構はなかった。東区の奈良時代の遺構としては西半部で柱穴を7個検出したのみである。

第202－4次調査　面積は東区が72㎡，西区が185㎡である。おもな検出遺構は，奈良時代の掘立柱建物4棟，掘立柱塀1条，溝1条，流路1条で，以下の3時期にわたる変遷を遂げている。

A期　東西溝SD01は調査区の南縁に位置し，自然流路と考えられる。堆積土中からは奈良時代初期の須恵器・土師器が出土しており，その頃に埋められたものである。

B期　SD01を埋めたて，坪を宅地として利用する。建物SB02・03・04がこの時期に属し，さらに2時期に細分できる。SB02とSB03は柱筋をそろえており，同時期とみなせるが，SB04は時期を異にする（前後関係は不明）。総柱建物SB02は3間×3間で，柱間寸法はそれぞれ10尺（3.0m）等間である。SB03は東区と西区にまたがって検出した南北棟建物。SB04は，SB02と同じ柱間寸法をもち，SB02と同規模・同構造の建物とみなせる。

C期　SB02・03・04が廃絶し，SB03の跡には流路状の窪地をつくる。西側では，建物SB05，東西塀SA06を建てる。SB05は3間×4間の南北棟建物で，東西に庇がつく。SB05の北妻柱から北へ3.0mの位置でSA06がとおり，その柱間はほぼ10尺（3.0m）等間である。流路状の遺構



第202－4次調査遺構図

SD07は，東岸のみ検出した。出土須恵器から奈良時代後半期の遺構とみられる。（浅川滋男）

3．平城京内寺院の調査

薬師寺東面回廊の調査（第207次）

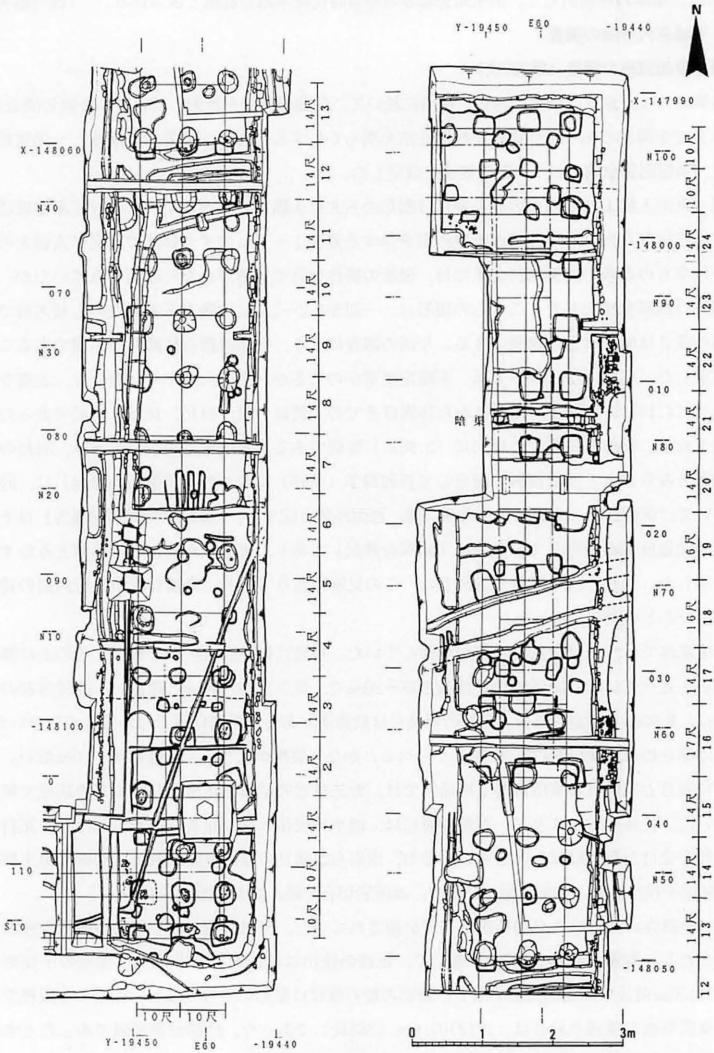
薬師寺では，金堂，僧房，西塔，中門に続いて，回廊の再建を計画している。今回の調査は，これまで未解決であった柱間数や柱間寸法を明らかにするために，以前の調査地と一部重複させて，東面回廊全域にわたる調査範囲を設定した。

複廊　東南入隅より3間目の礎石据付け掘形から北東入隅まで，ほぼすべての柱位置を確認した。礎石抜取り穴は，平面形が不整円形を呈する直径1～2mのすり鉢状で，底に人頭大の根石を残すものが多い。発掘区北半では，後世の耕作行為で遺構がかなり破壊されていたが，礎石据付け掘形を検出した。これらの掘形は，一辺が1.2～2.0mの隅丸正方形ないし長方形で，本来の深さは60cmほどに復原できる。今回の調査により，東面回廊の柱間数が24間であることが確定した。柱間寸法については，不確定要素がのこるが，東南入隅から15間分と，北端5間が14尺（4.14m）等間で，16間目から19間目までの4間は17尺，14尺，16尺，16尺であったと推定される。梁行の柱間寸法は10尺（2.96m）等間である。基壇幅は約10.1mあり，34尺の計画寸法とみられる。伽藍復興を記念して長和四年（1015）に著された『薬師寺縁起』は，回廊について，南面20間，北面16間，東面24間，西面25間と記すが，『薬師寺発掘調査報告』はそれ以前の発掘成果を検討して，東面は「転写の誤記」であり，東面・西面ともに25間とみなす解釈を示した。しかし，今回の発掘調査は，この見解が誤りであり，東面回廊が桁行24間の建物であったことを明らかにした。

基壇東縁では，ほぼ全域に外装が遺存していた。基底に偏平な自然石を置き，その上に凝灰岩切石を並べている。凝灰岩切石は高さ15～20cmで，長さは30～90cmと細長い。造営当初の基壇高は，約90cmと推定される。基壇の両側には雨落溝がある。西側は浅くしか残っていないが，東側は深さ40cm，幅150cmで，西側とくらべるとかなり規模が大きく，溝底は40～70cm低い。南から17間目と22間目の東雨落溝上層周辺では，軒先付近の屋根瓦が落下したままの状態で埋没していた。注目すべきことに，瓦堆積層には，焼土や炭化木材が顕著に認められたが，瓦自体が火熱を受けた形跡はほとんどない。なお，南から21間目のほぼ中間位置で，回廊基壇を横断する暗渠を検出した。内側の幅は45cmで，凝灰岩切石を組んだものである。

単廊　薬師寺の回廊は，当初単廊として計画されていた。今回の調査でも単廊の遺構を検出した。ただし，複廊遺構の保存を考慮して，単廊の検出は部分的にとどめた。掘形の平面形は70cm×150cm前後の不整楕円形を呈し，複廊の礎石据付け掘形にくらべると，かなり小規模である。東面単廊の棟通り総長は，ほぼ107.6m（363尺）であった。柱間が等間隔であったとすれば，単廊は桁行28間（両隅をのぞく）で，その柱間寸法は約3.71m（12.5尺）となる。

回廊の変遷　『薬師寺縁起』によれば，天禄四年（973）の大火で四面廊は焼亡したとある。また，永長元年（1096）と康安元年（1316）に地震による回廊の倒壊を記す史料もある（『中右



注）座標値のうち X，Y は国土方眼座標系 S, N, E は薬師寺座標

薬師寺東面回廊遺構図（1：400）

記』および『嘉元記』)。落下した屋根瓦をみると，創建瓦のほかに，天禄の火災後の再建のために作られた軒瓦も多少混じっているが，天禄再建瓦より新しいものはない。さらに東側の雨落溝下層からは10世紀末～11世紀の土師器，同じく落下瓦をふくむ上層からは12～13世紀の瓦器が出土した。おそらく，下層が天禄の火災～再建の時期，上層が倒壊～廃絶の時期に対応するものとみられる。また，溝上層の落下瓦はあきらかに建物の倒壊によるものであり焼土や炭化材をふくむので，火災による倒壊の可能性が大きい（ただし，この時期の火災を示す史料はない)。以上だけでは結論を下しがたいが，奈良時代のはじめに完成した複廊は，①天禄四年(973）の火災後再建されたが，②東面回廊は12～13世紀頃に火災で焼け落ち，③焼け残った回廊建物は14世紀半ばの地震で倒壊し廃絶した，という変遷を推定できる。

西大寺境内の調査

1989年度の防災工事にともなう発掘調査である。古墳時代から近世まで，いくつかの遺構が検出された。西大寺造営以前の平城京の遺構には掘立柱建物１棟，素掘りの溝２条，井戸１基，沼地などがある。西大寺創建時の遺構は，西塔の掘込み地業である。この地区の調査は昭和30年に実施されており，今回はその一部を再発掘した。地業は八角形で，北東辺が深く（残存部深さ約0.9ｍ)，底に人頭大の石をならべその上を版築している。

西隆寺旧境内の調査（第209・210次）

百貨店改築にともなう事前調査である。第209次調査区は右京一条二坊十坪の西隆寺金堂の東側，第210次調査区は西二坊坊間路と北一条大路が交差する位置にあたり，西隆寺旧境内の東北隅をふくむ。第210次調査区は秋篠川の旧流路にあたり，遺構面がおおきく浸食されていたが，第209次調査区では，西隆寺の東面回廊をはじめ，以下のような各時期の遺構を検出した。

A期（古墳時代の遺構）　発掘区を斜めに横断する大溝SD350のほか，数条の斜行溝を検出した。これらの斜行溝は水田に関わる灌概施設と推定される。

B期（奈良時代前半の遺構）　検出した掘立柱建物は桁行柱間数を３間とするものがほとんどで，柱間寸法は６尺前後，柱の穴も小さい。２基の井戸のうち，西南隅のSE353は井戸枠が抜き取られているが，SE370は井戸枠を残している。昭和46年の調査によると，西隆寺造営以前には坪境小路が通り，十坪が１町以下の占地であったことが判明している。また同時に，十坪のほぼ中央の塔下層では，南庇付きの大規模な建物を検出した。今回の調査区では，坪内を分割するような遺構はみられず，十坪は１町占地で，検出した建物は敷地内の雑舎群と考えられる。

C期（西隆寺の遺構）　西隆寺造営時の整地層で東面回廊を検出した。基壇土は削平されて遺存せず，回廊に係わる遺構は礎石据付け穴，西雨落溝底の瓦堆積，暗渠である。回廊は複廊で，礎石据付け穴は３列ならび，桁行方向に19間分を検出した。桁行柱間寸法は10尺等間であるが，南から８間目のみ８尺と狭い。梁行方向の柱間寸法は，８尺等間である。西雨落溝はほぼ底面まで削平されていた。暗渠は底石に拳大の偏平な川原石を並べ，側石に凝灰岩をたてて，底面は東へ向かって低くなる。西端に川原石の底石と上面をそろえて凝灰岩を据えており，底石の

並びかたがかわる位置が基壇端で，西側柱心からの基壇の出は4尺と推定される。

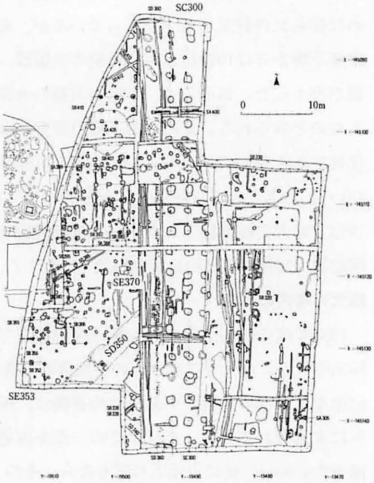
以上の成果から，西隆寺中心伽藍の規模がほぼあきらかになった。金堂と東回廊の中心間距離は130尺あり，したがって東西回廊の心々距離は260尺に復原できる。ただし，東面回廊が西へ曲がる地点は検出していない。回廊は金堂にとりつかず，元禄十一年（1698）の「西大寺伽藍絵図」にみえるように，おそらく講堂にとりついていたのだろう。なお，絵図には東面・西面回廊のほぼ真中に「楽門」が描かれているが，門の位置を確定することはできなかった。

東大寺南大門の調査（第202－16次）

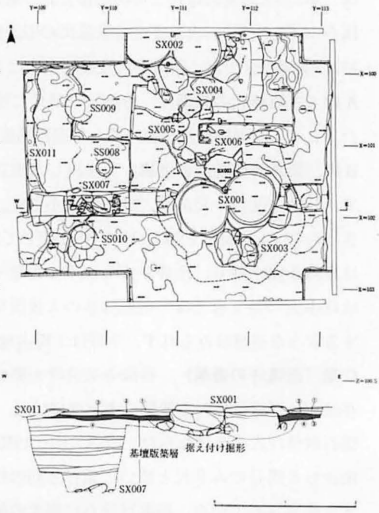
東大寺南大門金剛力士像のうちの吽形像の解体修理にともなう地下調査である。遺跡の基本層位は，上面から第1層は厚さ約2～3㎝の白色砂質土（現代），第2層は厚さ5～10㎝の褐色砂質土のたたき層（江戸時代）。第3層は厚さ約5㎝の褐色土で，非常に固く締めかためられている。奈良時代ほか古代の瓦片が少量出土した。第4層以下は，基壇築成時に順次版築された土層で，現基壇上面から約120㎝下層に基壇の基礎地業として径約10～30㎝大の自然石を敷き詰め，その上に砂質土・粘質土を版築によって互層に積み上げる。第4層以下では，遺物が出土しなかった。検出した遺構は，吽形像の台4石（SX001・002）と，これをとりまく岩座の台石7石（SX003・004），像の足元をつなぐように遺存する人頭大の石列（SX005）とその直下の円礫敷（SX006），基壇基底部の石敷（SX009），そして門の創建か修理にともなう足場穴（SS008・009・010）などである。

調査の成果をまとめると，以下のようになる。

① SX001・002の吽形像台石は，第4層以下の基



第209次調査遺構図（1：800）



東大寺南大門基壇および吽形像台石平面図・断面図（1：80）

壇版築層の築成後に据えつけた。その後，第３層を石際まで敷均して版築で締めかため，基壇面とした。②像の足元まわりの岩座を支える台石（SX003・004）７石のうち，４石は第３層築成と同時に据えられているが，他の３石は据直しなどの補修を受けている。補修の時期は，掘形から出土した寛永通宝によって江戸時代以降に比定できる。③SX005は，浮動沈下した基壇上面と，像両足の爪先を支える角材下面との間に噛まされた玉石である。堀形から文久永宝が出土しており，施工時期は江戸時代末～明治時代に比定できる。なお，現状では，第３層上の吽形像台石SX001・002が，奈良時代当初のものか，鎌倉時代の門再建時に据えなおされたものかを確定することはできない。ただし，奈良時代寺院の門脇間に安置された仏像は一般的に塑像であり，その台石には心木をうける枘穴をもつことが必要である。しかし，SX001・002に枘穴はなく，その点で奈良時代の塑像台石としての可能性は低いといわざるをえない。この課題の解明は，阿形像解体修理にともなう地下調査に待ちたい。（浅川滋男）

1989年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積	備考
6ABY	平城宮　第201次	89.4.17～89.5.20	140㎡	朱雀門
6AAU	平城宮　第203次	89.6.5～89.11.27	1800㎡	第二次朝堂院東第三堂・東門
6ABL	平城宮　第205次	90.1.8～90.6.8	1700㎡	兵部省
6AAY	平城宮　第206次	89.10.13～90.4.27	2700㎡	兵部省
6ABY	平城宮　第211次	90.1.23～90.4.24	1100㎡	朱雀門
6ABN	平城宮　第202－２次	89.5.15～89.5.22	25.5㎡	大膳職地区北方
6ASA	平城宮　第202－7次	89.6.26～89.7.1	60㎡	平城宮北方遺跡
6ACA	平城宮　第202－8次	89.7.19～89.7.26	30㎡	平城宮北面大垣推定地
6ABN	平城宮　第202－10次	89.10.23～89.10.25	24.7㎡	大膳職地区北方
6AFI	平城京　第193次Ｆ区	89.5.16～89.5.29	55㎡	左京三条二坊八坪
6AFF	平城京　第198次Ｂ区	89.4.1～89.5.16	880㎡	左京二条二坊五坪
6AFI	平城京　第198次Ｃ区	89.5.8～89.5.15	40㎡	左京三条二坊八坪
6AFI	平城京　第200次補	89.7.11～89.7.15	40㎡	左京三条二坊八坪
6AFF	平城京　第204次	89.7.25～89.9.6	870㎡	左京二条二坊五坪
6BYS	平城京　第207次	89.7.3～89.9.30	1213㎡	薬師寺東面回廊
6BSD	平城京　第208次	89.8.7～89.10.3	300㎡	西大寺境内
6BSR	平城京　第209次	89.9.28～89.11.29	1800㎡	西隆寺旧境内
6BSR・6AGA	平城京　第210次	89.11.20～89.12.12	560㎡	西隆寺旧境内
6AGA	平城京　第202－１次	89.4.24～89.5.9	80㎡	右京一条二坊八坪
6AGF	平城京　第202－３次	89.5.15～89.6.8	192㎡	右京三条一坊十五坪
6AGF	平城京　第202－４次	89.5.22～89.6.29	257㎡	右京三条一坊十五坪
6AFI	平城京　第202－５次	89.6.7～89.7.7	215㎡	左京三条二坊六坪
6AGA	平城京　第202－６次	89.6.9～89.6.17	50㎡	右京一条二坊二坪
6AFF	平城京　第202－９次	89.9.16～89.10.2	75㎡	左京二条二坊五坪
6AGF	平城京　第202－11次	89.11.27～89.12.18	230㎡	右京三条一坊九坪
6BFO	平城京　第202－12次	90.1.9～90.1.11	15㎡	法華寺旧境内
6AFO	平城京　第202－13次	90.1.29～90.3.3	180㎡	左京二条二坊五坪
6BSR	平城京　第202－14次	90.2.20～90.3.9	130㎡	西隆寺旧境内
6BYS	平城京　第202－15次	89.8.25～89.8.28	9.4㎡	薬師寺北門推定地
6BTD	平城京　第202－16次	90.1.16～90.2.4	15㎡	東大寺南大門

二条大路木簡

平城宮跡発掘調査部

1988年8月末の長屋王家木簡の発見からほどない翌9月，第193次B区調査において，長屋王邸北側の二条大路南端に，当初は二条大路南側溝と考えていたSD5100を検出し，ここから大量の木簡が出土し始めた。その後の第197次・第200次両調査によって，SD5100は左京三条二坊八坪の北側に沿って延びる幅2.6m，深さ0.9m，長さ120mに及ぶ東西両端の閉じた長大な溝状の遺構であることが判明し，1989年夏の第200次補足調査も含めてほぼ完掘した。さらに，第198次調査B区においてSD5100と二条大路を挟んでちょうど対称の位置，二条大路北端にも同様の溝状の遺構SD5300を検出，同調査及び第204次調査においてこれを完掘し，やはり大量の木簡を取り上げた。SD5300は幅2～2.3m，深さ1～1.3m，長さ56mで，左京二条二坊五坪南面中央の門の前で一端途切れるが，門の西側から同様の溝状の遺構SD5310が新たに始まり，その東端約6mを調査した。

1989年度木簡出土遺構と点数

出土遺構	点数
二条大路南端の東西大溝 SD5100	約15,000点
二条大路北端の東西大溝 SD5300	約30,000点
二条大路北端の東西大溝 SD5310	約100
二条大路北側溝 SD5240	39点
三条二坊八坪の南北溝 SD4750	約50,000点
東二坊坊間路西側溝 SD4699	511点
東二坊坊間路西側溝 SD5021	160点
二条二坊五坪の SX5472	1点
二条二坊五坪の SX5473	1点

（点数は昨年度以前出土のものと合算したもの）

SD5100・5300・5310の3条の溝から出土した木簡は内容的に強い関連があり，合わせて「二条大路木簡」と仮称している。長屋王家木簡，二条大路木簡と大木簡群の発見がこれだけ短期間に相次ぎ，しかも近接した地域から集中して見つかったのはまさに驚異的であり，両木簡群が今後の木簡の研究，ひいては日本古代の研究に資するところは誠に計り知れないものがある。なお，1989年度に木簡が出土した遺構は表の通りであるが，ここではSD5100・5300・5310出土の二条大路木簡に限って取り上げることとする。

二条大路木簡の特徴　二条大路木簡の全容は，まだ整理の途上にあるため完全に解明されてはいないが，これまでに得られた知見からその全体的な特徴をまとめておこう。

第一に，その数量の多さである。最終的には5万点前後に達するものと考えている。長屋王家木簡の発見以前の木簡出土が平城宮で約33,000点，それ以外の全国で同じく約32,000点であったことを考えれば，その意義は自ずと明らかになろう。数量的な面だけでも長屋王家木簡に匹敵するか，それ以上の史料群となることは間違いない。

第二に，平城宮外出土にもかかわらず，平城宮内の木簡に非常に近い形状・内容・様式のものが多いことである。個人の邸宅内の木簡が主体の長屋王家木簡とはかなり様相を異にする。

第三に，二条大路の上に掘られた溝状の土坑という，これまで全く例をみない遺構からの遺

物であるという点である。このことは，複数の場所からの遺物が混入し得ることを意味し，二条大路木簡を解明していく上で大きなネックともなる事実である。

第四に，天平７・８年のものを中心に比較的限られた年紀を持つものが集中していることである。年紀の最も新しいものは木簡では天平11年，墨書土器では天平12年であり，天平９年の疫病の流行や天平12年末の恭仁遷都との関係が考えられる。

文書木簡（１～３，８～11，17）　次に，内容別に概観する。まず文書木簡について。８は明確な宛先を記すほとんど唯一のもので，宛先の兵部卿藤原麻呂の家政機関で廃棄されたと判断され，二条大路木簡には藤原麻呂の家政機関の木簡が含まれていると考えている。その他では，「某進」の様式をとる進上状の多さが目立つ（９,17など)。差出しには園池司・左京職・右京職・西市などの官司の他，池辺御薗司・南園所・意保御田・岡本宅・南宅・宇太御廐・櫟本三宅・佐紀瓦司・越田瓦屋などがみえる。同じく個人の家政機関宛の進上状でも，「長屋王家木簡」の進上状が蔬菜類を中心としているのと対照的である。これらの御田・御薗などのうち岡本宅のみは正倉院文書に皇后宮職系統の写経所との経典の貸借文書を残すが他は初見で，「長屋王家木簡」にみえるような個人の家政機関に関わるものなのか，公的な施設なのかは俄には決めがたい。この他に木簡にみえる官司としては，兵部省・大膳職・主殿寮・大炊寮・木工寮・官奴司・中衛府・左右兵衛府・豎子所などがあり，宮内省被管の官司が多いのが目立つ。

荷札木簡（４～７，15・16）　これまでに約400点の荷札木簡が確認されている。貢進国はほぼ全国にわたり，品目もバラエティーに富んでいる。特に注目されるのは，贄の木簡が多量に含まれることで，中でも参河国播豆郡の篠島と析嶋の贄の荷札（種々の魚の楚割）は40点近くにも達する。近辺に天皇と密接に関わる施設があったのか，それとも一旦天皇に貢進されたものが臣下に分配されたものなのかは即断できないが，贄貢進の根本にも関わる重要な史料群となろう。駿河・伊豆（調堅魚），安房（調鰒），近江（庸米），若狭（調塩，種々の海産物の贄），隠岐（種々の海産物の調）などの諸国の木簡も多い。中でも伊豆国は60点にも達し，従来知られていた数の実に３倍にも及ぶ。なお，16は個人宛ての荷札の数少ない例の一つである。

その他の木簡　門の警備を担当する人名を書き上げた木簡（12），宿直者を書き上げた木簡（13），食料支給の木簡（14）など，いわば帳簿木簡とも呼ぶべき木簡がまとまって出土している。

２つの木簡群　ところで，木簡の内容と出土地域との間には密接な関係がある。特に顕著なのは，左京二条二坊五坪南面中央の門と不可分の位置関係にあるSD5300西端とこれに向かい合うSD5100の中央部分で，ここに分布する木簡は二条大路木簡全体からみると特殊な傾向を示している。顕著なのは，種々の進上状，宿直木簡，及び食料支給木簡であり，反面荷札木簡の出土は少ないものの，他の地域にはみられない近江国坂田郡上坂（田）郷の庸米の荷札がまとまって出土しているのが目を引く。８はここから出土したものであり，これらも藤原麻呂の家政機関から投棄されたとみてよかろう（以下，これを第一の木簡群と称す)。二条二坊五坪南面中央の門との密接な位置関係からみて，東院南方遺跡の一郭に藤原麻呂邸を推定することができる。

但し，藤原麻呂の家政機関に関わるとはいっても，単純には個人の家政機関内で完結する内容ではなさそうである。10・11・13にみえる六人部諸人に着目すると，彼が所属する麻呂の家政機関が『続日本紀』にみえる天平8年6月から7月にかけての聖武天皇の芳野行幸に関わっていたことが知られ，麻呂の家政機関が麻呂の職務に関係する公的な役割を担っていたことがわかる。

次に顕著な分布を示すものとしては，SD5100西端の旧長屋王邸北門脇に集中する一群がある。荷札木簡が大量に分布し贄の荷札も数多くみられる。大膳職のものと考えられる木簡や大命と記す木簡，東大寺の前身の金鐘山房からの解（2）も含まれており，聖武や光明に関わりの深い木簡群といえよう（以下，第二の木簡群と称す）。SD5100東端もほぼ同じ傾向を示している。

第二の木簡群の廃棄場所については，その出土位置からも南側の三条二坊八坪の旧長屋王邸の可能性が考えられるが，注目すべきは12などの門の警備に関わる木簡である。平城宮西宮兵衛の木簡との類似から，門の警備を担当する兵衛などを書き上げたものと判断される。ところで，SD5100西端や東端，及び東二坊坊間路西側溝SD4699からは，中衛府や左右兵衛府に関わる墨書土器が見つかっている。あたかも長屋王邸を取り囲むような形で出土しているわけで，これらは長屋王の変後にここに駐屯した軍隊，ないしは旧長屋王邸跡地に設けられた何らかの施設に関わるものである可能性が強い。従って，第二の木簡群も旧長屋王邸に設けられた何らかの施設に関わる可能性が高くなり，長屋王没後の跡地利用を考える上でも，貴重な材料になることが期待される。但しその決め手となるような木簡はまだ見つかっていない。

今後の課題　長屋王家木簡と二条大路木簡の発見によって，木簡の出土点数は飛躍的な増大をみた。良質のしかも量的にまとまった材料を得て，日本古代の木簡の研究は今新たな出発点に立っているといっても過言ではなかろう。その全貌の一日も早い解明が待たれるところである。

二条大路木簡の全体像を考える上での大きな課題は，第一の木簡群と第二の木簡群の関係である。第一の木簡群が北側の二条二坊五坪から，第二の木簡群が南側の三条二坊八坪からそれぞれ投棄されたとすれば，両者がいかなる関係のもとに捨てられたのかが重要な論点となろう。換言すれば，藤原麻呂ひいては藤原四兄弟（第一の木簡群には藤原武智麻呂宛と考えられる16のような荷札も含まれている）と長屋王邸跡地との関わり方の問題でもある。両木簡群を残した施設は互いに強い関連を有するものであった可能性は高い。長屋王邸跡地から捨てられたものに公的な色彩の強いものが多いという事実をどう理解するか，大量の贄を消費し，中衛や兵衛が警備し，宮内省被管の官司が密接に関わる施設とはいったい何なのか，そして藤原麻呂の家政機関が関与する芳野行幸とこの施設との関わり，藤原麻呂邸が純粋に私邸であるのか否かなど今後に残された課題は大きいが，これらの課題を解く鍵は，同じ遺構から出土した大量の木製品・土器・瓦などの遺物の分析とともに，長屋王邸跡地から捨てられたと見られる第二の木簡群の解明にかかっているといえるだろう。二条大路木簡は長屋王没後の跡地利用と密接に関わる木簡群であり，その意味ではすぐれて政治史的な所産でもあるのである。　（渡邉晃宏）

SD五一〇〇出土木簡

(1)・内膳司解　申請荷持丁事　二人持十荷　一人持廿荷　合卅荷
・右為今月廿六日御幸行供奉料件荷持右如　290・43・6　011

(2)・山房解　申返抄　米二斗　菜一櫃　返上　袋一口　櫃一合
・丁壬生部己麻付　注状進如解　天平七年閏月廿一日　僧延福（十二）　275・27・2　011

(3)・芳野幸行貫簀　不用
・天平八年七月十五日　135・24・3　032

(4)参河国播豆郡篠嶋海部供奉閏七月料御贄鯛楚割六斤　259・22・4　031

(5)・駿河国駿河郡古家郷猪津里戸金刺舎人勝麻呂調荒堅魚六連八節
・天平七年十月　304・31・4　011

(6)伊豆国賀茂郡川津郷賀美里戸主矢田部□麻呂戸平群部嶋調荒堅魚十一斤「九連一丸」十両　天平八年十月　379・28・4　011

(7)安房国安房郡公余郷長尾里　戸主大伴部忍麻呂　大伴部黒奉　鰒調陸斤　陸拾弐條　天平七年十月　306・31・4　011

SD五三〇〇出土木簡

(8)・中宮職移兵部省卿宅政所　池辺波利　太宿奈万呂　杖部廣国　秦金積　大鳥高国　川内馬飼　日下部乙万呂　太東人　八多徳足　村国口万呂　東代東人　山村大立　史部廣山　大荒木事判　太屋主　陽侯吉足
・狭井石楯　右十九□舎人等孝文銭人別三文成選六文又官仰給智
馬国人　識銭人別一文件銭今早速進来勿怠緩
他田神□　大属　少進　天平八年八月二日付舎人刑部望麻呂　261・42・3　011

(9)・○左京職進　鶏一隻　馬宍三村　雀二隻　鼠一十六頭
・○　天平八年四月十四日　従六位上行少進勲十二等百済王「全福」　199・35・4　011
壺三口　一口四升受　二口各五升受　右物幸行御菓備納料

(10)・請器　瓶一口一升受
・天平八年七月二日六人部諸人　324・(36)・4　011

(11)・岡本宅謹　申請酒五升　右為水葱撰雇女
・等給料　天平八年七月廿五日　六人部諸人　256・(23)・4　011

(12)・二門　佐伯　皇后宮　雪　少山田　画師　壬生　借馬番長
大伴　丈　丈土部　参河　下　太野番長
・合一十二人依数入奉宮　長二人謹状　(241)・24・2　011

(13)宿直　六人部諸人　婢若屋女　302・(20)・4　081

(14)・十一日不食米一斗一升六合　土師石前八合　土師村八合　阿刀真公八合　日下部海子八合
・　天平八年五月十一日　苅田孔足　田辺僧万呂八合　尋津福万呂八合　□□〔真公カ〕　忍坂乙万呂八合　赤染秋足八□〔合〕　豊国廣虫八合　丸部武蔵一升　佐味梶取六合　365・38・6　011

(15)・近江国坂田郡上坂郷戸主薮
・田虫麻呂戸庸六斗　147・17・5　033

(16)石見国那賀郡右大殿御物海藻一籠納六連　天平七年六月　335・40・6　031

SD五三一〇出土木簡

(17)・岡本宅　上進青角豆十把
・天平八年七月廿日　田辺久世万呂　250・37・5　011

「楼閣山水之図」についての建築的所見

平城宮跡発掘調査部

二条大路北側の東西大溝SD5300で，多数の木簡，木製品とともに建築群を描いた折敷の底板を発見した。図柄を検討してこの建築群を「楼閣山水之国」と呼ぶことにした。現存するのは長さ61.3cm，幅10.8cm，厚さ0.8cm前後で，全体の1/3ほどと思われ，材質はヒノキである。伴出した木簡の年代から，この板絵は天平八年前後に描いたと考えられる。

この板には片面に「楼閣山水之図」と千字文の習書があり，他の一面には人物の全身像や顔の絵の習書がある。「楼閣山水之図」は建物群・築地塀・池・山からなり，楼閣を中心として両脇に建物二棟，門二棟があり，建物は全部で七棟ある。広大な空間を表現しており，建物を大小に描き，遠近を表現する点や建物群を斜め上方から見下ろす点では，描写技法は相当進んでいる。

門二棟を除く建物五棟はすべて寄棟造りである。門は切妻造り。門二棟，建物五棟の内の三棟と，塀は基壇上に建つ。建物には組物を表示するものがあり，手前の門の妻に扠首を描く。建物群の前後に築地塀・磚塀があり，建物群を囲つているようである。手前の築地塀には花模様がある。各部分を丁寧にみると，リアルな部分と省略とがある。池の立体的表現，門の柱筋を前後に書き分ける点，山腹に流れ落ちる滝と落下する水のしぶきはリアルである。一方屋根の形状が部分的には入母屋造りにも見える点，階段が建物正面のあるべき個所にないこと，鴟尾を描かないこと，瓦葺きの表現が塀の一部に限られることなどは省略かもしれない。

建物群背後のそびえ立つ山や花模様を描きしかもカーブする塀など，日本の建物群とは思えない図柄であり，中国伝来の絵画を写したものであろう。塀に花模様があることについて，中国の『書経』・『春秋左氏伝』に「雕牆」，『礼記』に「疏屏」とあり，春秋時代から壁を飾ることがわかる。正倉院に残る『東大寺献物帳』には「大唐古様宮殿画屏風」があり，中国伝来の絵画が奈良時代の日本にあったことがわかる。「楼閣山水之図」の下には，後に写経所で校正を務めた「阿刀酒主」の名があって，習書や絵画を書き描いた人物の可能性がある。

「楼閣山水之図」が描く建物群が仏教寺院，道教寺院のいずれとするか決め手を欠くし，離宮といった施設の可能性も考えられるし，また補陀落山を描いたとする説もある。

七・八世紀の年代で建物を描いた絵としては七世紀後半の玉虫厨子の壁に描かれた建物，奈良時代の「東大寺山堺四至図」がある。いずれも建物の表現は，建物を正面から見た平板的描写である。正倉院の宝物には山水を描く絵画はあるものの建物と組み合う山水の図柄はない。「楼閣山水之図」は建物群と山水を立体的に描く絵画資料として，一級の作品である。

（上野邦一）

楼閣山水之図

二条大路から出土した「翳」

平城宮跡発掘調査部

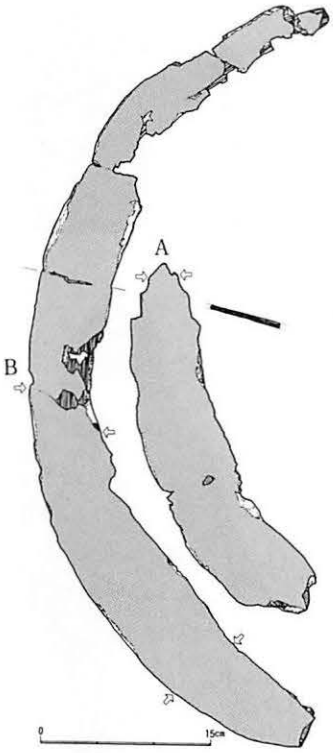
正倉院に伝来する漆胡瓶（北倉43）は，その優美な姿と装飾によって著名だが，特殊な製作技法，つまりごく薄い板材を螺旋状あるいは同心円状に巻き器胎を作る技法（以下巻胎と称す），によっても特異な存在である。同じ技法をとる遺品には，銀平脱合子（北倉25，154）や漆冠笥（北倉157）があり，出土品では滋賀県松原内湖の遺品があるが，類例が少なく技法の起源や系統など謎が多い。類似の技法は現在，チェンマイ（タイ）や青森県弘前市などの民芸品に見ることができる（木村1975）。この技法の利点は，大径木がなくとも径の大きな器物が作れること，その製品が比較的軽く丈夫であること。

先頃，平城京の長屋王邸跡周辺の調査で，古代では類例が少ない巻胎技法の漆器が出土したので（奈文研1990），ここであらためて技法上の特色などを検討しておこう。

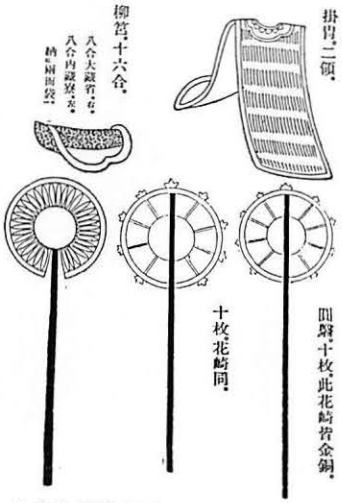
出土位置　本例の出土地は，長屋王邸の北，二条大路の南北に穿った二条の溝 SD5100・5300である。二条大路の北には藤原四兄弟のひとり兵部卿藤原麻呂の邸宅があり，SD5100・5300には長屋王滅亡後，王邸跡を占拠した組織と藤原麻呂邸から捨てた多量のゴミが埋没していた。紀年銘木簡が示す年紀は天平８年（736）～10年（738）が多い。巻胎漆器の周辺からは，聖武天皇の吉野行幸に関わる木簡などが出土している。

巻胎漆器は器物の一部で，約30ｍ離れた二条の溝から見つかった。現状は円弧状を呈する二つの破片で，両端部，両側面ともに欠く。長さは大きい方が約65cm，小さい方が33cm。最大幅が約7.5cm，厚さが0.45cmを計る。器胎は，水などに強いカヤ材を幅0.2cm，厚さ0.1～0.2cmの細い棒状に加工し，これを同心円状に巻いたもので，カヤ材の重ね合わせは約40条が確認できる。

ソフテックス（軟質Ｘ線）写真によると，カヤ材を結縛した痕はない。円板を形成後，両面に布を着せて下地漆を施し，黒漆を厚く塗る。この両面に着せた布（麻布？）は一枚布ではなく，何か所も綴じ合わせた痕が見えるが，表面ではその痕跡がわからないほど漆が厚い。



二条大路から出土した巻胎漆器



文安御即位調度図にみる翳など

A

B

巻胎漆器のソフテックス写真
（前ページ図の⇨は撮影位置）

現存部の最外径は正円に近く，直径73cm（約２尺５寸）を測る。両端部を欠くので，当初の径は不詳だが，現状より大きかったことは確実である。器面に反りなどはなく，もともと偏平な円板の一部であろう。松原内湖例は，芯になる円板の周囲に巻いた巻胎が薄く密で間然するところがないが，本例はそれにくらべて重ねた材相互間にややゆるみがあり，隙間に漆がはいりこんでいる。布着せ時にはいりこんだのであろうか。

この巻胎の方法については，内側から順次に巻いたとする説と，逆に径が大きい外枠を作り，材の反発力を利用して外側から内側に向けて巻いたとする説がある。本例は現存部の最外径が73cmと大きく，後者の方法の可能性が高い。いずれにしても，本例は推定できる直径が73cm（２尺５寸）以上と大きいこと，反りを持たない比較的軽量の円板であることが特徴といえる。

古代の巻胎技法は冒頭に示したように少なく，しかもこれらは容器であり，本例のごとく器物に応用した例ははじめてである。『延喜式』（10世紀）をまつまでもなく，古代において漆器は国家が生産と分配に関与した貴重な器物であり，地位の象徴であった。このことは平城宮跡などで出土した食器―土師器・須恵器が数十万点にのぼるのに対し，漆器はわずかに150点前後という事実が傍証し，本例も貴人に属する器物の一部だった可能性は高い。

翳の一部か　本例は上に述べた形状，特徴から威儀具の一種，翳の羽にあたると考える。翳は，扇状の羽根に柄をつけて，貴人の身などをかくすもので，もとは，鳥の羽で造り，歌舞に用い邪悪を祓ったという（『字統』）。壁画や絵画資料によると羽には円形，方形，ハート形などいくつかの種類がある。

日本では古墳時代に伝わり，器財埴輪のひとつにあるし，装飾古墳の壁画にみる。さらに，高松塚古墳の壁画に『大宝令』前の姿をみることができる。令制では，翳はいくつかの種類があった。元正朝賀の儀では「円翳十具，円羽十柄，横羽八柄」（大舎人寮式）がみえ，円翳が大翳を，円羽が小翳を意味し袋や箱に納めた（内蔵寮式）。この箱は大翳や小翳の場合，平文だった（斎院司式）。伊勢太神宮式では紫翳，管翳がありやはり柄は漆塗りとしている。紫翳，管翳は，全体の大きさが『延喜式』『皇太神宮儀式帳』（後者では刺羽とある）

にみえ，羽の径や材質は『内宮長暦送官符』（1038年）に詳しい。

ここに紫翳は「弐柄。柄長各一丈四尺二寸，径二寸。黒漆平文羽長三尺六寸五分，広三尺三寸」とあり，菅翳は「弐柄，柄長各七尺二寸，径一寸二分。本麻笥尻金長一寸二分。骨弐拾枚，羽方各三尺一寸五分，廻曲木肆枚，竝漆塗。」とある。近・現代に神宝として調進した翳のうち紫翳はいわば団扇に近い形だが，菅翳は羽が正円を呈し，黒漆塗の竹材の骨組みに菅の葉を放射状に並べ，これを麻糸で螺旋状に縫い回し，羽径は３尺３寸（約１ｍ）ある。これらと本例とは材質と色に違いがあるが，その形状や大きさ，軽量に作るところは矛盾しない。現状では８世紀初頭の翳に関する資料が少なく，ここでは推測を述べるのにとどめておく。

ところで，翳は単独で用いるのではない。元正朝賀の場合，蓋，弓，箭，大刀，鉾，杖，如意，蠅払，挂甲，柳筥などとともに威儀を整えた（『貞観儀式』元正受朝賀儀）。上の推定にとって興味深いのは，本例に聖武の吉野行幸を示す木簡が伴うことである。

この行幸は天平８年（730）６月27日から７月13日のこと（『続日本紀』）で，木簡には

・芳野行幸用貫簀

・天平八年七月十五日　　（『平城宮発掘調査出土木簡概報』22　P.13）

など吉野行幸を直接示す木簡と，内容からそれが推定できる木簡がある。行幸の車駕は威儀を整えて進むのであり，実際にそれを推測させる木簡がある。すなわち，

・大御輿　大御蓋袋　又大御長江裏布袋
　　并二物

・又大御輿飯船袋布　（『同書』P.16）

いくつかの器物の姿を一括した札で，表は輿や蓋，輿の轅を包む袋があったことを示す。輿は貴人の乗物で，天子の場合，主殿寮の殿部がこれを掌った。これに関わる木簡が一緒にある。蓋は貴人の上部を履い，その存在を示す威儀具である。ここには「大御」とあって，これらが聖武天皇の器物を意味する蓋然性は高い。この付け札は，行幸で輿などから外した袋を一括するのに用いたが，吉野から帰還後，再び袋を輿などに着せたので不要になり捨てたようだ。先にみた，元正朝賀の威儀具と行幸のそれとの異同は不詳だが，木簡には桂甲が見え，柳筥の祖形になり得る木箱が伴うなど，両者の関連を示唆するものがある。かりに，輿や蓋の使用を天皇に限定できない場合でも，ごく間近に車駕に従った貴人を考慮しなければならない。いずれにしても，聖武の吉野行幸の事実と上の木簡，ここに「翳」と推定した巻胎漆器は，有機的に関連すると思う。

輿などを包む袋に付けた木簡

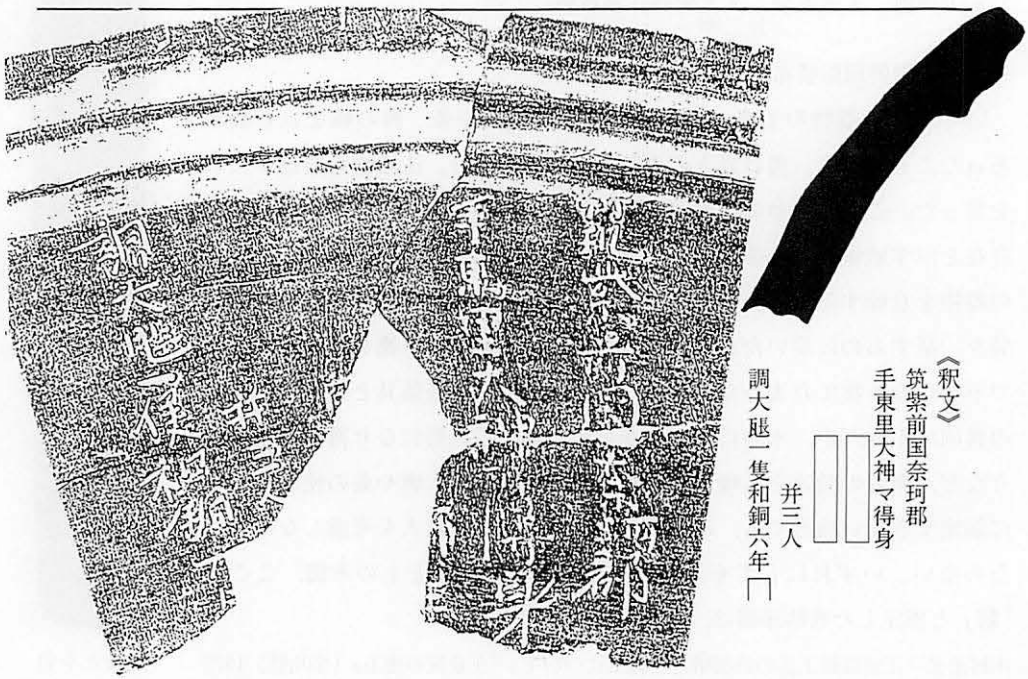
木村法光「正倉院漆工品の内部構造と施工について」『正倉院の漆工』（平凡社）1975
奈良国立文化財研究所『平城京 長屋王邸跡と木簡』（吉川弘文館）1990

（金子裕之）

平城宮出土須恵器の産地調査(2)

平城宮跡発掘調査部

10世紀前半に編纂された『延喜主計寮式』には，須恵器調貢国として，筑前・讃岐・備前・播磨・摂津・和泉・近江・美濃の八ヶ国が掲げられている。主計寮式の内容は，どの時点の土器生産を規定したものなのかが問題となるが，平城宮出土須恵器には，備前・播磨・和泉・美濃国などの製品が認められ，主計寮式の規定は，奈良時代の遺制を色濃く残すものと考えられてきた。近年，福岡県大野城市所在の牛頸古窯跡から和銅六年の年紀をもち，「調大瓰」とヘラ描きされた甕が発見され，筑前国の調貢を裏付けるとともに，調貢制度が奈良時代当初までさかのぼることも明らかになった。考古第二調査室では，従前から調貢国の須恵器の調査を行ってきたが，調査室メンバーの移動もあり，また各地の窯跡や官衙跡の調査が著しい進展をみせていることもあり，昨年度から再度調貢国の須恵器を調査することになり，本年度は筑前国を対象とした。大野城市教育委員会・大宰府市教育委員会・九州歴史資料館の協力をえて，牛頸古窯跡，そこから供給を受けた大宰府・同条坊跡出土須恵器を調査し，筑前国の須恵器の特徴を把握することができた。中でも注目されたのは，前述のヘラ描き甕であり，荷札木簡と同様な記載法をとり，主計寮式規定の畿外諸国の甕一口にかかる正丁数も一致を見る。（巽淳一郎）



牛頸古窯跡出土ヘラ描き甕（1：2　大野城市教育委員会提供）

法隆寺古瓦の調査

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では今年度，奈良・平安時代の軒平瓦について調査・研究を行った。

奈良時代の西院の軒平瓦240A　白鳳時代末期の229Bの文様の系統をひく。笵型切り縮め以前（Aa）は桶巻き作りで製作され，笵型切り縮め以後（Ab）は一枚作りで製作される。顎の形態は法隆寺の直線顎の伝統を守っているが，Ab段階後半で削り出し段顎例も存在する。瓦の分布から西院僧房の軒平瓦の可能性が高い。Aaは奈良時代初期には少くとも製作が開始されたが，量は少なく，1枚作りの出現期である天平5～10年頃にAbに切り縮められて再使用される。

奈良時代の東院創建の軒平瓦234A　平城宮式6691Aと同笵である。東院創建軒瓦は皇后宮所用の6285A－6667Aをモデルとしている。234Aは一枚作りで製作されるが，顎の形態は恭仁宮例や平城宮例が典形的曲線顎であるのと異なり，過渡的な曲線顎である。また，笵傷も東院例が少ない。東院完成以前の天平11年に234Aは集中生産され，笵型は恭仁宮用へ転用される。

平安時代の東院改修の軒平瓦242　貞観元年，藤原良房の援助の下，道詮は東院改修を開始する。桧皮葺き建物を本瓦葺きに改修したため大量の軒平瓦242A・B・Dが生産される。Aは粘土板1枚に顎用粘土を数枚付加する。B・Dは粘土板2枚を重ねて製作され，その後11世紀前半までの技法の中核をなす。しかし，9世紀中頃の布目はまだ密であり，その後徐々に粗くなる。

平安時代の西院講堂等再建軒平瓦254A　延長3年焼失の講堂が65年後の正暦元年に再建された時の軒平瓦は254Aであろう。南都で稀少なこの文様は当時平安宮で多用されている。諸先学の指摘の通り，法隆寺別当を派遣した東大寺を介して平安宮の瓦当文様が導入されたといえる。

平安時代後期の軒平瓦　11世紀中頃以降，法隆寺別当は永承大火後の再建を進める興福寺出身者があたり，興福寺や薬師寺を介して瓦当文様と製作技術上の影響を受ける。228Aでは初めて顎貼り付け式段顎が出現，217Bでは離れ砂が採用され，246Aでは曲線顎・段顎が共存，246Bでは折り曲げ式段顎も登場する。まさに中世へ向う技術上の過渡期といえよう。　（佐川正敏）

奈良・平安時代の軒平瓦（1：6）

興福寺所蔵「興福寺別当次第略本」

歴史研究室

昨年度は，興福寺所蔵「興福寺権別当次第」を紹介したが，その際に関連史料として取り上げた「興福寺別当次第略本」(15函54号）の釈文をここに掲げる。この「別当次第略本」は横切紙を，13紙貼り継いだもので，「権別当次第」と同体裁である。巻首は前欠であり，巻尾は本文はそこで完了しているごとくであるが，最終紙奥裏に花押半顆があり，その花押が，「権別当次第」の巻首に半顆ある花押と接続することから，両者は併せて一巻になっていたことがあることが判明した。そして「権別当次第」は興福寺権別当歴代を書き上げたものに対し，「別当次第略本」は興福寺寺務（寺司，別当とも書かれている）歴代を書き上げており，併せて興福寺寺務権別当次第となる。そして「権別当次第」の奥書に「此一巻依有所用子細書了　宝徳二年九月日　大法師（花押)」とあり，宝徳２年（1450）書写本であることがわかる（昨年度年報参照)。

「別当次第略本」の現状は巻子本小本で，縦14.3cm，一紙長は42cm前後のものが多いが３cmのものもあり，ばらつきがある。また各紙に紙背文書があるが，それは，竪紙の文書の上半もしくは下半にあたり，そのうち幾通かは「別当次第略本」中においても，「別当次第略本」と「権別当次第」とにわたっても接続するものがあり両者の共通性は明らかである。

表紙は新補で，外題は標題の通りである。表紙見返に大正10年の佐伯定謙師の識語がある。当本は前欠であり，別当は「已講孝忠」から始まり「権僧正良雅」までの歴代を記する。記載内容は大字で書かれた別当名を中心にその肩に代数・任時の天皇名・関白名，称号などを記す。下段には，別当補任年月日，補任時年齢を記し，さらに死没の年月日と年齢を記すものもある。さらに事項記載の筆跡には，二通りある。後で書き加えた分には異本と校合があり，それについては「　」を付した。各紙の継目裏花押は「権別当次第」と同じように尋尊の花押である。尋尊の花押は『書の日本史９』所収のそれなどとは異なるが，「春日社経蔵経論注文」(13函２号）の尋尊花押（年報1987，口絵・P42～45）とは同一であり，この継目裏花押も（それとともに昨年度年報掲載の「権別当次第」の奥書花押も）尋尊花押とみなしてよかろう。ところで当本は，已講孝忠から始まるが，その肩に「八代」とあり佐伯師識語が指摘するように重文の「興福寺別当次第」とは異なるなど，その記載は簡潔であるとはいえ，検討すべき点がある。すなわち記載事項個々についてみても，就任日時やその年齢，また死没のそれについても重文「別当次第」と異なる箇所も多くみられ，それらの詳細な検討は今後の課題である。今回は「別当次第略本」の釈文を，紙幅の関係で全文は掲載できないので抄文というかたちで掲載した。また，関係写真については前年度年報に数葉掲載しているので参照されたい。　（綾村　宏）

〔興福寺別当次第略本〕

（第15函54号）

凡例

1　印刷の都合上、改行等原本通りになっていない箇所がある。

2　追筆、異筆の部分には「　」を付した。なお代数を示す数字も異筆である。

3　何紙目にあたるかを、紙継目部分の頭注で示した。

（前欠）

（1紙目）七ゝ　陽成　已講　孝忠　光孝「長者基経」

「元慶二年十二月廿三日任律師、貞観十三年為別当也、伊勢國人也」

八ゝ「律師延寿　権律師イ、」

九ゝ　光孝　宇多院　房忠「長者基経」

「少僧都、仁和三年任別当、伊勢國人也、ニイ　〻〻〻〻」

十ゝ　宇多　醍醐天皇　仙忠

「少僧都、延喜二年三月廿三日為別当也、伊勢國人也、」

十一ゝ　醍醐　律師　東院住　真覚「長者時平」

「延喜十年四月廿二日為別当也、右京人也、」

十二代　醍醐　僧都　基継「長者時平」

越前國人、少僧都、「延長六年為別当也」承平元二十六日入滅、

十四代　朱雀院　村上　大僧都平源

「延長九年任別当也、又云十年也、」□國人也、

十五　村上　僧都　東□　空晴

□徳元年十二月九日十二月廿四日任別当、廿七日イ」「少僧都イ」入都卒天、俗姓ハ伊勢氏、「天暦八年イ九」平城人也、

十三代　已講　助精「長者実頼」

「天徳元年十二月十七日任別当、」

十六ゝ　村上　大僧都　西南院　延空「長□□平」

康保四年七月七日入滅、「應和元年イ七年為別当也、伯氏、日向国人也、」

「康保四年七月廿日任別当也、」

十七ゝ　冷然院　円融院　少僧都　安秀「長者伊尹」

天禄元年十月三日任寺務、于時律師、五十九、寺務□十年、永観元年三月廿三日入滅、七十二、

十八ゝ　東寺長者一乗院本願　円融　少僧都　定昭「摂関伊尹兼通」

十九ゝ　法務　円融花山一条院　僧正　喜多院住　真喜「摂頼忠兼家道隆道兼」

永観元年三月廿三日任寺務、五十三、于時律師、寺務間廿五年、長保三年正月七日入滅、七十七、「イ二」「イ七十」

廿代　法務　一条院三条院　大僧都　定隆「道長」

長保二八廿九日任寺務、于時少僧都、六十二、長和四十一一日入滅、八十一、寺務十六年、

□条　廿一ゝ　後一条院　法印大僧都　号北院僧都　林懐「摂道長」

「イ四」長和五五十五任寺務、于時少僧都、寺務間十年、万寿二四月四日入滅、七十五、

廿二ゝ　後一条　後朱雀院　大僧都　上□　扶公「頼長」

「イ元」万寿二六廿七任寺務、于時大僧都、六十、寺務間十一年、長元八七七日入滅、七十、

（2紙目）廿三ゝ　大僧都　東院　経救「摂頼通」×長」

長元八廿七日任寺務、于時少僧都、五十八、寺務間十年、長久五年五二日入滅、六十七、

廿四ゝ　後朱雀院　後冷泉　僧正　一乗院　真範　播磨守生昌子

寛徳元六廿五日于時少僧都、五十九、寺務間十一年、天喜二十二六日入滅、六十九、

廿五ゝ　後冷泉　大僧都　号中南院　円縁

天喜二正月廿三日任寺務、六十一、寺務間十一、康平三五月一日入滅、七十一、

廿六ゝ　後冷泉　後三条　少僧都　号西塔院　明懐　□□院

康平三五二日任寺務、七十三、寺務間三年□入滅、七十五、

廿七ゝ　法務　甲斐守頼経子　僧正　号一乗院　頼信

治暦二十一廿五日任寺務、五十七、寺務間十五年、「イ本」康平五八月任寺務、五十三、□承保三六廿七日入滅、六十七、

白河　号新院
廿八〻　権僧正　公範
斎院□康子

長保三八十七日任寺務、六十八、寺務間三年、応徳三十月十九日入滅、七十八、斎院長官平以康息、

廿九〻「法印前大僧都済尋云承保五年任、」

□□　号戒壇法印
卅〻　法印大僧都頼尊

寛治三三六任寺務、六十四、嘉保二二十五寺務執行七年□□十一年、同三廿九日於別当所請取印鑑了、

法務　号龍花院本願
卅一〻　大僧正　覚信
白川鳥羽

康和二八廿日任寺務、三十六、于時法印、権大僧都、寺務間廿一年、保安二五八日入滅、五十七、

鳥羽讃岐　号花林院
卅二〻　権僧正　永縁
大蔵卿大輔永相子

保安二六十七日任寺務、七十七、寺務間五年或四、天暦二四五日入滅、七十八、
「治ノ誤」

二度　号中僧正
卅三〻　法印大僧都玄覚
卅五〻　讃岐

天治二十廿六日任寺務、廿七、寺務間五年或四年、大治四十二廿五日勅勘、此間権上座静俊寺務執行、

讃岐　号黄□法印
卅四〻　法印大僧都経尋

「イ四」「□」云々
大治五正十四日任寺務間、□、寺務間三年或四年、長承元六月日入滅、七十三、

卅五〻　「玄覚」

「イ三」
保延四十廿九日任寺務、六十七、或記云同五年四月八日修学者殺害、不執行、

二度　号転経院法印
卅六〻　僧　正　隆覚
讃岐

讃岐　号法雲院
卅七〻　権大僧都覚誉
近衛院

保延五十二十五日任寺務、七十二、寺務間七年、久安三十二廿四日入滅、七十四、或記云借請大乗院被渡印鑑了、

近衛院　号□学坊
卅八〻　権大僧都覚晴

久安三二十三日任寺務、五十八、寺務□二年、同三年五月十七日入滅、于後三ケ月不被補長吏、仍上座信実法橋執行、

卅九〻　「隆覚」

保元二十八任寺務、四十□、寺務間十二年、長寛二十七日被執流罪伊豆国、「始名覚経、」

近衛　号□□僧正
四十　法務僧正恵信
二条院

「イ元」
長寛二六月任寺務、六十四、于時法印、寺務間十年、承安四年四月九日入滅、七十四、

（3紙目）四十一〻　□条　号内山
高倉院　法務大僧正尋範

高倉　号東室
四十二〻　権僧正　覚珍
中納言実隆子

承安二八月廿三日任寺務、寺務二年、七十五、安元□十廿四日入滅、七十二、

同　□□□
四十三〻　権僧正　教縁

安元元十一七日或八日任寺務、寺務五年、治承三四十三日入滅、四十八

高倉　号中院
四十四〻　権僧正　玄縁

治承三四廿六日或廿九日任寺務、寺務二年、同四年十二廿五日入滅、六十八、

後鳥羽　号菩提山本願
四十五〻　法務大僧正信円

治承五正廿九日寺務、寺務間九年、廿九、文治五五十六日御辞退之時権僧正、

後鳥羽　号宝積院
四十六〻　権僧正　覚憲
少納言通憲子

文治五五廿八任寺務、五十九、寺務□七年、建久六十二廿六日辞退、八十二、入滅了、

同　号東室
四十七　権僧正　範玄
為業子

「イ六」
建久六十二廿五日任寺務、於京都令挙行、同廿六日下向□□被□吉書□□□□□□六月一日入滅、

〔×四〕
同　三度　号□□僧正　松林院
権僧正　雅縁

建久九十二廿日於京都任寺務、廿二日下向□、被吉書了、于時法印大僧都、六十一、

□□　二度　号最初一乗院
四十九　権僧正　良円

建永二正廿二日任寺務、廿九、承元二二月六日辞退、

五十　「雅縁」

順徳院　号宝積院
五十一　前権僧正信憲

建保元十二四日任寺務、同五年十二七日辞退、七十四、

五十二　「雅縁」

後堀川　号西唐室
権僧正　範円

貞応二二十日任寺務、六十□、故大僧都覚長第三弟子、

同　号大乗院　後菩提山
法務大僧正実尊

嘉禄二七三日任寺務、四十七、寛喜二三月九日辞退、嘉禎二二十九日入滅、五十七、

五度　号一乗院　菩賢寺殿
発心院
権僧正　実信

寛喜二三廿三日任寺務、三十□、貞永元二十八日辞退、

「イ四」

二度　号東北院
権僧正　円玄
大納言隆季子

「寛喜四年歟」
貞永元三九日任寺務、五十八、

四条院　二度　禅定院　大乗院
法印大僧都円実

「イ四」
文暦二三二日任寺務、廿二、寺務間九年、寛元々年十二廿九日辞退□、光明峯寺殿息云々、

後嵯峨
前権僧正定玄
□定能子

寛元二正一日子刻寺務之由被仰了、二日被渡印鎰了、七十、イ四

後深草院　号光明院
前権僧正覚遍

宝治元十二廿八日任寺務、七十三、奉渡印鎰東院、

同　号東□院
権僧正　公縁
実明子

建長二正廿日宣下、同廿七日□渡印鎰於東室、

（4紙目）

同
権僧正　親縁

建長五十二十五夜被宣下、同十二日被渡印鎰於松室坊、同七年十月十九日春日行幸、貴大僧正、康元元年八月廿日入滅、七十三、

同　号仏地院
権僧正　良盛
盛経子

建長八二廿一日宣下、六十、

同　二度　号大乗院
前権僧正尊信

正元々年十一十九日宣下、卅二、文永三四四日辞退、

同　号東光院
法印頼円
少僧都　良兼身弟

「イ七月二日」
文永三六廿九日宣下、五十三、同五年十一月廿九日辞退、

同　号法雲院
権僧正　実性

文永五十二廿七日宣下、五十四、同十年四月十六日辞退、奉納印鎰、新寺務被書見参之衆中也、無其例者歟、

（9紙目）

二度　号一乗院
権僧正　信昭
亀山院　後宇多　「号原」

文永十四十六日宣下、廿七、同廿一日辰刻被渡印鎰於一乗院、建治元年十二月晦日後辞退、

二度　号光明院
後宇多
法印　性誉

建治二七十八日、六十一、同年十一廿九日任権僧正、同三年十二廿八日辞退、

（10紙目）

同　六度　号大乗院　大□三昧院
権僧正　慈信

弘安四四六日宣下、廿五、同十月四日依神木入洛辞退、同九年五月廿三日転任大僧正、卅、

同　号中南院
権僧正　玄雅

弘安五十二十九日任寺務、六十□、同六年十月日辞退、

同　号三蔵院
権僧正　宗懐
円経僧正身弟

弘安六十廿七日宣下、六十一、同十一四日被渡印鎰於修南院云々、

同
伏見　号勝願院
法印権僧正尊清

正応元五廿八日宣下、五十四、同二年六月十日被渡印鎰於修南院、

伏見院　号松林院
権僧正　実懐

正応二八十八日宣下、五十伍、

同　号西南院
権僧正　顕覚

正応三六十一日宣下、五十七、同五年三月三日入滅、二日辞退、印鎰奉納、

（中略、5～7紙目及ビ8紙目前半ヲ略ス）

（8紙目後半）

同　号松林院
権僧正　長懐
「関白経嗣」

明徳四発酉正月十六日戌下刻於松林院三度長者宣被取之、

同　号北戒壇院
権僧正　長惟
「関白経嗣」

応永二乙亥二十一月廿四日於北戒壇院三度長者宣被取之、

同　号東北院
権僧正　円兼
「関白経嗣」

応永四丁丑八月八日於東北院三度長者宣被取之、

同
権僧正　孝憲

至徳元年甲子十二月廿五日於東□□三度長者宣被取之、

同　「西南院」　号密厳院
法院権大僧正都覚雅家

至徳四年丁卯正月廿八日於西南院三度長者宣被取之、

号修南院
権僧正　実恵
関白経嗣

応永七庚寅三月十六日於修南院三度長者宣被取之、

（11紙目）

同　号大乗院
僧　正　孝円
「関白経嗣」
応永九壬午五月四日於禅定院三度長者宣被取之、四月廿九日宣下、

号東門院
僧　正　円尋
「関白経嗣」
（コノ間ニ「隆俊」ヲ挿入スル記号アリ）
応永十二年乙酉十二月十八日夜於東室三度長者宣被請取之、

同　号法雲院
僧　正　実照
「関白経嗣」
応永十八年二月五日於法雲院三度長者宣被取之、〔×七〕

同　号西南院　東浄興院
権僧正　隆俊
「関白経嗣」
応永十四丁亥二月十八日夜於西南院三度長者宣被取之、

同　号一乗院
法印大僧都良兼
「関白忠嗣」
応永十五九月日夜於一乗院三度長者宣被取之、

同　号慈恩院
権僧正　兼覚
「関白経教」（ママ）
応永十九年十二月廿三日夜於慈恩院三度長者宣被取、

同　二度　号東院
権僧正　光暁
「□白経教」（ママ）
応永廿一、五廿八日於東院被請取三度長者宣、五十四歟、

（12紙目）

同　号仏地院
権僧正　孝俊
「関白経教」（ママ）
応永廿十二月宣下、四十九、

称光　号喜多院
僧　正　空昭
「関白満教」
応永廿六年任寺務、同三十年十二月朔日入滅、

同　号松林院
権僧正　光雅
「関白満教」
応永廿九年二月十二日宣下、六十二、同三十四年四月廿八日入滅、六十七、

（13紙目）

同　号北戒壇院
権僧正　隆雅
「関白持基」
応永卅一年　任寺務、卅七、

同　号竹林院
僧　正　乗雅
応永卅二年十二月廿二日宣下、五十、永享元年十月廿八日逝去、

同　二度　号大乗院
僧　正　経覚
応永卅三二月七日宣下、卅二、同十二日於禅定院被請取三度長者宣畢、

同　号一乗院
大僧都　昭円
応永卅五三月廿日　宣下云々、但大乗院未辞退之間□以後可被成　長者宣之由被仰、同壬三月十一日於一乗院三度長者宣被請取之、

当今　号松洞院
権僧正　兼昭
永享七十二月廿六日宣下、五十一、

□□　号密厳院
大僧都　覚雅
永享八九月三日宣下、同十四日於北戒壇院三度之長者宣被請取之、

同　号東門院　光明院
法印権大僧都隆秀
永享九十二十二日任寺務、同十二日三度長者宣於東門院請取之、凡人直任寺務末代之次第也、

同　号法雲院
法印権大僧都実意
嘉吉元永享十三年七月宣下、

同　号東北院
法印権大僧都俊円

同　号慈恩院
権僧正　兼暁
宝徳二年　入滅、

同　号松林院
権僧正　貞兼

同　号西南院
権僧正　重覚
「関東義良」
宝徳二年　入滅、

当今　号勝願院
権僧正　良雅
「関白義良」
宝徳二年庚午、

奈良町の建造物調査

建造物研究室

奈良町において２件の建造物調査を行い，いずれも興味深い知見を得ることができた。調査は奈良市教育委員会が主体となって行ない，当研究室がこれに協力した。

１．悲田院（南城戸町）の調査　建物の改築に伴なう記録調査である。悲田院は，阿弥陀寺末の尼寺で，天正のころ浄土宗に転宗，元和五年に焼失の後再建と伝える。調査当時は西からの参道に沿って北側に長屋・境内社・地蔵堂が並び，参道の突き当たりに堂を構えていた。堂は方三間宝形造で西面し，内部は北東の方二間部分を内陣とし，L字形に外陣が巡るという特異な平面である。軸部に改造があるほか，当初は向拝もなく，また，本堂周囲の住居部分もすべて後に付加されたものである。木太い柱の他には時代判定の資料となる細部絵様がなかったが，取り壊し時に，屋根の左義長柱の頂部から明暦二年（1656）の墨書を持つ銅鋺が発見されて，建立年代が確定した。近世前期の異色の小規模仏堂であり，その消失が惜しまれる。

これに加えて境内社も春日大社末社の移殿であることが判明した。一間社春日造板葺の小社であるが，前後の妻飾に板蟇股が刻み出されており，これは末社手力雄神社の他に類例のない特色である。平面寸法もほぼ一致して，移殿であることを裏付けた。手力雄神社の移殿は初めての確認であり，建立年代は18世紀には遡るものと推定される。

２．絹谷家（元林院町）の調査　元林院町東側に位置する三棟からなる町家で，町並調査時には，中央の主棟が文化ころの建築で，近代に町が遊廓として最も栄えたころ，両側に順次建築されたものと推定された。その後，前面その他の修理を行なったところ，棟札が発見されたとの報に接し，急拠調査を行った。棟札は，主棟の棟木に和釘で打ち付けてあり，打ち替えの痕跡もないため，その年号寛保二年（1842）は，建立年代を示すものと見られる。町並調査の際には棟札まで調査が及ばずに，その存否が不明であっただけに，この発見の意義は大きく，また本例から推して，今後棟札が発見されれば，他の町家の年代も現今の推定より幾分古くなる可能性が高いと予想される。かような史料の増加は町並の保存にも資する所が多く，今後の調査を期待したい。

（松本修自・島田敏男）

和歌山県近世社寺建築の調査(2)

建造物研究室

昭和六十三年度から二ケ年計画で行っている和歌山県近世社寺建築緊急調査（文化庁補助事業）の第二度目の調査は和歌山市及び県南半部の日高郡・西牟婁郡・東牟婁郡の二十七市町村を対象とした。昨年度の年報に述べたように，県北半部に真言宗が多いのと対照的に，南部は禅宗，特に臨済宗寺院が圧倒的多数を占める。しかもそれは東西牟婁郡に顕著で，日高郡は真宗・浄土宗が優位である。これは臨済宗法燈派の本山であり，覚心の依拠した興国寺が由良にあること，真宗日高別院が御坊にあることなどが関係してこよう。ただし法燈派が臨済宗とは言え，覚心が高野山の刈萱堂を活動の根拠としたとの伝えがあり，また熊野信仰との結び付きが強かったように，本来真言教団等とも密接な係わりを持っていたはずで，異端とされた法燈派の教線展開の跡がそうした複合的性格の痕跡を消し去って，臨済宗として姿を変えているところに，かえって法燈派の歴史的特質を窺うことができよう。

さて県南部では寺院の本堂は方丈型が主流であり，定型の平面以外に，仏間を中央にもってこないものが有ったり，座敷の取り方に多少の変化はあるものの，特にとりたてて特徴を抽出することはできない。

個々の事例で特徴有るものを挙げると，天台・真言系では道成寺は本堂が重要文化財であるが，境内の護摩堂・塔・書院も18世紀以降の建立の上質の建築で粉河寺・根来寺・紀三井寺等と同様，由緒有る大寺境内に注目に値する近世の堂宇のある典型例である。

禅宗では法燈派本山の興国寺（由良町）がさすがに伽藍が整い注目され，法堂・座禅堂・霊光殿等が立ち並ぶ。その法堂（寛政九年）は禅宗様仏殿である。ただし内部は鏡天井を張るのみで，禅宗様仏殿独特の架構を見せることはない。

総持寺（和歌山市）は浄土宗西山派の檀林として紀ノ川北岸に大伽藍を誇っている。鐘桜（寛永十五年）・総門（17世紀中期）の他は本堂以下釈迦堂・開山堂・玄関等いずれも寛政以後の建立で江戸後期に属するが，時代相を表わした大振りな作風を持つ。

正覚寺本堂は（串本町　寛政三年）珍しく本格的な仏堂タイプの浄土宗本堂である。日高別院（御坊市）は別院としての格にふさわしい伽藍を保っているが，本堂は文政十八年の建立，表門も18世紀後期であるが，意匠の緊密さに欠け規模のみが目立つのは時代のせいであろう。

昨年度の年報でも言及した外陣の特殊な架構（外陣の隅木を虹梁の後方で受け，内陣前に小天井を設ける。）を持つ仏堂が日高郡に見られる。例えば印定寺本堂（印南町，宝歴七年）・来迎寺本堂善宗寺本堂（日高町，天明三年）・来迎寺本堂（日高町，天保六年）がその例で，こうした架構の広がりについてはなお検討の必要が有る。

因みに日高町内には独特の細部様式を持つ建物が見られる。先の来迎寺本堂と妙顕寺本堂（日高町，18世紀後期）が典型例で，建物内外に笈形を多用する。来迎寺本堂については大工が

滝本元平と，その名が知られているが，出身や活動拠点は不明である。

神社本殿での特徴としては二点が挙げられよう。第一に本殿の形式としては隅木入春日造が圧倒的に多いことで，次いで三間社流造が優位を占める。平成元年度に調査した棟数で見ると日高郡・西牟婁郡・東牟婁郡内81棟中，隅木入春日造は37％の30棟，三間社流造は16％の13棟を占めている。県北部に於ては春日造のうちの，隅木入の占める割合か30％しかないのに比べ，県南部では81％を超え，明瞭な地域差を示している。第二は社地の中で横一列に三棟以上の社殿が並ぶ神社が少なくないことで，四殿以上並ぶ例として闘鶏神社（田辺市，六殿，隅木入春日造３棟・流造２棟・入母屋造１棟）・住吉神社（大塔村，四殿，流造２棟・入母屋造２棟，ただし１棟は近代）・熊野十二神社（日置川町，四殿，春日造１棟・隅木入春日造２棟・流造１棟）・熊野那智大社（那智勝浦町，六殿，熊野造５棟・入母屋造１棟）・熊野本宮大社（本宮町，四殿，熊野造２棟・入母屋造２棟）が挙げられる。いずれも多様な本殿形式が混在することが注目される。同様な例は県北部に丹生神社（かつらぎ町，四殿，春日造）・高積神社（和歌山市，四殿，流造）があるが，わずか２例であり，しかも同じ形式が並ぶ点で，県南部と異なっている。なお闘鶏神社は６棟中２棟が17世紀中期まで遡り，建築年代の古い点でも注目される。第二の点の要因としては熊野大社（本宮・新宮・那智）の影響が考えられよう。第一の点は，熊野造が春日造の変形とは言え，正面に隅木の入らないこと，熊野王子社の一つである高原熊野神社本殿が隅木入でないことから，熊野との関係を云々することはできない。

この調査で調査対象とした建物数は473棟にのぼった。和歌山県内の社寺建築は総じて上質であるが，特に寺院については県南部の質がやや劣っており，北部に多様かつ上質の堂宇が集中している。反面，神社本殿は県内に均質に分布していると言えよう。なお重要文化財に指定されていない中世の建築が21棟も残されていたのは意外であった。これについては『和歌山県の中世未指定社寺建築』（平成２年，奈良国立文化財研究所）として詳細な報告を行った。また近世の建築についても別途詳細な報告書を刊行する予定である。　（山岸常人）

印定寺本堂架構　　闘鶏神社社殿

徳島県近世社寺建築の調査

建造物研究室

徳島県教育委員会から近世社寺建築緊急調査の委託を受けて，平成元年度に徳島県下の全市町村で151件の社寺を調査した。平成二年三月に徳島県教育委員会から調査報告書を刊行した。

徳島県は江戸時代を通じて阿波一国であったが，吉野川流域や四国山脈を境として文化圏をつくり，吉野川流域を北方といい，四国山地から南を南方といって二分するが、文化圏の違いが建築に明瞭には反映していない。吉野川の氾濫はすさまじく，氾濫の影響があった所では18世紀末期以前に遡る遺構が，また東海岸では津波の災害で江戸時代中期以前に遡る建物がないと言ってよい。全体として徳島県では江戸時代中期以前の建物は23棟と少ない。

現在の徳島県下の寺院を宗教法人名簿によって宗派別にみると，真言宗419，真宗87，禅宗48である。高野山真言宗が230寺と圧倒的に多く，ついで真言宗大覚寺派81寺，真言宗御室派78寺が多い。真言宗各派の分布には特徴があり，高野山真言宗は吉野川中流から西は皆無に近く，美馬郡では木屋平村のみに３寺院があるが三好郡はない。一方真言宗御室派は，吉野川中流から西の美馬郡三好郡に多く，また東海岸の北よりに散在する。四国八十八ヶ所札所のうち県下には23寺があり，それらが属する宗派は高野山真言宗が多いが，徳島市国分寺と鴨島町藤井寺のように曹洞宗に属する寺もある。

仏堂の規模・建立年代をみると，調査した46棟のうち三間堂が40棟と大半を占め，五間堂あるいは五間堂規模の仏堂には，徳島市観音寺（延亨二：1745）・鳴門市晶住寺（正徳二：1712）・吉野町延寿寺（天保十二：1841）・美馬町西教寺（安政五：1858）・三好町教法寺（18世紀前期）の５棟しかなく，後三者は浄土真宗に属する。池田町箸蔵寺観音堂は三間堂ながらやや大柄の本格的な仏堂で17世紀中期に遡る。徳島市国分寺本堂や海部町法華寺祖師堂のような大型で妻入の本堂が江戸時代後期に造営されていて，精彩を放っている。禅宗系寺院は少なく，鳴門市にある曹洞宗光勝院本堂は典型的な方丈型式であり延宝四年（1676）と古い。また，室町時代の将軍家の後裔が居住した平島公方から移築したという小松島市地蔵寺方丈が大型で見応えがあるが，改造が大きいのが惜しまれる。

県下に５基ある多宝塔のうち，土成町熊谷寺の多宝塔は安永三年（1774）の建立で，これを除く４基は江戸時代末期から明治時代中頃にかけての建立である。この時期に多宝塔の造営が一つの流行となった様相を示している。山川町明王院の二重堂は多宝塔のくずれた形と考えればこの流行の終末期の造営である。層塔は勝浦町鶴林寺の三重塔（文政十一：1828）１基しかなく，貴重である。

美馬町安楽寺の山門は三間三戸の二重門で，宝暦元年（1756）の建立であり，下層の組物は斗を用いず二手先を置くという他に例をみない手法を用いる。ただし，上層は本格的な禅宗様三手先であるから奇抜さを狙ったと考えられよう。

「寛保御改神社帳」（1740年代）によれば県下には神社が1236社あったが，現在は1034社で，

明治時代以降に合祀によって減少したのであろう。

神社の本殿形式では流造が多く43棟あり，一間社が30棟，三間社が13棟である。三間社では徳島市一宮神社・鳴門市宇志比古神社・貞光町熊野十二社神社が17世紀の遺構で，このうち宇志比古神社本殿は17世紀初期に遡る。一間社では鶴林寺鎮守堂・上勝町福川八幡神社・一宇村新田神社・東祖谷山村三所神社が17世紀の遺構で，このうち新田神社は寛文年間の建立である。春日造は江戸時代末期の社殿4棟を調査したに留まり，地域的分布の特徴をみることはできない。春日造のなかでは貞光町松尾神社が大型で文化二年（1805）の棟札を持ち，年代が確定し貴重である。春日造・流造以外では切妻造一間社社殿が2棟あり，宍喰町八坂神社末社祇園社はやや大きい切妻造社殿で17世紀にはいるものの大改造を受けている。徳島市天石門別矢倉比売神社の社殿は神明造で珍しく宝暦二年（1752）の棟札を持つが，建立年代はもっと下るものと考えられる。入母屋造社殿は県下に6棟あり，うち5棟が三間社であり，いずれも江戸時代後期の建立である。池田町医家神社が文化三年（1806）の棟札を持ち入母屋造社殿の中では古い。一間社の入母屋造社殿は井川町八幡神社本殿で17世紀の遺構である。吉野川の中流・上流で江戸時代中期以前に建立された本殿には，やや稚拙な感じさえする頭をもちあげた龍頭を向拝木鼻とし，龍頭の上に斗を置いて連三斗を受けるものが多い。頭をもちあげた龍頭は，時代が下ると写実的な彫りになり，19世紀前期まで続く。

昭和48年度の民家緊急調査では徳島県下の民家に多くの棟札が所蔵されていることが知られた。今回の近世社寺建築調査では，神社では多くの棟札を有するものがあったが，寺院では棟札を発見できなかったものが多い。棟札の形状は通常の尖頭形が多いが，貞光町児宮神社に長さ1656～1698㎜，巾87～96㎜で，ほっそりした長目の棟札五枚がある。明応五年（1496）・弘冶二年（1556）・慶長六年（1601）・寛永廿一年（1644）の年紀があり，後の二枚は前身の形状を受け継いだと思われ，この形状の棟札は中世に限られるかもしれない。注目される大工は木沢村出身の湯浅岩蔵で，彼が造営に関与した作品として那賀川流域を中心に相生町辺川神社（文政十一：1828）・海南町蟹神社（安政七：1860）・木頭村端傳寺本堂（文政四：1821）がある。彫刻を多用するが，全体の意匠は派手にならず本格的な造営をしている。　（上野邦一）

海部町法華寺祖師堂

徳島市一宮神社本殿

大覚寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査(6)

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

本年度は1984・86・88年度の各調査区と重複して調査区を設定し，遣水遺構（SD43）の全容を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査面積は460㎡，調査期間は1989年８月３日から９月１日までである。遺構は概ね４時期に大別できる。まずⅠ期は平安時代以前で，調査区内を西北から東南に向かって自然の濁流（SD95）によって押し流されてきた礫層が堆積する時期。Ⅱ期になると遣水SD43が開削される。平安時代初期～鎌倉時代に属し，３小時期に分けることができる。Ⅱ－１期は素掘りのSD43が名古曽瀧から大沢池へ向かって蛇行しながら流れ込む。この時期のSD43の堆積土からは，銅製の花瓶１点をはじめ，平安時代前期の緑釉陶器片などの多量の遺物が出土した。Ⅱ－２期には，SD43の東岸に盛土が行われ流路がせばめられると同時に，調査区北端付近のSD43流路中央部に石組枡（SX120）を設置する。枡以北のⅡ－１期のSD43堆積土（礫層）の湧水を一旦ためて浄化する機能を持つ。形状は一辺約1.4ｍの方形で，北・東・西の３面に径約30～40㎝の自然石を２段積み上げる。南面の石積は攪乱土壙によって失われており，SD43堆積土との直接の関係は不明だが，他の３面より１段低い石積が存在し，枡の中の湧水がSD43へとオーバーフロウしていたのであろう。内部の堆積土底部で「冨寿神宝」１枚をはじめ平安初期～鎌倉時代の土器片が出土した。Ⅱ－３期には，SD43が埋まる途上で杭による護岸が行われる。さらにⅢ期は，SD43を完全に埋めて整地し，桁行８間・梁間３間の西廂付掘立柱建物南北棟（SB110）を建て，その西側にSD 43堆積土中の湧水を利用した円形の石組井戸（SE112）を掘削する時期。SB110の柱掘形埋土からは15世紀の土師器片が出土した。Ⅳ期はこの地域が水田化した時期。耕作のための暗渠排水（SD42，44）が，地形の傾斜に沿って西北から東南に向かって開削される。

Ⅱ－１期の遺構は，出土遺物が９世紀前半期に限られるため，嵯峨天皇の離宮，嵯峨院の時期のものである。Ⅱ－１期のSD43北半部の堆積土は，水が比較的速く流れたことを示す砂・礫や，一時期滞留してよどんでいたことを思わせる黒褐色粘土などであり，嵯峨院造営当初には名古曽瀧から流れ出す水流が豊富であったことを物語る。ところが，藤原公任の「滝の音はたえて久しくなりぬれど名杜流れて尚聞こえけれ」という有名な和歌が示すように，平安時代末期には滝の水が既に枯れており，西行法師の和歌からは滝石が閑院宮に運び去られて相当荒廃していたことがうかがえる。Ⅱ－２期の石組枡は，おそらくこの後に造営され，すでに埋まって流路としての機能を果たし得なくなったSD43の伏流水を，石組枡に一旦ためて浄化し，もとのSD43の南半部だけが遣水として利用されるようになる時期である。ただし，この改作を示す明確な記録はない。この後，14世紀前半に後宇多法皇が大覚寺を再興し，この地域に「中御所」を造営する。1984・86年度調査で検出した東西方向の築地塀（SA27）がその南限である。築地塀の北側には景石や礫を用いた遣水や小園池（SG32）が新たに造られ，築地塀より南側は，も

とのSD43の流路に沿って杭で護岸した流れが造られる。SD43が完全に埋められ整地された後に，8×3間の掘立柱建物南北棟が建つのが15世紀であるから，この建物の存続時期を大覚寺の伽藍が烏有に帰す応仁の乱（1468年）まで，とするのが妥当である。

以上のように本調査をもって遣水遺構のほぼ全体像が判明し，各時期の形態，構造，意匠などが明らかとなってきた。とりわけ，Ⅱ－1期の嵯峨院造営当初の遣水は，緩やかに蛇行して優美な形態をもってはいるものの，幅5～10mと規模が大きく，大沢池への注ぎ口に護岸や修景のための石材が一部遺存する以外は大半が素掘りであるなど，平安時代末期の毛越寺のように全面を石で化粧した遣水の姿とは大いに異っている。類例としては，1969・70年に検出した平城京左京一条三坊十五・十六坪における幅約1.2mの蛇行溝があり，今回のSD43を含めて奈良時代から平安時代初頭にかけての遣水遺構の一系譜をなすものと考えられる。　　（本中　真）

石組桝SX120（西から）

大覚寺・大沢池調査遺構図

第三回近世社寺建築研究集会

建造物研究室

第三回近世社寺建築研究集会は平成元年十一月十六・十七日両日，奈良国立文化財研究所講堂において開催された。今回のテーマは「近世社寺建築の技術的特質」として，近世社寺建築の具体的な建築技法に関して検討を加えることを目的とした。近年，近世社寺建築の修理事業が本格的に進展しつつあり，近世社寺建築がどう設計され，実際に組み立てられているのかといった具体的な技法の解明が可能になってきている。このことは従前の近世社寺建築の修理事業で徐々に知られてきているし，また今後急速に増大するであろう近世社寺建築の修理でより精緻な情報を得ることができるようになるはずではあるが，現時点での知見を総括し問題点を整理しておくことが，今後の調査研究の，また修理現場での実務にとっての指針となるとの認識に立って，このテーマを設定したのである。

第一日目は京都大学名誉教授吉田光邦氏による講演「近世技術の特質」があり，近世の経済成長・開発・教育・情報伝達などの技術の基盤となる基礎的条件の検討から，広汎な知識獲得の手段が確立しており，それが近世の万般の技術の進歩に貢献していたことを明かにされた。次に奈良大学教授岡田英男氏の講演「中世から近世への建築技術の変化と特質」があり，中世から近世に亙る多くの遺構を素材として，軒・小屋組を中心とする技法の時代的特質，中世の建物の近世における修理の実態などを克明に解説された。

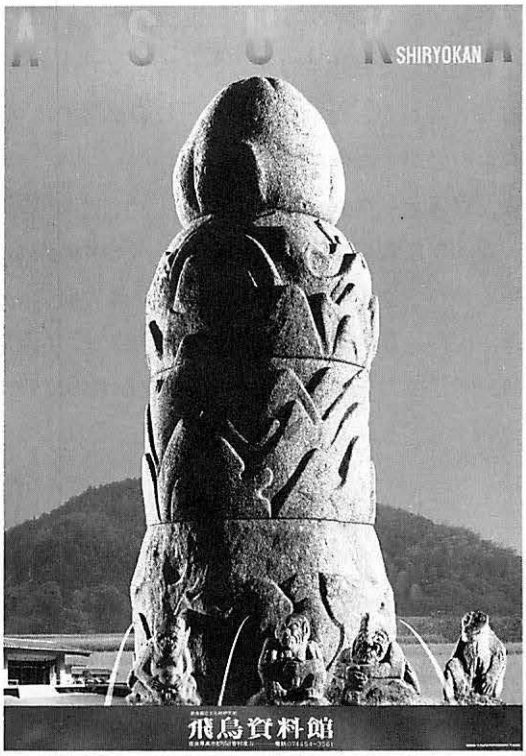
第二日目は「近世社寺建築の技法」をテーマに研究会が行われ，まず6人の講師から短い報告があって，それを素材に討議が行われた。報告は木割書（溝口明則氏）・近世の技術書（田中文男氏）・継手仕口（領家堯之氏）・構造架構（益田兼房氏）・彫刻操形（櫻井敏雄氏）・規矩（服部文雄氏）で，溝口氏は中世と近世の木割体系の差異，木割書の内容と遺構との乖離について論じられ，田中氏は技術書の時期別の特質，内容的特質とその時代的変化を明かにされ，領家氏は専修寺如来堂の修理工事の知見から継手仕口が構造や工事手順と巧妙に関連しつつ決定され，その技法が多様化したことを指摘された。益田氏は近世社寺の建築技法を中国・朝鮮の建築構造と対比しつつその特質を明かにする新しい視点を呈示された。櫻井氏は特に鳥兜形の絵様繰形を取り上げその中世以来の変化や工匠との関わりを論じられ，服部氏は近世の規矩が明治になって理論的解釈を与えられたが，現実には秘伝・口伝が適用されており，遺構に即した調査がなお不可欠であることを強調された。以上の報告，及びこれらをふまえた討論でも，近世社寺建築の技法が従前から知られているとうり，多様な特質を持っているものの，その詳細な実態や，技法とそれ以外の諸側面との関係など，遺構に即して十分明らかになっているとは言い難く，今回の研究集会のテーマ全体が正に今後の研究課題と言ってよい状況にあることが明かとなった。なお今回の集会は建築史研究者・文化財建造物修理技術者・行政担当者等165名の参加という盛況であった。（山岸常人）

飛鳥資料館特別展示

飛鳥資料館

特別展示「仏舎利埋納」　我国で出土した舎利容器のうち，遺物の現存するのは，崇福寺跡・太田廃寺（三島廃寺）・縄生廃寺・法輪寺・岐阜山田寺跡の５例がある。このほか法隆寺西院五重塔から出土した舎利容器は，再埋納されたが，模造品が残されている。また，中宮寺では舎利容器そのものは出土しなかったが，荘厳具が地中の心礎上面より出土した。この他，遺物は現存しないが文献から，舎利容器の出土や舎利埋納状況の明らかになるものに，飛鳥寺・山田寺・本薬師寺がある。こうした舎利容器の展示は，これまで催されたことはあるが，当館ではどのうな埋納状況であったかを主体とした企画をした。そのため，タイトルも「仏舎利埋納」を強調した。とくに，法輪寺・崇福寺跡は心礎の設置状況を実大で復原し，舎利孔に舎利容器を安置した。こうした展示法によって仏舎利の歴史的背景を説明できた。

特別展示「法隆寺金堂壁画・飛天」　法隆寺金堂内陣の内壁には，浄土図と菩薩像からなる10面の壁画が，昭和24年１月焼失した。そのため，金堂壁画の実物は，もう見ることが出来ないと思っていた人も多かったようである。幸いにも，内陣小壁は金堂修理の準備のため取外され，収納庫に移されていた。そこに描かれていた飛天図は燃損をまぬがれ，金堂修理完成後も，内陣旧壁画として重要文化財に指定され保存されていた。その小壁は，内壁の須弥壇の上方，通肘木と格天井の間，桁行６間分，梁間４間分の各柱間を，さらに束で二分するため，計20面の壁画となっている。壁面の寸法は縦140㎝，横70㎝前後である。各面とも，２体の飛天が左手に華盤を捧げ，ヒレを両手に巻きながら，相前後して斜め右前方に向って滑らかに飛行する。淡墨で輪郭をとり，彩色の後，濃墨でおさえる。その表現手法から，数組の絵師による作品である。１点の重量が約200kgあり，移動には，これまで以上に細心の注意をはらった。展示方法は，金堂内陣と同規模，同位置としたため，特製ケースを作成し，原位置を再現した。戦前，戦後を通して初公開であったため，研究者はもちろん多くの古代史ファンの関心を集め，当館では通常見ない観客層を動員した。　（猪熊兼勝）



飛鳥資料館イメージポスター

動物遺存体の調査(6)

埋蔵文化財センター

本年度行った動物遺存体の調査のうち，主要なものは以下の通りである。

1．千葉県佐倉市大作古墳出土のウマ(2)

千葉県文化財センターの依頼を受けて，大作古墳の周溝から出土した馬具を装着したウマの調査を前年度に引き続き行った。骨質部は全て腐朽して残っていなかったが，上下の顎歯のエナメル質が遺存しており，轡をはめたまま葬られたことがわかった。同時に出土した鞍金具と顎歯および轡との位置関係からこの馬が馬具を装着したまま，首を切られ，胴部をさかさまに落し込まれ，さらに腰の付近に切り落とされた首が落としこまれたことが推定できた。『日本書記』の「大化の薄葬令」には，亡き人の馬を殉殺することを禁止する条文があるが，これほど，古墳の葬送儀礼に伴う馬の殉殺の様子が復原できたことは稀有な例であろう。

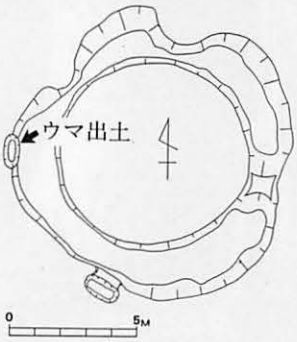
松井章「大作遺跡31号墳出土のウマ」『大作遺跡－佐倉市第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1990千葉県文化財センター pp. 207-211.

2．和歌山県和歌山市田屋遺跡出土の動物遺存体

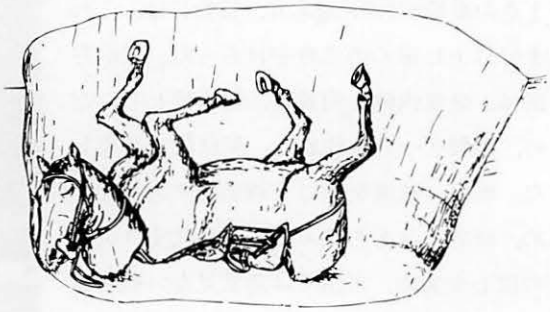
和歌山県埋蔵文化財センターの依頼を受けて紀ノ川下流域の5世紀ごろの集落である田屋遺跡から出土した動物遺存体の調査を行った。5世紀後半の溝から出土した動物遺存体のなかから，オオカミ・イノシシ・ニホンジカ・テン・ウマなど169点が同定できた。しかし，この段階でも出土した動物遺存体に占めるウマの比率は3点のみとたいへん低いこと，ウシが皆無であることがわかった。こうした一般の集落ではウシ・ウマの普及は5世紀段階でも，まだ限られたものであったのだろうか。

3．貝塚データベースの作成(2)

1986年度に開始した貝塚データベースの作成は，これまで奈良国立文化財研究所所蔵図書を中心にワークシートを作成し，国立教育研究所，及川昭文のもとで入力を行ってきた。その結果，国内約3000遺跡の貝塚・洞穴および，全国動物遺存体出土遺跡を集成した。今後，各地の研究者に協力を呼びかけて一層完全なものにして，なんらかの形で早く公開したい。(松井　章)



大作古墳平面図



大作古墳から出土したウマの殉殺復原図

年輪年代学(9)

埋蔵文化財センター

これまで，継続的に進めてきた樹種別の暦年標準パターンの作成は，今年度もヒノキ，スギ，コウヤマキともかなりの進展があった。

1．ヒノキの暦年標準パターンの延長

ヒノキの暦年標準パターンは，昨年度までその先端が紀元前206年までのものができていた。その後，長野県下伊那郡上郷町で堰堤工事中に地下６ｍあたりから出土した直径約40㎝の埋没ヒノキ１点から計測収集した年輪データによって，その先端を紀元前317年まで延長することができた。このヒノキは，今から約1900年前頃の土砂崩れによって埋没したものであるが，樹幹周辺部が腐朽しているため，その正確な土砂崩れの発生年代を確定することはできなかった。

2．静岡県下の遺跡出土品によるスギの平均値パターンに暦年の確定

静岡県下の弥生時代の遺跡からは，スギの木製品が多数出土している。試料は，静岡県田方郡の山木遺跡の出土品７点，静岡市川合遺跡の出土品３点，計10点である。この10点から計測収集した年輪データを相互に照合して，その成立年代位置で総平均し，ひとまず675年分の平均値パターンを作成した。これと，静岡県裾野市の富士山山麓の河川工事中に出土したヒノキの840層の年輪データと照合した。この埋木の年輪パターンは，44年から883年までのものである。照合の結果，675年分の平均値パターンは，紀元前420年から255年にかけて形成された年輪であることが判明した。今後，さらに年輪データを補充し，暦年標準パターンにしなければならないが，この平均値パターンは静岡県を含めた周辺のかなり広い地域の弥生時代のスギ製品の年代測定に威力を発揮するであろう。

3．奈良県下出土品によるコウヤマキの標準パターンに暦年の確定

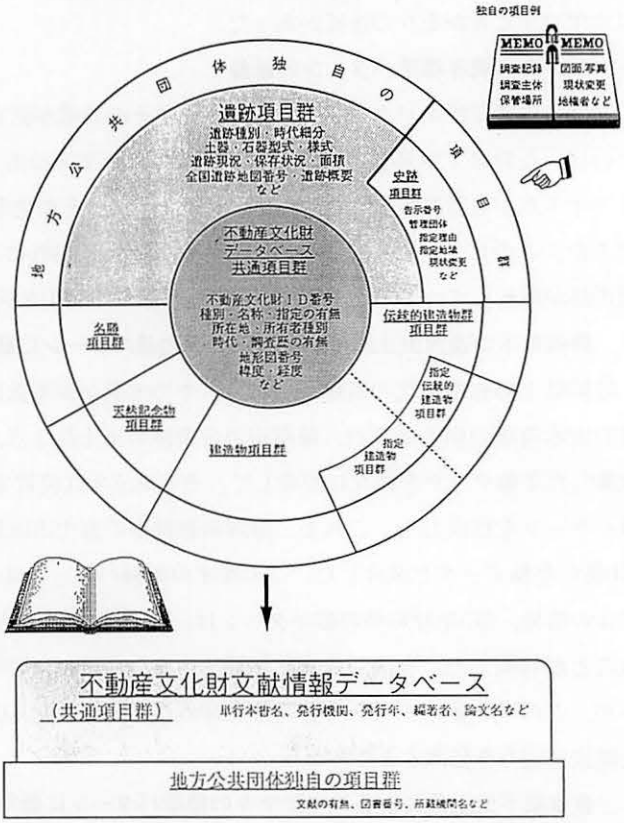
奈良市に所在する平城宮跡の発掘調査によって出土した掘立柱の柱根には，ヒノキについでコウヤマキが多い。そのなかから12点，さらに平城宮跡に隣接する法華寺境内から出土した掘立柱柱根３点，奈良県橿原市にある四条古墳の周濠から出土したコウヤマキ製品７点，計22点を選びこれらから計測収集した年輪データを使って，年輪パターンの照合をおこなった。つぎに，試料相互間の年輪パターンの照合成立年代位置で年輪データを総平均し，556年分の標準パターンを作成した。これと，平城宮跡出土のヒノキ製品22点で作成した暦年標準パターン（紀元前37年～838年）とを照合した。その結果556年分の標準パターンは，186年から741年までのものであることが確定した。平城宮跡出土のコウヤマキ材と法華寺境内出土のコウヤマキ材15点で作成した556年分の標準パターンは，長い間暦年の確定ができない状態のままであったが，四条古墳出土のコウヤマキ製品の年輪データで補充できたことによって，ついに暦年を確定することができた。今後は，弥生時代の木棺材の年輪データで作成した697年分の暦年未確定の標準パターンに暦年を確定する作業が待っている。（光谷拓実）

全国文化財データベース

埋蔵文化財センター

日本全国の文化財の管理運営，あるいは研究を円滑に行うための「文化財に関するデータベース」の構築は，文化財保護行政関係機関や，研究者積年の要望であった。しかし，美術工芸品・絵画・彫刻，書籍等のいわゆる動産的文化財と，全国の遺跡，歴史的建造物・名勝・天然記念物などのいわゆる不動産文化財の厖大な量の前に，計画・実施が躊躇されていた。しかし，昨今のコンピュータの発達と相挨って，その要望の声は大きく，文化庁も「文化財情報システム構築案」を打ち出し，平成元年より，調査費を計上するに至った。さらに，今年度は，「文化財情報システム」についての骨子案をまとめ，ハード・ソフトウエアを含めた，大がかりなシステム構築をめざしている。

不動産文化財データベースの構造



それによると，東京国立博物館・奈良国立文化財研究所は，それぞれ動産・不動産文化財の拠点であり，大型のホストコンピュータを設置して全国的な要求に対応するとなっている。それにともない，当研究所でも，本格的に不動産文化財に関するデータベース構築の計画を進め，本年度は，不動産文化財のうち，遺跡に関するデータベースの構築に着手した。ここでは，「遺跡データベース」を中心に不動産文化財データベースの基本的な構造とその構築方法について報告する。

これまでの経緯

1990年２月，全国のこのデータベースに関心のある，主に都道府県教育委員会に所属する職員をメンバーとする研究集会を，奈文研講堂を会場として行った。100人以上の参集を得て，活発な討議が交わされた。それに基づき，同年５月には20人のメンバーからなるワーキンググループの集会を催し，具体的なデータ項目の選出，データシートの設計あるいはデータの文字

数に至るまで討議を尽くした。

一方，文化庁でも伝統文化課が中心となり，システムの骨子案作成のための研究会が数回に亘って開催された。東京・京都・奈良の各国立博物館，東京・奈良の各文化財研究所等の代表をメンバーとする。それによると，平成7年度にサービス開始を目標にして，大型の汎用電子計算機を東京と奈良に設置し，全国ネットでデータを供給する計画になっている。

データベースの構造概念

不動産文化財データベースは図に示した構造になっている。中心に各不動産文化財に共通する項目を置き，周囲には不動産独自の項目を盛り込んだテーブルを置く。さらに，地方自治体，埋蔵文化財センター，あるいは研究者独自のテーブルをその外側に配置する。また，それら文化財に関する文献データベースも並行して構築し，個々の物件に付したID番号で連結する。

データベースの作成者

全国30万ケ所といわれる遺跡のデータベースは，とても1個人，1機関の手に負えるものではない。遺跡のデータシート作成及び入力は市町村が独自に行うものとし，都道府県教委とその地方の埋文センターがバックアップする。仮に単純計算すると，30万遺跡/3千市町村＝100件/1市町村となり，実現不可能な作業量ではない。データ入力は基本的にはパーソナルコンピュータを使用して，市販のデータベースソフトで行うが，共通のデータシート用紙と記入要項，および市販のデータベースソフトを有効かつ容易に使うためのプログラム（ユーザインターフェイス）については，奈良国立文化財研究所が提供する。

データベースのユーザ

基本的には，データ提供者がユーザとなる。市町村で，管内のデータを作成して提供すれば，ただちに県内は勿論，日本全国の遺跡に関するデータを検索することができる。また，データ提供者ではなくとも，関心を持った研究者は，申込によってこのデータベースのユーザとなれるし，興味のある部分をダウンロードしてさらに内容を膨らませ，個人の研究に役立てることもできる。

データベースの活用

基本構想としては，全国オンラインとし，日本のどこからでもこのデータベースをアクセスできるシステムづくりを目標に置いている。しかし，全国3,000回線のオンラインとなると，厖大な予算と，メンテナンスのための要員が必要となる。そこで当面は，先の3館2所，都道府県庁，埋蔵文化財センター等60回線ほどのオンラインを目標に置く。市町村は，県庁の端末を直接使用するか，電話回線などでオンラインアクセスする。あるいは，データをCD-ROM化しそれを導入してオフライン検索するなど，方法については現在予算のかねあいもあり，検討をすすめている。

いずれにせよ，マシーンの設置場所，メンテナンス要員の確保など解決すべき問題は山積しているが，既に管内の遺跡に関して独自にデータベース化を始めている機関もあり，全国の統一したフォーマット作りが急がれている。（伊東太作）

複合材料で構成される遺物の保存処理

埋蔵文化財センター

出土する遺物の材質は多種類におよぶが，２種類以上の複合材料を使用して製作されたものも少なくない。従来から保存処理で問題となるのは，水漬け状態で出土する有機質と無機質材料から構成されているものである。このうち無機材料に鉄や銅などの金属材料が使用されているものは，保管中にも腐食が進むため，出土後早急な処理が必要となる。従来からこのような遺物の保存処理は，アルコール脱水後，溶剤に置換してさらにアクリル樹脂などを常圧下で含浸させ，補強と安定化をはかってきた。昨年度開発したシリコン樹脂含浸法は，同類の手法であるが，樹脂含浸には特殊な装置を製作して，低温下で減圧・加圧含浸を繰り返して処理期間を大幅に短縮することに成功したものである。

今回の方法は，低分子で，安定した状態を長時間維持できる薬剤を使用して，含浸期間を短縮したものである。今回使用した薬剤は，高分子アルコールである。

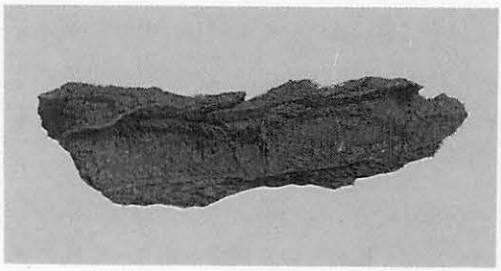
今回処理した遺物は，鉄地に漆を塗った小札綴りの甲冑の一部であり，小札は鉄さびや土と一体となっていた。表面の土砂を落すと漆膜がよく残存していたものである。しかし，鉄地がさびており，漆膜が部分的に浮いている。水漬け状態で保管しておくと，さらに鉄地の腐食が進んで漆膜が剝落する危険があった。

遺物は薄手の不織布で保護した後，常温下でアルコール脱水をおこなった。脱水の最終段階では，特殊な合成ゼオライトをいれてより完全に脱水した。

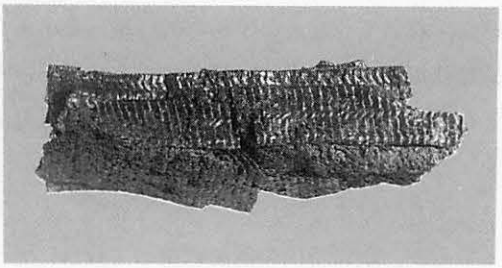
脱水終了後，高分子アルコール（C16）と混合し，徐々に濃度をたかめ（約55～60℃下），最終的に100％にして含浸を終了した。

この方法の特徴は，含浸材料にPEGやアクリル樹脂，シリコーン樹脂にくらべて低分子材料を使用するため，処理期間が短縮できる。かつ，PEGのように吸湿性がないため金属材料に使用しても保管上安全である。また，含浸する高分子アルコールの分子量を少し変える事により，固く仕上げたり柔軟なものに仕上げることも可能である。さらに柔軟性を必要とするものは，シリコーン樹脂を使用する。

（沢田正昭・肥塚隆保・村上　隆）



処理前



処理後

平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

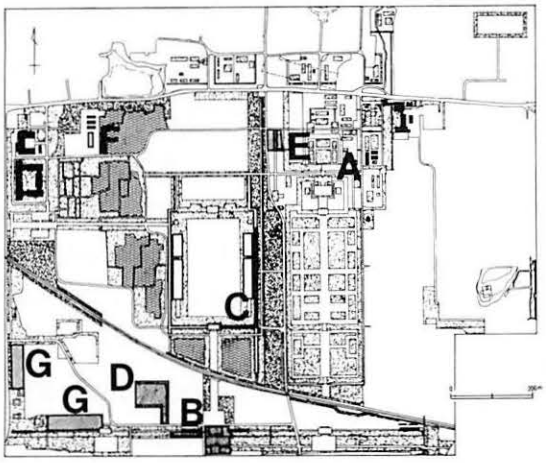
1．平城宮跡の整備

1989年度に実施した宮跡整備は，宮内省西南殿復原，朱雀門基壇復原基盤築成および周辺整備，第1次朝堂院築地表示整備，多目的広場造成，内裏西外郭整備，整備棟新営等である。

宮内省西南殿復原　この地区にはすでに南殿第一殿・第二殿および北門とその両側築地を復原建設している。西南殿はこれに続く工事として1989・90年の2年度で完成を予定しており，本年はその第1年度にあたる。建物の規模は桁行9間，梁間2間の南北棟で，南から3間目に間仕切りのための柱が立ち，南北2室にわかれることが発掘調査で確認されている。北側に棟通りをそろえて建つ桁行12間の建物とともに，宮内省における物品収納棟としての役目をもっていたと考えられるところから，東面に3箇所の扉口を，西面に7間分の採光用連子窓を設けたほかはすべて土壁とし，比較的閉鎖的な室内空間に復原した。構造型式は事務棟と推定される南殿よりもやや格を下げ，舟肘木・角桁・棒垂木を採用し，また棟押えは将棋駒形断面の木材をもちいた。ほかには，内部を土間床としたこと，施工地盤高を自然地形に準じて南北方向で35cmの傾斜をとったこと，遺構に基づいて基準尺を29.5cmに定めたことがあげられる。（図A）

朱雀門基壇復原基盤築成および周辺整備　1989年度から3年計画で朱雀門基壇復原整備を行うことになり，今年度は基壇復原のための基盤築成と準備工事を行った。（図B）

基盤築成に先立ち，既発掘地の遺構面までの再掘をするとともに，農道や水路等があって未発掘であった南半部の発掘調査を行い，朱雀門に関する新しい知見を得た。次いで遺構面の保護のため平均5cmの厚さで砂層をつくり，のち礎石抜き取跡等の凹面に新土を転圧しながらの埋戻しにかかり，地盤が略平担化した段階から粘土とマサ土の互層による基盤築成に進んだ。築成土は両者ともそれぞれ15cm厚に敷均し，その上をランマー等を利用しながら手築きに近い方法で転圧し，平均8cm位まで圧縮するのを標準にした。基盤施工高は遺構面から基礎ベース下まで（平均60cm）の上にさらに中央部でプラス30cmの盛り上げを行い，表面風蝕を防いだ。上面は外周に向って水垂勾配をとって，四周にはU型側溝を布設して北方隅2ケ所に雨水を誘導し，既存の排水溝に流出するようにした。ちなみに昨年度行った手築きによる版築の試験結果では㎡当り9.4t以上の地耐力が測定され



平城宮跡整備位置図

ている。

朱雀門周辺整備は，迂回水路の造成と旧水路の撤去，朱雀大路の東西両側溝の表示と奈良市が整備している朱雀大路との取合い部の整備および北側の松林の間引き移植を行った。迂回水路は，既存水路が南面大垣の南に接し流れているため，これを朱雀門の西端から西86mの位置より二条大路北側溝に迂回させた。現況両溝の底高に差があるため，二条大路北側溝中央底面を幅90cmで約50cm下げ東へと流すようにした。しかし北側溝は第201次発掘調査で朱雀門前には存在せず朱雀大路の両側溝を南方へ流れることが判明したため，今回の整備ではボックスカルバート（1400×1400mm）を用いた暗渠とし東方水路に接続した。朱雀大路の側溝は敷地の関係から，玉石の二段積みで西側溝を約3.5m，東側溝を約23.7m復原表示するに止まった。現在東側溝にほぼ並行し用水路が走っていたため，東側溝底面にU形溝（U－300）を布設し迂回させた。朱雀大路は今年度整備予定地南方で既に整備されている奈良市の整備手法と合せ，二条大路南側溝延長線より南部について，中央に下ツ道（幅24m）を砕石敷きとし，その両側は張芝とした。なお，朱雀門北部にて間引きを行った松は，宮西辺南部（玉手門南部）及び南辺西部（若犬養門西部）の外周緑陰帯内に移植した。

第1次朝堂院築地表示整備　第1次朝堂院を囲う築地塀は盛土（約30cm）の上，築地幅を凝灰岩縁石と自然色（土色）舗装（エポキシ樹脂混合モルタル・厚15mm）により表示しているが，今年度は東辺及び南辺築地の舗装（約1,660㎡）を行い，朝堂院外周築地の復原表示を完成した。（図C）

多目的広場造成　平城宮跡に於てスポーツを含む多目的な利用に供せられている広場はこれまで佐伯門口から入ったところ（佐伯門東広場）と玉手門口から入ったところ（玉手門東広場）の二ヶ所に限られていた。今さらいうまでもなく，平城宮跡は基本的に遺構の保存と公開展示を目的とするものであり，整備についてもそうした目的に沿って行われてきた。一方，近隣住民をはじめとする国民各層の要望に応えるため，まとまった広さを持つ多目的広場を設置することも都市部における広大なオープンスペースをもつ平城宮跡の役割の一部となってきている。こうしたなかで，多目的広場の位置を検討した結果，本年度は近鉄線南側の第1次朝堂院西築地延長線西側に設置し，順次西ないし西北に拡張して最終的には既存の玉手門東広場と一体となる計画とした。本年度整備面積は5,936㎡であるが，もっぱら野球場として使用されることのないよう広場としての実質的な広さは本年度分については52m×61mとし，拡張予定のある西側を除いて周囲を植樹帯で囲むこととした。施工にあたっては，厚20～60cm程度の全面盛土とし，遺構の保護を図るとともに，広場部分には透水網状管（φ75mm）を20mピッチに入れ水はけを考慮した。（図D）

内裏西外郭整備　平城宮跡中央部を南北に貫通している市道に沿い内裏西外郭中央部に設置していた駐車場（約1,500㎡）が狭隘となってきたこと，近年の市道通行量の増加に伴ない出入の際の危険も増してきたこと，1987年度に遺構展示館（覆屋）の東部に駐車場を新設したことか

ら，この駐車場を閉鎖することとした。駐車場の中央に砕石敷苑路（幅４ｍ）を残し，それ以外の砕石敷部分を撤去した。砕石敷跡地には張芝と中木の植栽を行い，市道沿いに擬木柵を設け灌木の植栽を行った。（図Ｅ）

整備棟新営　これまで平城宮跡内の芝や樹木等の日常の管理を行うための基地として遺構展示館の東に整備棟を設置していた。しかし，この整備棟が老朽化しているとともに狭隘となり管理用トラクター等の一部機材を分散収納せざるを得ない状態となっていたことや，1887年度に遺構展示館東部に便所・駐車場を設置したことにより，管理用機械等と見学者の動線が交差することとなって危険であることなどから，この整備棟の移築をすることとした。移築場所は西方の発掘基地に近接した資料館北東部とした。この地区では，平城宮跡第194次発掘調査の結果東西両面に庇を持つ礎石建南北棟（SB 5300，梁行４間，桁行21間）を検出しており，今回建設する整備棟はこの建物遺構に位置を合せることとした。結果，梁行方向で南端より４間目から北へ９間分の直上1.25ｍを床面高とし，建物遺構東西基壇前面線を花崗岩切石敷で整備棟外周に表示を行った。（図Ｆ）

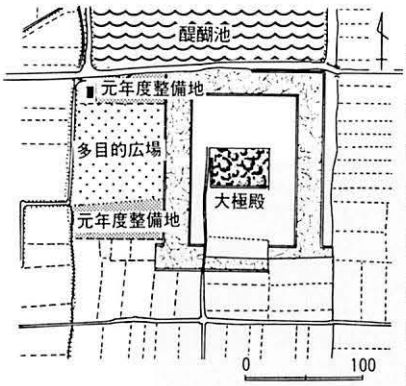
整備棟は鉄骨造耐候性鋼板葺平屋建で，壁は軽量気泡コンクリート板を使用し，既存の資料館や収納庫と外観を統一した。建築面積は511.36㎡で，事務所（36㎡），車庫（288㎡），工作室（27㎡），物品倉庫（36㎡），便所及びシャワー室を備えた。

その他　前述した朱雀門周辺の松の移植地として，外周緑陰帯整備を行っている宮跡西辺南部約1,250㎡及び南辺西部約4,690㎡の２ケ所に盛土を行い，松を109本移植した。（図Ｇ）

宮内に設置を計画している遺構説明板について，今年度は第１次朝堂院南門に設置を予定する説明板（陶板1800×900㎜，600×900㎜，いずれも厚20㎜）２枚の製造を行った。

工事名	宮内省西南殿復原	朱雀門地盤造成等	第1次朝堂院整備	多目的広場造成	内裏西外郭整備	整備棟新宮	外周緑陰帯整備
規模	198.17㎡	5,920㎡	2,160㎡	5,940㎡	1,650㎡	511.36㎡	6,240㎡
工事費(千円)	124,630	80,958	21,243	20,861	3,360	80,957	15,078

２．藤原宮跡の整備



多目的広場の整備

1989年度の藤原宮跡の整備は，大極殿院西方の多目的広場の拡張整備を行った。この広場には見学者用駐車場及び便所を併設しており，近年の利用者数の増加に伴って駐車場を拡張する要望が多く寄せられるようになった。そこで駐車場を南へ約８ｍ拡張し，多目的広場も南方へ約23ｍ拡張する工事を行った。結果，駐車場（砕石敷）面積は845㎡，進入路（コンクリート舗装）147㎡，多目的広場（盛土）約8,000㎡となり，駐車場と広場の間及び広場南辺には，大極殿北の苗圃より樹木の移植を行った。総工事費は4,893千円であった。　（細見啓三・渡辺康史・小野健吉・阪本勇）

萩城東園地区の復原整備計画

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

山口県萩市に存在する萩城は，慶長9年（1604）毛利輝元によって築城が開始されて以来，幕末に至るまで，防長両国の拠点として政治・経済・文化の中心的役割を果たした城である。玄海灘に浮かぶ指月山上に詰丸を頂き，その南麓から松本川・橋本川が形成する三角州にかけて本丸・二の丸・三の丸と城郭の中心部を順次配し，本丸東北方には，満願寺・三摩地院・宮崎八幡宮等の社寺やお茶屋・御殿を中心とする東園（庭園）が造られている。

萩市では，萩城跡が萩の観光・文化の中心的役割を担っていることに鑑み，城跡全体の保存管理計画の策定を目指すと同時に，復原整備の手はじめとして1988・1989年の両年度にわたって上記の東園（庭園）地区の整備基本計画を立案することとなり，当研究所では作業の指導助言を行なった。初年度は絵図・文献・実地踏査による城跡および東園地区の復原作業を行なった。あわせて復原図を基にコンピュータ・グラフィクスによる復原透視図を作成した。次年度は，東園地区の地区区分計画から，各地区の特性に合わせた復原整備の基本計画案を提案した。

（高瀬要一・細見啓三・本中　真）

萩城東園地区復原整備計画図

萩城復原 C. G.

史跡石動山行者堂の移築復原

建造物研究室

石動山は石川県鹿島町に所在する修験道の山である。その草創は８世紀に遡り，中世では360坊，近世でも58坊の寺々が講堂を中心とする大伽藍とともに一山を形成していた。創建以来幾度となく羅災したが，最後の大きな被害は天正10年の前田利家による攻撃で，この時山内のすべての建物が焼失した。その後北陸の雄藩となった同氏の援助もあって17世紀初頭から18世紀にかけて順次復興していったが，五重塔・多宝塔などのように再建されない建物もあった。

今回旧地に移築復原した行者堂は，17世紀中頃の古材を一部活用しながら18世紀の極初めに建てられたと考えられるもので，石動山が明治新政府の方針によって瓦解した際，他の建物とともに売払われた一つで，西麓の最勝講村が金19円也で入手し，天神社拝殿として再利用していた。ところが近年になって拝殿が新築されることになった機会に町が寄贈を受け，昭和53年から継続している史跡整備事業の一環として往昔の地に里帰りさせ，史跡の保存と活用に資することとなったのである。ちなみに，現在山上には江戸時代の建物として，旧大御前本社（現伊須流岐比古神社本殿　1653）・旧神輿堂（現同社拝殿　1701）・旧観坊（17世紀中期）があり，また山下に移築の旧仁王門（現鹿西町長楽寺仁王門　18世紀初）・旧開山堂（現氷見市道神社拝殿　1801）がのこっている。

天神社拝殿に転用された際，柱位置を移動するなどして改造を加えている部分があったので今回の移築を機に次のように旧形式に復原した。１．正面三間側面三間入母屋造妻入りを桁行三間梁間二間入母屋造平入りに改め，原地の旧礎石上に移築する。２．桟瓦葺を銅板葺（こけら葺形式）に改める。３．妻飾りを両側面とも木連格子に復する。４．背面側円柱を旧位置にもどし仏壇構えを復する。５．原地縁束石によって正面および両側面に縁を復する。

このように，礎石群として存在していた遺跡と，実際の建物とを合体復原した例は少なく，今後の史跡整備の一つの手法を示すものとしてその意義は大きいと考えられる。なお，1990年３月に工事報告書が刊行された。　（細見啓三）

竣工行者堂全景

行者堂復原平面図

在外研修報告

—ギリシア・ローマの古代都市遺跡—

1989年3月26日から二ヵ月間，文部省在外研究員として，ギリシア，イタリアに出張した。この在外研究は，ミノア期から帝政ローマ期にかけての，いわゆる古代都市遺跡の現地を踏査し，王宮・テンプル・フォルム・アゴラ・テアトル・住居など都市構成の段階差，立地，周辺の地形（生産基盤）との関連，遺跡規模などを調べるとともに，日本の宮都の発展段階と対比し，古代都市の構造とその発展の過程について考えることを目的としたものである。

ギリシアでは，都市の初現段階に位置づけられるミノア文明期のクレタ島やサントリーニ島のクノッソス・フェストス・マリア・アクロティリの諸遺跡，ミケーネ文明期のミケーネ，アルカイック・古典・ヘレニズム期のアテネ・コリント・オリンピア・デロス・デルフィイなどのポリス都市遺跡，帝政ローマ期のアテネなどの諸遺跡を見学し，イタリアでは，ローマ・ポンペイ・オスティア．アヌンツィアータなどの帝政ローマ期の遺跡と，それに先行するギリシア植民都市のパエストウム・セジェスタ・アグリジェント・セリヌテなどの遺跡を訪ねた。

これらの遺跡の現地踏査を通じて，紀元前15世紀以前のミノア期の「都市遺跡」は，次期以降の都市遺跡と比較して，小規模であり，「公共施設」があまり独立分化していないといった大きな違いが見られる。王宮とその家政機関が拡大したものと解釈する方が妥当であるように思われ，段階的には，日本の飛鳥期の宮殿と対比できるのではないかとの印象を受けた。

ミケーネ期以降のポリス都市遺跡は城塞都市として形成され，神殿・アゴラ・住居の分化が見られる。王宮の占める位置は小さくなるか，あるいは無くなる。こうした変化は，古代デモクラシーの政治体制をよく反映している。しかし，一方では，神殿を主体とした都市構成をとっていること，急峻な山上や生産基盤や交通の便の悪い内陸に位置する例があることなどを考慮すると，これらの都市の成立は，商工業といった非農村的経済活動や政治の拠点ということを第一の要因としていたとは必ずしも言えず，むしろ，聖地にたいする宗教上の拠点・防衛基地としての側面が重視されていたことを推測できる。また，城壁をともなう都市形態は，内在的要因以上に，対外的な契機が，早熟的かつ高質の内容を持つ都市形成をもたらした大きな要因であったことを示唆している。こうした都市形成の過程は，日本の都城の成立過程と大きく異なるが，前期難波宮などの造営の要因を考える上で重要なヒントを与えるものと思われる。

帝政ローマ期の段階では，行政機関の施設が多く認められるようになるが，それらは日本の宮城のような一郭を形成してはいない。それは，日本の都城が当初から王宮を中心に計画的に建設されたのに対して，ローマがいわば集積型の都市であったことによるものであろう。

行程中，アグリジェントやアヌンツィアータの遺跡では，結婚式の記念写真をとる光景にであった。永年保存されてきた遺跡で永遠の愛を誓う若い男女の姿に，人々の遺跡に対する想いを垣間見て，日本での遺跡に対する関心は如何かと思わずにはいられなかった。　（山中敏史）

在外研修報告

—中南米の古代遺跡—

1990年１月15日から二ヵ月間，文部省在外研究員としてメキシコ・ペルー・ブラジルに出張した。訪問の目的は，アステカ・マヤ・インカ等の古代文明が残した都市・神殿・宮殿遺跡およびその関連遺跡を実見調査し，それらと日本の都城遺跡を比較研究することにあった。

現在のメキシコシティーとほぼ重複する位置に栄えたアステカ文明テノチティトラン遺跡（13～16世紀）は，人口20～30万とも推定される大都市遺跡で，その中心には城壁で囲まれた方形の神殿域が存在する。城壁の各面には一つの門が開き，神殿域内にはほぼ対称形に建物群が配されていたようだが，その核となるべき中央神殿は東を正面とする。また，７世紀ごろに栄えたテオティワカン遺跡も方格の地割を伴う大遺跡で，太陽及び月のピラミッドや，ケツアコアトルの神殿などが規則正しく配置されている。ただし，このテオティワカン遺跡でも，道路が示す地割線は，方位とは必ずしも一致していない。

ユカタン半島およびその周辺地域に栄えたマヤ文明は紀元前からの前史を持つが，その最盛期は７～８世紀であり，日本の古代律令国家の成立・発展期に相当する。パレンケ・ティカル・コパン等の遺跡がそれで，９世紀以降は海岸に近いウシュマル・チチェンイツアー遺跡へと中心が移っていく。これらのマヤ遺跡群では，宮殿域を区画する施設は未発達で，神殿や宮殿，球技場などを点々と配置し全体を構成する。この場合，２～４棟程度の建物がコ字・ロ字形に配置されたものが構成の最小単位であり，これを幾つも連ね配置することによって全体の町割が作られていくようだ。

アンデス高地に栄えたインカ帝国では，精緻な石積技法を用いて築いた建物群を連ねて都市空間を構成していく。宮殿や神殿建物を周到な都市計画のもとに配置するが，ここでも方位との関連は指摘できない。もっともインカ帝国の全盛期（15・16世紀）は短く，その前史たるプレインカ遺跡にも見るべきものは多い。ナスカ，イカ・チンチャ，チャンカイ，モチェ，チムーなどの海岸文化がそれだが，これらの海岸文化は都市遺跡を形成しておらず，墓地遺跡が顕著である。ただし，北部海岸地域に栄えたチムー文化（10～14世紀）は，チャンチャンという大きな都市遺跡を残している。この遺跡では幾重にも巡らされた壁と通路が特徴的で，その範囲は方約４kmにもおよぶ。ただし，この通路は縦横に走るものではなく，鈎の手に曲がりくねった迷路が相互に連なっているにすぎない。その意味では「城塞の町」である。

ブラジル・アマゾン域も古くから人の住むところである。一説によるとインカ・マチュピチュ遺跡は，アマゾンからの進入に備える砦であると言われるように，インカ帝国の東辺に脅威を与えたようだ。ただし，顕著な遺跡は残しておらず，まして都市の形成はない。

以上のように，中南米に残る古代都市遺跡には，日本の古代都城に一脈通じる特徴点も多々みられた。今回の訪問で得た成果をもとに，今後さらに検討を重ねたい。　　（黒崎　直）

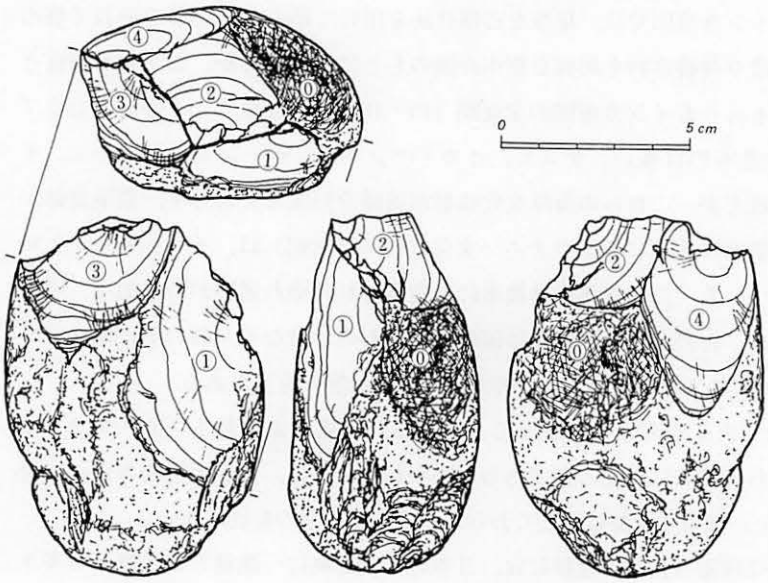
在外研修報告

―アフリカ・ヨーロッパに石器技術をたずねて―

3月28日出国，6月27日帰国。石器づくりの技術を通じてみたアフリカ，ヨーロッパと日本の旧石器文化の比較研究をテーマに，三ヵ月間，イギリス，スエーデン，デンマーク，フランス，エジプト，ケニアの六ヵ国を旅し，石器づくりの技術的な検討と実験研究者を尋ねた。

旅には思いがけない出合がある。「場所」はエジプト，ギザの砂漠の中。「物」は礫を素材にした石器。3基の巨大ピラミッド，クフ王らの壮絶な夢の跡の尖峰を仰ぎみながら，南西隣の丘陵に石器用石材フリントの採集に入る。一面に，中小様々な円礫が果てしなく続く。目標は，先王朝時代フリント製ナイフ用の素材。現場に立ち，その夢ははかなくも消えた。外観だけでは良否の判断がつかず，試し打ちしながら選別，2時間近く熱砂礫の中で探しまわる。集めた礫の中に，割り取った状況の歴然とした［礫器］が混じり込んでいるではないか。

使用素材は握り拳大よりやや大きめな礫。割取った面は全部で4面（挿図①－④）。時間差の判読から，作られた順序は面①＞②＞③＞④である。①③は正面側，②④は裏正面側にある。①は②の，②は③の，③は④のそれぞれ打面となり，三回連続した絶対的な交互剥離関係を示す。作り出した機能縁線が大きくジグザグをなす，まさに教科書的なチョッピングトウール。そして，見落せない点は，面①の設定位置の選定にある。この資料は，みごとに選択理由を説明してくれている。礫の縁は概して丸い。割始めの手がかりを得るのは容易ではない。丸い縁に対する第一撃は，下手をすると，あらかた叩き飛ばしてしまうことになり，小形の礫では，残り部分の重量を確保できない。その点，礫側面を作る自然の凹み（捜図◎）を巧みに利用した配慮を読み取れる。



200万年？の間，出合を待ってくれた〔礫器〕

たった4回の打撃で自然礫に道具の形，機能を与える巧みさに，舌を巻かざるを得ない。ケニアで，180－200万年の古さを持つといわれるコビフォラ遺跡の同様な礫器をみた。7面ほどが複雑に組み合って，道具の形を作る。彼らの割の体験は実に良く整理されているといえる。（松沢亜生）

公開講演会発表要旨

平城京再現 ―成果と課題― 平城宮跡の発掘調査も30年目を迎え，その成果を広く知って頂くため特別展を企画した。既に10年目および20年目の２回，同じ趣旨で展覧会を開催したが，今回は京都・東京の両国立博物館を会場とすることができ，指定品も数多く出陳願って天平文化の厚みを一層巾広く理解して頂けたことと思う。30年間の発掘面積は37万m²に達し，この間に東院の発見，大極殿・朝堂院の転移と併存，諸宮衙の配置と形態，大嘗祭跡の発掘など数多くの成果をおさめた。また木簡などの出土品を通して当時の制度や経済の具体的な様相をかなり細かく描き出せるようになった。近年では開発の進展と共に京域での大規模調査が増大し，長屋王邸の発見をもたらした。今後の期待も大きい。 （鈴木　嘉吉）

平城京発掘30年　帝塚山短期大学　青山　茂氏 平城宮の発掘は，昭和34年に国が直営事業で調査を開始してから30年たつ。しかしそれまでに保存と調査の前史があった。幕末に北浦定政が調査の先鞭をつけ，明治中期関野貞等の研究をうけて棚田嘉十郎は保存顕彰に献身的努力をし，これが元となって大正８年史蹟に指定される。昭和28年には内裏北部の道路拡幅に伴い掘立柱穴が発見され，これを機に国営の調査が始まる。昭和34年に奈文研が計画的調査に入り，昭和36年には最初の木簡を掘り出している。しかし昭和36年から史跡未指定の宮域西半部の近鉄車庫建設計画に対し保存運動が起こった。その結果当時画期的な４億円の買い上げ予算が計上されたが，なお国家予算と比べると微細なものであった。 （山岸常人抄録）

犬，猿，馬―古代人の生活と動物 長屋王邸宅跡からはさまざまな動物に関する資料が出土している。なかでも墨書土器に描かれた猿，犬？の姿。木簡にみられる犬，馬などが代表的な動物である。そこで，この講演会では，このような動物の骨が，全国の遺跡からどのように出土し，日本人とどのようなつながりを持っていたかを考察した。その結果，猿は，縄文時代以来，特に西日本においてイノシシ，ニホンジカに次ぐほどの出土例を示し，食用にされていた。犬は人間の伴侶として縄文時代のはじめから人に飼われていたが，奈良時代の貴族は鷹狩を好み，長屋王邸では鷹犬の調教のために，米の餌を与えていた。馬については乗馬が普及したのは５世紀になってからで，従来いわれていた縄文時代の馬の存在を否定した。 （松井　　章）

馬をめぐる古代まつり 八世紀初頭に始まる律令（的）祭祀は，古墳時代祭祀とは理念・体系が大きく違う。それは中央（平城京）で成立し，地方へ伝播した。ここでは，長屋王邸の北から出土した最古の絵馬（737年頃）をとりあげ，意義を考えた。まず，古代の馬形遺物のなかで絵馬が占める位置を明らかにし，ついで，絵馬は民間信仰が先行しこれを中央祭祀が吸収したとする説を否定。逆に，中央から地方，の図式が成立することを論証した。なお，長屋王邸で見つかった猿の絵皿は，古代の馬と猿の関わりを明らかにする。この猿は，長屋王邸の廐の守護神であり，従来の馬と猿との関わりは中世以降とする説は，八世紀初頭と改める必要があろう。 （金子裕之）

調 査 研 究 彙 報

建物研究室

滋賀県下庭園の実測調査　栗東町の安養寺庭園（570㎡）と浅井町の孤篷庵庭園（1590㎡）について，それぞれ縮尺50分の１と40分の１で実測した。1989年11月。（田中・高瀬・本中・小野）

長崎県福江市石田城の庭園調査　安政５年（1858），城内二の丸に造られた藩主隠居宅の庭園（約6,000㎡）について縮尺40分の１で実測した。1989年12月　（高瀬・安田・本中・小野）

京都武者小路千家の庭園調査　茶道三千家の一つである武者小路千家，官休庵露地の実測調査を京都市の依頼により行った。実測にはトータルステーション TC1600を用い，縮尺1/40の平面図を作成した。一部建物を含む実測面積約480㎡。1989年12月。　（高瀬・本中・小野）

歴史研究室

薬師寺調査　東大史料編算所との共同調査（10回目）。20・23・25・26函の整理分類・調書作成と14・16函の写真撮影を行った。各函には多量な近世文書が収められており，各函継続調査となった。1989年７月。　（綾村・森）

その他の調査　法隆寺版板木の調査（1989年８月，綾村・寺崎・森）。西大寺清浄院聖教の調査（1990年３月，文献全員）。石山寺深密蔵の調査（1989年８・12月，綾村・橋本）。

平城宮跡発掘調査部

平城宮朱雀門の復原に関する研究　今年度から「特別研究第一次大極殿地区復原整備のための基礎調査」の一環として組込まれることになり，1989年６月と1990年３月に研究会を開催した。今年度から３ケ年計画で朱雀門基壇の建設が認められたこともあって，朱雀門の復原案の再検討を行い，基壇建設のための年度計画およびその実施案を示し討議を加えた。　（細見・内田）

特別研究第一次大極殿地区復原整備のための基礎調査　第一次大極殿地区の復原整備に必要な基礎資料収集の手始めとして，宮殿の航空写真の撮影を行い，解析図化機 WILD AC-1を用いて縮尺1/200の現況地形図を作成した。また，地形造成計画をコンピュータを用いて立案するための支援システム（LAPLAS）も購入した。　（伊東・高瀬・本中・小野）

特別研究発掘庭園の資料収集　発掘庭園はある時点での庭園の骨格をそのまま残しているところから庭園史研究上貴重な資料を提供することが多い。本特別研究は，全国の発掘庭園に関する資料を収集・整理してその成果を刊行することを目的とする。初年度はリスト作成後，各都道府県に照会して基礎資料の収集を行った。　（牛川・田中哲・高瀬・本中・小野）

史跡春日大社境内地実態調査および修景整備基本構想の立案　1986年度から春日大社境内実態調査委員会が実施してきた自然科学，人文科学の各分野にわたる調査結果をふまえ，1989年度には境内地の修景整備基本構想策定にかかわる指導助言を行った。また，本研究所が分担した既往の調査成果（建築、歴史）を取りまとめるとともに，修景整備基本構想策定報告書を作成した。　（細見・綾村・本中）

ラオス・ワットプー遺跡の発掘調査　ワットプー遺跡の発掘調査に指導者が欲しいという，ユネスコの要請に日本が応えて，ラオス南部のチャンパサック市に1989年12月上旬から七週間滞在し，発掘調査を指導した。

ワットプーはヒンドゥー教の寺院遺跡で，ラオスでは第一級の文化遺産である。ワットプーの現存する建物は一連の造営で，造営の時期は十世紀，遅くても十一世紀である。カンボジアのアンコールワットに先行するクメール文化の所産であることは間違いない。創建当時はヒンズー教の寺院であったが十四世紀頃に仏像を安置し仏教寺院となった。現在は山裾に二つの宮殿と聖牛殿，途中のテラスに六つのストゥパ、山の中腹にある最上のテラスに主堂、図書館がのこっている他、中央参道に沿って，門の基壇が四・五棟分のこる。

今回の発掘調査が小規模で予備的調査であったにもかかわらず成果は多い。現存する建物は浅いところで0.8m，深いところは1.5mほど基壇が埋まっていることがわかった。宮殿の周囲には石敷舗装面があり，ストゥパーの周辺にも石・レンガの舗装面があるのがみつかった。主堂は石造と煉瓦造の素材の違う二つの構造体から成り，二つの構造体が時期が異なる造営とする見方があったが同時期であることが確定的になった。主堂が現存の建物の裾に基壇を広げていることが明らかにあった成果も大きい。乏しい機器で測量基準点のネットワークをつくった。この測量の成果は建物相互の位置や検出した遺構の相対的位置を知るのに有効なはずである。

ワットプー遺跡の保存に関して日本にも援助がもとめられている。資金の援助や，人の交流を積み重ねる必要があるし，調査に要する機器・道具の提供が考えられる。　（上野）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

結城廃寺の発掘調査　茨城県結城市の結城廃寺第２次調査の指導。今年度は伽藍配置を明らかにするためにⅠ区，寺域南限を確認するためにⅡ区を設けた。その結果，Ⅰ区で中門と南面回廊の一部，中門の東北で塔跡，塔の西北で基壇建物の一部を検出した。塔跡には心礎が遺存し，舎利孔の石蓋も残されていたが，残念ながら舎利容器はなかった。石蓋にはベンガラ，緑青等を使って５弁の蓮華文が描かれていた。Ⅱ区では西限の南北溝を検出した。溝はなお南にのび，南限は確認できなかった。1989年８月～10月。　（山本・大脇・立木・深澤・岩永・井上）

埋蔵文化財センター

滝峯才四郎谷遺跡の調査　銅鐸が埋納されている地点が，偶然明らかとなった遺跡において，これに関連する遺構の存在を探査すること，調査の方法を検討すること，出土状態の写真撮影の方法についての指導。静岡県細江町所在。1990年２月　（佐原・西村・牛嶋）

盛岡城石垣修理に伴う調査　５ケ年計画の石垣移動量計測の最終年にあたり，これまでの計測値の検討，報告書編集，今後の計画について，現地で研究会をおこなった。　（伊東・内田）

長登製銅所の発掘調査　山口県美祢郡美東町大切。東大寺大仏鋳造の銅を供給したと伝えられる長登銅山を町教育委員会が３年計画で発掘調査を行うことになった。本年度は遺跡の範囲確認調査。奈良時代～平安時代の大量の土器類，羽口用の粘土採掘拡などを検出。　（巽）

奈良国立文化財研究所要綱

Ⅰ　事業概要

1　研究普及事業

公開講演会

(1)　1989年５月20日　第64回公開講演会
「平城京再現－研究成果と課題－」鈴木　嘉吉
「平城京発掘30年－その光と影－」青山　茂

(2)　1989年11月18日　第65回公開講演会
「犬，猿，馬－古代人の生活と動物－」
松井　章
「馬をめぐる古代のまつり」　金子　裕之

現地説明会

(1)　1989年４月15日　頭塔　巽　淳一郎

(2)　1989年５月６日　平城宮跡第198次－B
（平城京左京二条二坊五坪）　小池　伸彦
森　公章

(3)　1989年７月１日　平城宮跡第202次－５次
（平城京左京三条二坊六坪）　田辺　征夫

(4)　1989年８月19日　薬師寺東面回廊
井上　和人

(5)　1989年９月２日　平城宮跡第204次
（平城京左京二条二坊五坪）　高瀬　要一
渡邉　晃宏

(6)　1989年９月16日　平城宮跡第203次
（朝堂院東三堂）　千田　剛道

(7)　1989年９月30日　奥山久米寺金堂跡
岩永　省三

(8)　1989年11月18日　平城宮跡第209次
（西隆寺）　島田　敏男

(9)　1989年12月２日　山田寺跡第７次川越　俊一

(10)　1989年12月16日　平城宮跡第206次
（兵部省）　村上　隆

(11)　1990年３月17日　平城宮跡第205・206次
（兵部省）　松本　修自

平城宮跡資料館・遺構展示館

見学者数

区　分	資料館	遺構展示館	計
1989年	75,352	84,183	159,535
累　計	1,033,312	1,349,090	2,382,402

資料館は1970年度，遺構展示館は1963年度以降の累計

2　1989年文部省科学研究費補助金による研究

種　別	研　究　課　題	研究代表者	交付額
特別推進研究（２）	古年輪変動データの分析による考古歴史研究方法の確立	田中　琢	3,000千円
重点領域研究（１）	東南アジア考古学の基本資料の収集及びデータベース作成のための整理	花谷　浩	1,500
重点領域研究（２）	北ユーラシア、アメリカ大陸における家犬の伝播とその系統について	松井　章	1,200
総合研究（A）	原始古代の環境復原に関する新方法の開発	佐原　真	13,800
一般研究（A）	データベースの開発による近世社寺建築研究の総括	松本修自	5,000
一般研究（B）	古墳から出土する青銅遺物に見られるブロンズ病の成因と劣化防止に関する研究	肥塚隆保	1,000
一般研究（C）	条坊，条里研究史に関する資料収集とその研究－北浦定政を中心として－	岩本次郎	300
〃	西日本出土の縄文－古墳時代木器の集成的研究－	上原真人	600
〃	「型」を用いた考古遺物に関する基礎的研究	大脇　潔	500
〃	平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定	巽　淳一郎	1,000
〃	石造文化財における経年変化の定量的解析に関する研究	内田昭人	1,900

奨励研究(A)	弥生時代祭祀用具の編年的研究	岩永省三	800
〃	獣帯鏡の研究－その編年と意義－	立木　修	800
〃	漢代までの中国における高床式建築の研究－考古発掘資料の集成及びその民族誌－	浅川滋男	900
〃	浄土庭園をとりまく環境構成に関する研究	本中　真	900
〃	古代鍍金技術の材料科学的研究	村上　隆	700
試験研究(1)	地名データベースの作成と利用法の確立	木全敬蔵	2,400
〃	コンピュータグラフィックによる埋蔵文化財情報管理システムの開発	工楽善通	17,500
〃	航空写真情報データベース構築におけるデータ入力法の開発研究	伊東太作	6,300
研究成果公開促進費(データベース)	埋蔵文化財文献情報データベース	岩本次郎	6,930
計	20件		67,030

3　飛鳥資料館の運営

展　示

第一展示室　常設展示

第二展示室

春期特別展示「仏舎利埋納」

1989.4.5～5.28　54日間

秋期特別展示「法隆寺金堂壁画　飛天」

1989.10.4～11.23　51日間

特別講演会

1989年4月22日

「中国の舎利容器－法門寺の出土品を中心として－」　坪井　清足

1989年5月9日

「インドのストゥーパと舎利」　桑山　正進

1989年10月28日

「法隆寺金堂壁画の飛天」　濱田　隆

普　及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。

また，特別展示の図録として「仏舎利埋納」及び「法隆寺金堂壁画飛天」を刊行した。

入館者数(1989.4.1～1990.3.31　開館日数315日)

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	68,201	9,517	178,869	21,847	200,716
高・大生	11,221	22,324			
小・中生	11,167	56,439			
計	90,589	88,280			

陳列品購入

立体スライドカラー写真

4　埋蔵文化財センターの研修・指導

研　修　埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(土師器・須恵器調査課程)
1989年5月9日～5月17日(参加者29名)

(2) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修(埋蔵文化財基礎課程)
1989年5月24日～6月1日(参加者39名)

(3) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(保存科学課程)
1989年6月8日～6月28日(参加者20名)

(4) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺跡探査課程)
1989年7月5日～7月14日(参加者7名)

(5) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺跡測量課程)

1989年９月５日～10月４日（参加者14名）

(6) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡保存整備課程）
1989年10月12日～11月７日（参加者14名）

(7) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡環境課程）
1989年11月14日～11月30日（参加者22名）

(8) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（埋蔵文化財情報課程）
1989年12月７日～12月21日（参加者29名）

(9) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（縄文土器調査課程）
1990年１月10日～１月23日（参加者22名）

(10) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修（城館遺跡調査課程）
1990年１月30日～２月２日（参加者39名）

(11) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（弥生土器調査課程）
1990年２月14日～２月23日（参加者23名）

(12) 平成元年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（生物環境課程）
1990年３月６日～３月23日（参加者15名）

発掘調査・保存・整備・探査指導

（北海道）開陽丸，手宮洞窟，静川遺跡，（青森県）根城跡，（岩手県）毛越寺庭園，平泉遺跡群，志波城跡，（宮城県）多賀城跡，日の出山瓦窯跡群，（秋田県）大湯環状列石，払田柵跡，（山形県）西田遺跡，（福島県）薬師寺石仏，慧日寺跡，大戸古窯跡群，（栃木県）足利学校跡，下野国分寺跡，下野国府跡，（群馬県）宇通遺跡，（千葉県）王賜銘鉄剣，（富山県）じょうべのま遺跡，（石川県）能登国分寺（福井県）二子山古墳，野々宮廃寺，一乗谷朝倉氏遺跡，（山梨県）宮ノ前遺跡，（長野県）森将軍塚古墳，須恵器・製炭窯跡，高梨館跡，（岐阜県）塚原遺跡，東氏館跡庭園，苗木城跡，加納城跡，（静岡県）勝間田城跡，久野城跡，片山廃寺，古新田遺跡，大須賀城跡，滝峯才四郎谷遺跡，（愛知県）朝日遺跡出土銅鐸，（三重県）伊賀国府推定地，西が谷古窯跡推定地，斎宮跡，縄生廃寺，旧崇広堂，（滋賀県）円城寺善法院庭園，雪野山古墳，南滋賀廃寺，崇福寺跡，宮山二号墳，安土城跡，孤篷寺庭園，安養寺庭園，（京都府）千代川遺跡，大覚寺大沢池，恭仁京跡，蛭子山，作山古墳，平等院庭園，コクバラノ遺跡，遠所遺

研修員一覧表

氏名	所属	受入れ期間	受入れ部局	研究・研修内容
伊藤幸司	(財)大阪市文化財協会調査課	1989.4.1～1990.3.31（毎水曜日）	埋蔵文化財センター	遺物保存処理研修
佐賀和美	同上	同上	同上	同上
福田哲也	三重県教委県外研修生（松坂市立鎌田中学教諭）	1989.7.1～1990.8.31	平城宮跡発掘調査部	埋蔵文化財の発掘調査及び保存研修
三枝義久	同上（三重県立桑名西高校教諭）	同上	同上	同上
パメラ・バンディバー	アメリカ・スミソニアン研究機構保存科学研究員	1989.7.12～1989.8.27	埋蔵文化財センター	土器製作技法研究
山岡裕	三重県教委県外研修生（名張市立長田小学校教諭）	1989.9.1～1989.9.30	平城宮跡発掘調査部	埋蔵文化財の発掘調査及び保存研修
東成志	同上（海山町立三船中学校教諭）	同上	藤原宮跡発掘調査部	同上
荒木昌俊	同上（楠町立楠小学校教諭）	同上	藤原宮跡発掘調査部	同上
渡辺尚登	三重県教委県外研修生（三重県立四日市西高校教諭）	1989.10.1～1989.10.31	平城宮跡発掘調査部	同上
ワニー・ラハルディ・ワヒディ	インドネシア大学，文学部講師	1989.10.9～1989.10.16 1989.11.3～1989.12.10	埋蔵文化財センター	考古学方法論研究
任式楠	中国社会科学院考古研究所副研究員	1989.9.8～1990.12.3	同上	弥生文化研究
ソロビヨフ・アレキサンダー・イワノビッチ	ソ連科学アカデミーシベリヤ支部・歴史，言語，哲学研究所上級研究員	1989.11.1～1990.2.12	同上	遺物保存処理研修
サガラーエフ・アンドレイ・マルコビッチ	同上	1990.3.4～1990.3.16	同上	同上

跡群，物集女車塚古墳，篠遺跡，長岡京跡，（大阪府）津堂城山古墳，海会寺跡，峯ケ塚古墳，（兵庫県）庄荘園遺跡，西安田長野遺跡，桜ケ丘銅鐸銅戈，大山城跡，赤穂城跡，篠山城跡，真南条古墳，播磨国分寺跡，中道子山城跡，人塚古墳，大部荘荘園，小犬丸遺跡，長尾廃寺，神子ケ谷古墳群，戎町遺跡，野村構居跡，但馬国分寺跡，祢布ケ遺跡，川原遺跡，砂入遺跡，（奈良県）ナガレ山古墳，（和歌山県）田屋遺跡，川辺遺跡，（鳥取県）馬場遺跡，伯耆国庁跡，梶山古墳，（島根県）荒神谷遺跡，清水寺本堂，（岡山県）美作国府跡，（広島県）三ツ城古墳，草戸千軒町遺跡，（山口県）朝田墳墓群，周防国府推定地，大内氏遺跡，萩城跡，延行条里遺跡，綾羅木郷遺跡，長登銅山跡製練跡，周防国衙跡，串崎城跡，（香川県）王墓山古墳，讃岐国分寺跡，川上古墳，弘福寺領讃岐国山田郡田図，紫雲出山遺跡，長尾寺経幢，（愛媛県）来住廃寺，古照遺跡，（福岡県）王塚古墳，鴻臚館跡，板付遺跡，能古島江戸期古窯跡，両岡様前方後円墳，野方遺跡，筑後国府跡，（佐賀県）吉野ケ里遺跡，名護屋城跡，陣跡，馬郡・竹原遺跡群，大黒町遺跡，（長崎県）土井の浦窯跡，石田城跡，（熊本県）古代鞠智城，網田焼窯跡，（大分県）大分元町石仏，普光寺磨崖仏，川部・高森古墳群，（宮崎県）蓮ケ池横穴群，国衙・郡衙・古寺跡分布調査，（鹿児島県）指宿橋牟礼川遺跡包含地，（沖縄県）喜友名東原ヌバタキ遺跡，仲原遺跡，宇堅貝塚，今帰仁城跡，糸数城跡，首里城跡，フルスト原遺跡，

埋蔵文化財ニュース刊行

第67号　1987年度刊行埋蔵文化財発掘調査報告に関する情報調査

第68号　保存科学関係文献目録—遺物・遺構編

5　その他

委員会等

第16回飛鳥資料館運営協議会

1989年5月23日　於 飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1989年6月15・16日 於 平城宮跡資料館講堂

外国出張

佐原　真　環太平洋先史学会議並びに文化庁とスミソニアン研究機構との共同研究のため，アメリカ合衆国へ出張

1989年8月1日～1989年8月23日

田中　琢　ソ連アルタイ地方所在古墳調査に関するアカデミーシベリア支部歴史，言語，哲学研究所への助言のため，ソビエト共和国へ出張

1989年8月18日～1989年9月1日

田中　琢　韓国国立中央博物館による発掘調査視察及び意見交換のため，大韓民国へ出張

1989年10月23日～1989年10月29日

井上和人　タイ東北地方における先史時代生産遺跡の発掘調査のため，タイ国へ出張

1989年11月16日～1990年1月26日

沢田正昭　東アジア青銅器の保存についての共同研究のため，アメリカ合衆国へ出張

1989年12月4日～1989年12月17日

上野邦一　ラオス国チャンプサック市にあるワット・プー遺跡の発掘調査と遺跡保存指導のため，ラオス国及びタイ国へ出張

1989年12月4日～1990年2月10日

黒崎　直　中南米における古代都市・宮殿・神殿遺跡の比較研究のため，メキシコ国，ペルー国及びブラジル国へ出張

1990年1月15日～1990年3月14日

金子裕之　スミソニアン研究機構との共同研究－縄文土器の技法・組成の研究－のため，アメリカ合衆国へ出張

1990年2月18日～1990年3月3日

村上　隆　スミソニアン研究機構との共同研究－青銅器の材質，古代鍍金技法の解明の研究－のため，アメリカ合衆国へ出張

1990年2月18日～1990年3月3日

牛川喜幸　インド仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究のため，インド国へ出張

1990年3月8日～1990年3月17日

松沢亜生　ヨーロッパ・アメリカ旧石器文化と日本旧石器文化の比較研究のため，イギリス，スウェーデン，デンマーク，フランス，エジプト及びケニアの各国へ出張

1990年3月28日～1990年6月27日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが，1989年度の状況は下記のとおりである。

区　分	面　積	金　額
1989年度	4,884.07	235,496,776
国有地合計	326,321.51	6,511,518,211

Ⅱ　図書及び資料

図書　114,374冊　　(1990.3.31)

区　分	種　別	購　入	寄　贈	計
1989年度	和漢書	1,574	4,362	5,936
	洋　書	114	317	431
累　計	和漢書	46,343	61,233	107,576
	洋　書	5,482	1,316	6,789

写真　401,609点（1989年度末）

Ⅲ　研究成果刊行物

1　1989年度刊行物

	名　　称
史　科	第32冊　山内清男考古資料２
図　録	第21冊　仏舎利埋納
	第22冊　法隆寺金堂壁画飛天
報告書等	1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報20
	平城宮発掘調査出土木簡概報21

2　前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名　　称
1954	第１冊　仏師運慶の研究
	第２冊　修学院離宮の復原的研究
1955	第３冊　文化史論叢
1956	第４冊　奈良時代僧房の研究
1957	第５冊　飛鳥寺発掘調査報告
1958	第６冊　中世庭園文化史
	第７冊　興福寺食堂発掘調査報告
1959	第８冊　文化史論叢Ⅱ
	第９冊　川原寺発掘調査報告
1960	第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊　院の御所と御堂－院家建築の研究－
1962	第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶
	第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察
	第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究
	第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査
1963	第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査
1965	第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査
	第18冊　小堀遠州の作事
1967	第19冊　藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊　名物裂の成立
1971	第21冊　研究論集Ⅰ
1973	第22冊　研究論集Ⅱ
1974	第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査
	第24冊　高山－町並調査報告－
1975	第25冊　平城京左京三条二坊
	第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ
	第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ
	第28冊　研究論集Ⅲ
	第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－
1976	第30冊　五条－町並調査の記録－
1977	第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ
	第32冊　研究論集Ⅳ
	第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告
	第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ
1978	第35冊　研究論集Ⅴ
	第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ
1979	第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ
	第38冊　研究論集Ⅵ
1980	第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ
1981	第40冊　平城宮発掘調査報告XI
1984	第41冊　研究論集Ⅶ
	第42冊　平城宮発掘調査報告XII
	第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展
1985	第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告
1986	第45冊　薬師寺発掘調査報告
1988	第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書
1988	第47冊　研究論集Ⅷ

奈良国立文化財研究所史料

年度	名　　称
1954	第1冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）
1955	第2冊　西大寺叡尊伝記集成
1963	第3冊　仁和寺史料　寺誌編1
1964	第4冊　俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊　平城宮木簡1　図版
1967	第6冊　仁和寺史料　寺誌編2
1969	第5冊　平城宮木簡1　解説（別冊）
1970	第7冊　唐招提寺史料1
1974	第8冊　平城宮木簡2　図版・解説
	第9冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ
1975	第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ
1976	第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ
1977	第12冊　藤原宮木簡1　図版・解説
	第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ
1978	第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ
	第15冊　東大寺文書目録第1巻
1979	第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ
	第17冊　平城宮木簡3　図版・解説
	第18冊　藤原宮木簡2　図版・解説
	第19冊　東大寺文書目録第2巻
1980	第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ
	第21冊　東大寺文書目録第3巻
1981	第22冊　七大寺巡礼私記
	第23冊　東大寺文書目録第4巻
1982	第24冊　東大寺文書目録第5巻
	第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ
1983	第26冊　東大寺文書目録第6巻
1984	第27冊　木器集成図録－近畿古代編－
1985	第28冊　平城宮木簡4　図版・解説
	第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻
1988	第30冊　山内清男考古資料1　真福寺貝塚資料他
	第31冊　平城宮出土墨書土器集成　Ⅱ

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名　　称
1973	第1冊　瓦編1　解説
1974	第2冊　瓦編2　解説
1975	第3冊　瓦編3
1976	第4冊　瓦編4
	第5冊　瓦編5
1978	第6冊　瓦編6
1979	第7冊　瓦編7
1980	第8冊　瓦編8
1983	第9冊　瓦編9

飛鳥資料館図録

年度	名　　称
1976	第1冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇
1977	第3冊　日本古代の墓誌
1978	第4冊　日本古代の墓誌　銘文篇
	第5冊　古代の誕生仏
1979	第6冊　飛鳥時代の古墳－高松塚とその周辺－
1980	第7冊　日本古代の鴟尾
1981	第8冊　山田寺展
1982	第9冊　高松塚拾年
1983	第10冊　渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－
	第11冊　飛鳥の水時計
	第12冊　小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－
1984	第13冊　藤原宮－半世紀にわたる調査と研究－
1985	第14冊　日本と韓国の塑像
	第15冊　飛鳥寺
1986	第16冊　飛鳥の石造物
1987	第17冊　萬葉乃衣食住
	第18冊　壬申の乱
1988	第19冊　古墳を科学する
	第20冊　聖徳太子の世界

Ⅳ　定　員

区　分	指定職	行政職(一)	行政職(二)	研究職	計
1989年度	1	22	3	62	88
1990年度	1	22	3	60	86

Ⅴ　予　算（1989年度）

人　件　費	583,219千円
運　営　費	880,050
事　業　管　理	5,371
一　般　会　計	56,911
特　別　研　究	23,487
発　掘　調　査	478,184
宮跡整備管理	64,283
飛鳥資料館運営	47,653
埋蔵文化財センター運営	46,389
新庁舎維持管理等経費	28,024
飛鳥藤原宮跡発掘調査部施設新営に伴う経費	129,748

施設費	338,450
施設整備費	0
平城宮跡等整備費	324,553
各所修繕費	13,879
計	1,801,719

Ⅵ 施設

土地

奈良国立文化財研究所所管	47,890㎡
本庁舎	8,860㎡
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515㎡
飛鳥資料館	17,092㎡
郡山宿舎(二)	80㎡
飛鳥資料館宿舎	1,343㎡
文化庁所管（関係分）	1,412,978㎡
平城宮跡地区	1,081,616㎡
藤原宮跡地区	326,321㎡
飛鳥稲淵宮殿跡地区	5,041㎡

建物　28,435㎡

1．庁舎　27,844㎡

区分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥資料館	藤原宮跡	計
	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡
事務室	568	122	197	90		977
研究・整理室	1,419	1,368	1,149	77		4,013
資料・図書室	1,021		383	36		1,440
会議室	338		129	42		509
講堂		384	210	89		683
展示室		845	254	648		1,747
写真室	79	256	149	64		548
遺構展示棟		1,408				1,408
車庫	84	968	352	94		1,498
倉庫・収蔵庫	123	4,772	2,041	480		7,416
研修棟	1,416					1,416
その他	1,673	1,856	1,562	1,062	36	6,189
計	6,721	11,979	6,426	2,682	36	27,844

2．宿舎等　591㎡

重要文化財旧米谷家住宅	213㎡
郡山宿舎(一), (二)	153㎡
飛鳥資料館宿舎	225㎡

主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費　千円

平城宮跡宮内省西南殿復原工事	124,630
平城宮跡整備棟新営工事	80,958
平城宮跡環境整備平成元年度第Ⅰ期工事	95,584
平城宮跡朱雀門周辺松移植平成元年度工事	6,283
藤原宮跡環境整備平成元年度工事	4,893

(2) 官庁営繕費

飛鳥資料館機械特別修繕工事	35,226

(3) その他（各所修繕・庁費）

平城宮跡第1・2収蔵庫棟消火栓設備工事	4,275
研修寄宿棟衛生施設改修工事	6,901
平城宮跡第3収蔵庫空気調和設備工事	2,266

Ⅶ 人事移動　(1989.4.1～1990.3.31)

4月1日　庶務部庶務課長に昇任　中川　良和
飛鳥資料館庶務室長に昇任　柿本　治
庶務部会計課に配置換　松本　正典
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室に配置換　花谷　浩
埋蔵文化財センター教務室に転任　新井　伸一
文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第三調査室）に採用　小澤　毅
文部技官（平城宮跡発掘調査部史料調査室）に採用　渡邉　晃宏
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用　南　時夫
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用　西川　寿勝
国立極地研究所事業課長に転任　赤羽　鉀一
奈良工業高等専門学校庶務課長に転任　織田　健蔵
文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官に配置換　加藤　優
文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官に転任　清水　真一

5月1日　庶務部会計課用度係長に昇任　小林　雅文
庶務部会計課経理係経理主任に配置換　岡本　安司
庶務部会計課専門職員に転任　新井　耕治
奈良国立博物館管理課会計係長に転任

西村　博美
6月1日　庶務部会計課経理係長に昇任
新湯　淳史
大阪大学レーザー核融合研究センター業務第二掛長に転任　黒坂　雅基
7月1日　平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
井上　和人
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任　山岸　常人
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任　立木　修
8月1日　平城宮跡発掘調査部専門職員に昇任
井上　直夫
10月1日　庶務部庶務課課長補佐に昇任
石塚　幸男
京都大学庶務部人事課課長補佐に転任
石田　和樹
辞職　植田よし子
10月16日　庶務部会計課課長補佐に昇任
津田富士夫
京都大学医学部付属病院医事課課長補佐に転任　益田　朗
11月1日　事務補佐員（庶務部会計課）に採用
吉田　和子
12月1日　文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官に配置換　田中　哲雄
1月1日　平城宮跡発掘調査部考古第一調査室専門員に昇任　佃　幹雄
文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第一調査室専門職員）に採用牛嶋　茂
辞職　神田　高士
2月28日　辞職　岩本　次郎
3月1日　埋蔵文化財センター情報資料室長に昇任　伊東　太作
3月31日　辞職　小林　謙一
辞職　河村裕一郎

Ⅷ　組織規程

文部省組織令〈抜粋〉

昭和59年6月28日　政令第227号

第2章　文化庁

第3節　施設等機関

（施設等機関）

第108条　文化庁長官の所轄の下に，文化庁に国立国語研究所を置く。

2　前項に定めるもののほか，文化庁に次の施設等機関を置く。

（中略）

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

3　国立文化財研究所及びその支所の名称，位置及び内部組織は，文部省令で定める。

文部省設置法施行規則〈抜粋〉

昭和28年1月13日　文部省令第2号

第5章　文化庁の施設等機関

第4節　国立文化財研究所

第1款　名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9　国立文化財研究所の名称及び位置は，次の表に掲げるとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は，所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務部，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか，奈良国立文化財研究所に，飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に，次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理するこ

と。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し，連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては，次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持，管理に関する事務を処理すること。

五　庁内の取締りに関すること。

第126条　削除

（建造物研究室等の事務）

第127条　建造物研究室においては，建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

2　歴史研究室においては，考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，考古第三調査室，遺構調査室，計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，平城宮跡に関し，次項から第6項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行う。

3　考古第一調査室，考古第二調査室及び考古第三調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，遺構調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し，次項から第5項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行う。

3　考古第一調査室及び考古第二調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては，飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し，国民の理解を深めるため，この地域に関する考古資料，歴史資料その他の資料を収集し，保管して公衆の観覧に供し，あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行う。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に，館長を置く。

2　館長は，館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に，庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては，飛鳥資料館の庶務，会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては，次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料，歴史資料，建造物，絵画，彫刻，典籍，古文書その他の資料の収集，保管，展示，模写，模造，写真の作成，調査研究及び解説を行うこと。

二　飛鳥地域に関する図書，写真その他の資料の収集，整理，保管，展示，閲覧及び調査研究を行うこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及

び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては，次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し，調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して，専門的，技術的な研修を行うこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，専門的，技術的な指導及び助言を行うこと。

四　埋蔵文化財に関する情報資料の作成，収集，整理，保管及び調査研究を行い，並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，その利用に供すること。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は，埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センターに，教務室，研究指導部及び情報資料室を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては，研修の実施に関する事務を処理するほか，埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の六室及び事務）

第137条　研究指導部に，考古計画研究室，集落遺跡研究室，発掘技術研究室，遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2　考古計画研究室においては，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3　集落遺跡研究室においては，集落遺跡に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室，遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

4　発掘技術研究室においては，遺跡の発掘技術に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5　遺物処理研究室においては，遺物の処理に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6　測量研究室においては，埋蔵文化財の測量に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7　保存工学研究室においては，遺跡の保存整備に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

（情報資料室の事務）

第138条　情報資料室においては，第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

（客員研究員）

第139条　奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2　客員研究員は，所長の命を受け，奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3　客員研究員は，非常勤とする。

改正　昭和43年6月15日　文部省令第20号
昭和45年4月17日　文部省令第11号
昭和48年4月12日　文部省令第6号
昭和49年4月11日　文部省令第10号
昭和50年4月2日　文部省令第13号
昭和51年5月10日　文部省令第16号
昭和52年4月18日　文部省令第10号
昭和53年4月5日　文部省令第19号
昭和53年9月9日　文部省令第33号
昭和55年4月5日　文部省令第14号
昭和55年6月25日　文部省令第23号
昭和58年10月1日　文部省令第25号
昭和59年6月30日　文部省令第37号
昭和63年4月8日　文部省令第12号

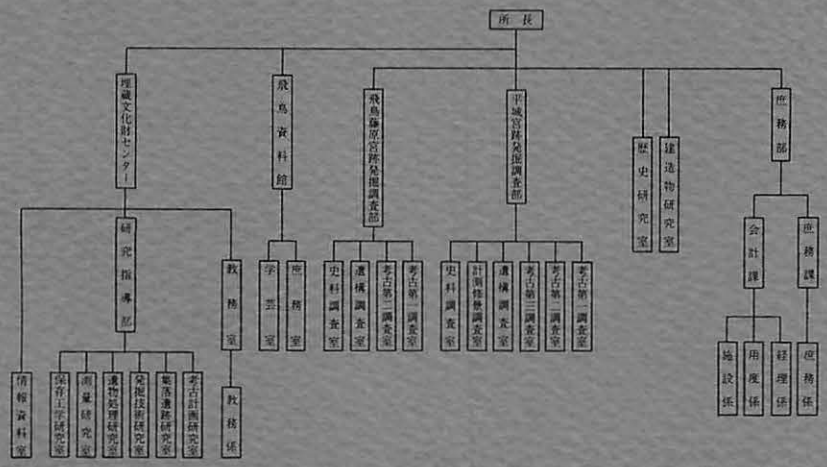
職　員　(1990年7月1日現在)

所属		氏名	官職	担当
		鈴木　嘉吉	文部技官　所長	
庶務部	庶務課	小菅　康男	文部事務官　部長	
		中川　良和	文部事務官　課長	
		石塚　幸男	文部事務官　課長補佐	
		西田　健三	文部事務官　専門職員	平城事務
		大梶　宏	文部事務官　庶務係長	
		石田　義則	文部事務官	庶務人事
		森田　光治	文部事務官　警務員長	警備
		岡田　博旡	文部事務官　警務員	警備
		港　悦子	事務補佐員	庶務
		大西　和子	事務補佐員	庶務
		福本　良子	事務補佐員	庶務
		新宮　恵子	事務補佐員	庶務
		巽　月子	事務補佐員	庶務
		本中　宣代	事務補佐員	図書資料
		中川かよ子	事務補佐員	図書資料
		中垣　睦美	事務補佐員	図書資料
		西嶋　富美	事務補佐員	図書資料
		石川千恵子	研究補佐員	公開
	会計課	松岡　進	文部事務官　課長	
		津田冨士夫	文部事務官　課長補佐	
		小野　祐治	文部事務官　課長補佐	
		渡辺　康史	文部技官　専門職員	整備管理
		阪本　勇	文部技官　専門職員	施設
		新井　耕治	文部事務官　専門職員	藤原事務
		新湯　淳史	文部事務官　経理係長	
		岡本　安司	文部事務官　経理主任	
		宍戸　雅子	事務補佐員	経理
		河村　京子	事務補佐員	経理
		吉田　和子	事務補佐員	経理
		小林　雅文	文部事務官　用度係長	
		松本　正典	文部事務官	用度
		飯田　信男	文部技官	自動車運転
		小坂由紀子	事務補佐員	用度
		細井　雅子	事務補佐員	用度
		阪本　勇	文部技官　施設係長(兼任)	
		小園　秀彦	文部技官	施設
		橋元　敬子	事務補佐員	施設
建造物研究室		宮本長二郎	文部技官　室長	建築
		山岸　常人	文部技官　(併任)	建築
		浅川　滋男	文部技官　(併任)	建築
		島田　敏男	文部技官　(併任)	建築
		小野　健吉	文部技官　(併任)	遺跡庭園
		田中　淡	調査員　(非常勤)	建築
歴史研究室		綾村　宏	文部技官　室長	歴史
		小池　伸彦	文部技官　(併任)	考古
		森　公章	文部技官　(併任)	歴史
		花谷　浩	文部技官　(併任)	考古
		橋本　義則	文部技官　(併任)	歴史
		松井　章	文部技官　(併任)	考古
		堀池　春峰	調査員　(非常勤)	歴史

所属		氏名	官職	担当
平城宮跡発掘調査部		町田　章	文部技官　部長	
	考古第一調査室	金子　裕之	文部技官　室長	考古
		小池　伸彦	文部技官	考古
		森本　晋	文部技官	考古
	考古第二調査室	毛利光俊彦	文部技官　室長	考古
		玉田　芳英	文部技官	考古
		杉山　洋	文部技官	考古
		巽　淳一郎	文部技官　(併任)	考古
	考古第三調査室	山崎　信二	文部技官　室長	考古
		小澤　毅	文部技官	考古
		佐川　正敏	文部技官　(併任)	考古
	遺構調査室	上野　邦一	文部技官　室長	建築
		浅川　滋男	文部技官	建築
		島田　敏男	文部技官	建築
		松本　修自	文部技官　(併任)	建築
	計測修景調査室	高瀬　要一	文部技官　室長	遺跡庭園
		小野　健吉	文部技官	遺跡庭園
		本中　真	文部技官　(併任)	遺跡庭園
		村岡　正	調査員　(非常勤)	遺跡庭園
	史料調査室	町田　章	文部技官　室長(事務取扱)	
		村上　隆	文部技官	保存科学
		森　公章	文部技官	歴史
		渡邉　晃宏	文部技官	歴史
		舘野　和己	文部技官　(併任)	歴史
		寺崎　保広	文部技官　(併任)	歴史
		細見　啓三	文部技官　主任研究官	建築
		巽　淳一郎	文部技官　主任研究官	考古
		松本　修自	文部技官　主任研究官	建築
		舘野　和己	文部技官　主任研究官	歴史
		本中　真	文部技官　主任研究官	遺跡庭園
		寺崎　保広	文部技官　主任研究官	歴史
		佐川　正敏	文部技官　主任研究官	考古
		西田　健三	文部事務官　事務総括(兼任)	事務
		森田　光治	文部事務官　(兼任)	警備
		岡田　博旡	文部事務官　(兼任)	警備
		佃　幹雄	文部技官　専門員	写真
		井上　直夫	文部技官　専門職員	写真
		牛島　茂	文部技官　専門職員	写真
		吉村　司朗	技能補佐員	保守
飛鳥藤原宮跡発掘調査部		牛川　喜幸	文部技官　部長	
	考古第一調査室	黒崎　直	文部技官　室長	考古
		花谷　浩	文部技官	考古
		深澤　芳樹	文部技官　(併任)	考古
		井上　直夫	文部技官　(併任)	写真
	考古第二調査室	大脇　潔	文部技官　室長	考古
		岩永　省三	文部技官	考古
		西口　寿生	文部技官　(併任)	考古

所属		氏名	官職	担当
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	遺構調査室	山本　忠尚	文部技官　室長	考古
		山岸　常人	文部技官（併任）	建築
	史料調査室	川越　俊一	文部技官　室長	考古
		安田龍太郎	文部技官（併任）	考古
		立木　修	文部技官（併任）	考古
		橋本　義則	文部技官（併任）	歴史
		安田龍太郎	文部技官　主任研究官	考古
		西口　寿生	文部技官　主任研究官	考古
		山岸　常人	文部技官　主任研究官	建築
		立木　修	文部技官　主任研究官	考古
		深澤　芳樹	文部技官　主任研究官	考古
		橋本　義則	文部技官　主任研究官	歴史
		新井　耕治	文部事務官　事務総括(併任)	事務
		山下　洋子	事務補佐員	事務
		直鳴佐和子	事務補佐員	事務
		稲垣　耕正	技能補佐員	自動車運転
		平山　重利	技能補佐員	保守
		宮川　伴子	研究補佐員	資料整理
		南　時夫	研究補佐員	考古
		西川　寿勝	研究補佐員	考古
		相原　嘉之	研究補佐員	考古
		佐伯　博光	研究補佐員	考古
飛鳥資料館		鈴木　嘉吉	文部技官　館長(事務取扱)	
	庶務室	柿本　治	文部事務官　室長	
		中西　建夫	文部事務官	事務
		乾　春雄	技能補佐員	保守
		藤本　清	警務補佐員	警備
		福井　敏子	業務補佐員	庁務
	学芸室	猪熊　兼勝	文部技官　室長	考古
		岩本　圭輔	文部技官　主任研究官	考古
		千田　剛道	文部技官　主任研究官	考古
		大谷　照子	事務補佐員	事務
		藤沢　一夫	調査員（非常勤）	考古

所属			氏名	官職	担当
埋蔵文化財センター			田中　琢	文部技官　センター長	
	教務室		登り　惇哉	文部事務官　室長	
			新井　伸一	文部事務官	事務
			岩永　恵子	事務補佐員	事務
			牛嶋　茂	文部技官（併任）	写真
	研究指導部		佐原　真	文部技官　部長	
		考古計画研究室	松沢　亜生	文部技官　室長	考古
			山中　敏史	文部技官（併任）	考古
		集落遺跡研究室	工楽　善通	文部技官　室長	考古
			上原　真人	文部技官（併任）	考古
		発掘技術研究室	西村　康	文部技官　室長	考古
			松井　章	文部技官（併任）	考古
		遺物処理研究室	沢田　正昭	文部技官　室長	保存科学
			肥塚　隆保	文部技官（併任）	保存科学
		測量研究室	木全　敬蔵	文部技官　室長	測量
			光谷　拓実	文部技官（併任）	遺跡庭園
			松井　章	文部技官（併任）	考古
		保存工学研究室	佐原　真	文部技官　室長(事務取扱)	
			内田　昭人	文部技官（併任）	建築
			山中　敏史	文部技官　主任研究官	考古
			光谷　拓実	文部技官　主任研究官	遺跡庭園
			肥塚　隆保	文部技官　主任研究官	保存科学
			上原　真人	文部技官　主任研究官	考古
			内田　昭人	文部技官　主任研究官	建築
			松井　章	文部技官　主任研究官	考古
			杉田　繁治	調査員（非常勤）	埋文情報
			泉　拓良	調査員（非常勤）	埋文情報
	情報資料室		伊東　太作	文部技官　室長	測量
			今中　弘幸	文部技官	埋文情報



ANNUAL BULLETIN
OF
THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
1990

CONTENTS

Page

Preface 1
Excavations in the Asuka Area 2
Excavations of the Fujiwara Palace and Capital Sites 10
Wooden Writing Tablets Excavated from the Fujiwara Palace Site 16
Exhibition of the Asuka and Fujiwara Palace Sites Excavations Department 17
Excavations of the Nara Palace and Capital Sites 18
Wooden Writing Tablets Excavated from the *Nijo-Oji*
(Second Avenue of the Nara Capital Site) 36
Wooden Board with Buildings and Garden Drawings 40
Ceremonial Fan Excavated from the *Nijo-Oji* 41
Reserch for Production Site of Sue Ware Excavated from the Nara Palace Site (2) 44
Investigation of Ancient Roof Tiles Owned by the Horyuji Temple 45
Reserch on the Old Documents, "*Kofukuji Betto Shidai Ryakuhon*"
Owned by the Kofukuji Temple 46
Investigation of Old Buildings Located in Old Town "Nara" 51
Investigation of the Buddhist Temples and Shinto Shrines of Edo Period, Wakayama Pref. (2) 52
Investigation of the Buddhist Temples and Shinto Shrines of Edo Period, Tokushima Pref. 54
Excavations of the Osawa-ike Pond in Daikakuji Temple (6) 56
Third Symposium on the Premodern Buddhist Temples and Shinto Shrines 58
Special Exhibition at the Asuka Historical Museum 59
Investigation of Unearthed Animal Bones (6) 60
Preliminary Study on Dendrochronology (9) 61
Data Base System for Immovable Cultural Properties 62
Conservation of Unearthed Artifacts Composed of Different Kinds of Materials 64
Presentation of the Nara Palece Sites 65
Recostruction Plan of Eastern Garden of the Hagi-jo Castle 68
Transfering and Recostruction of Gyoja-do Hall of the Isurugisan Temple 69
Brief Reports on the Research Tours Aboad 70
Open Lectures Held by the Institute during 1989 73
Other Specific Researchs and Surveys 74
Organization and Activities of the Institute 76

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1990